平成３０年３月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１６日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、さいたま放送局の取り組みと今後の予定について報告した。次に、前回の審議会での答申を受け「平成３０年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「平成３０年度関東甲信越地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。その後、ハートネットＴＶ　シリーズ　認知症に“やさしいまち”第３回「若年性認知症の人が働く子ども食堂」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　　員	岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
	杉山　正司（埼玉県立文書館館長）
	野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
	原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）

（主な発言）

＜ハートネットＴＶ　シリーズ　認知症に“やさしいまち”
第３回「若年性認知症の人が働く子ども食堂」(Ｅテレ　２月１５日(木)放送)
について＞

○　介護施設が週一日、一人親世帯などの家事や経済的負担を減らそうと子どもたちに無料で夕食を提供する「子ども食堂」を運営し、食事作りを担うスタッフとして若年性認知症の方に働いてもらう取り組みが紹介された。従来のレクリエーションを中心としたケアは、６５歳未満で症状が表れた若年性認知症の人はなじみにくいという課題があった中で、働くことがケアだけでなく生きる喜びにもつながるということをし

っかりと伝えていて非常によかった。また、若年性認知症の方のケアと子どもたちの食事のケア、２つの社会的課題に応えるこの取り組みは他の地域にも参考になるので、それを全国に紹介したこともよかったと思う。番組では、若年性認知症の人たちが自分の存在の必要性を認識できるようになって自信を取り戻していく様子が丁寧に描かれており、働く人たちの笑顔がすばらしかった。特に、子どもが猪鼻秀俊さんにオカリナを教えてもらいにいくシーンには、ここで働く人たちが子どもたちから信頼されている様子が表れていて感動した。誰かの役に立ちたいという思いや何かができることの喜び、意欲を持って生きることがいかに大切か、改めて考えさせられる内容だった。また、周りからどう接してもらいたいかという問いに対し、猪鼻さんが「じっくり待ってもらいたい」と答えたことも心に残った。社会が若年性認知症の人たちとどう向き合うかということについても示唆に富んだ番組だったと思う。

○　食事をする子どもたちのおいしそうな、うれしそうな表情が印象的だった。週に一度子どもたちに食事を作ることに生きがいを見いだしている山方宮子さんの笑顔もすてきだった。孤食や栄養など子どもたちの食の問題がクローズアップされる中で、この課題を若年性認知症の方一人一人の生きがいにつなげる取り組みは、２つの課題を相互に解決しうるすばらしいものだと思った。誰かの役に立つことは喜びにつながる。認知症をはじめ、どのような状態であったとしても、ケアする側の人はそのことを大事に考えなければならないと感じた。そうすれば、地域の課題を解決に導く可能性が広がるのではないか。税制上の優遇措置を受けている社会福祉法人が社会貢献を求められている今、その具体的取り組みを示し、他の地域にも参考になる事例として紹介したことを評価したい。このような取り組みが広がってほしいと思う。

○　残念ながら今の社会では、認知症はネガティブなイメージで捉えられがちだと思うが、誰の身にも起こりうる重要な問題だ。番組では、若くして認知症と診断されて仕事や自信を失った人たちが、子どもたちとの交流を通じ、新たな生きがいを見つけて自信を取り戻す姿がしっかりと描かれていて非常によかった。紹介された人は、どの方も一見した限りでは認知症とは思えなかった。年齢を考えても、従来のレクリエーション中心のケアになじめないのは当然だと思う。また、今、子どもの貧困は社会問題になっている。週に一度であっても温かい食事を提供する場を作ることはその意味でも意義深く、それが認知症の人の生きがいにもつながるということが画期的だと思った。他の地域にも広がってほしい取り組みだ。ただ、ここで働く認知症の人たちと子どもたちがどのような関係を築いているのか、もう少し詳しく知りたいと思った。

○　介護と子どもの食の問題を結びつけた発想に驚かされた。番組は、介護する側からされる側になった山方さん、学生の前で講演した猪鼻さん、それぞれの苦しい思いを

伝えた上で、今やりがいを感じている様子をきちんと映像で捉えていたと思う。認知症で辛い思いをしている人が一番よい表情をするのは、介護サービスを受けているときではなく、誰かの役に立てたときだということがとてもよく伝わってきた。それ以外でも、料理のシーンでは、体に染み付いたことはちょっとしたきっかけでよみがえることを、また、生き生きした様子からは、認知症の方はいろいろなことを忘れてしまっても感情がとても豊かになることを、ことばによる説明ではなく映像でしっかりと捉え、説得力を持って伝えていた。何より、認知症になってからオカリナを始めた猪鼻さんの姿は、認知症になってからでも新しいことを覚えられるということを伝えており、やる気や自信が人の可能性を広げていくことを実感させてくれた。３０分という短い時間でこれだけのことをきちんと伝えていたことが非常によかったと思う。この取り組みは若年性認知症の人が対象とのことだったが、もっと高齢の人でも料理ができる人は大勢いる。すべての認知症の人たちに対して有効な取り組みであり、他の人たちにも、まちづくりとしても参考になるものだと思う。その意味では、準備は何時頃から始められているのか、準備することへの集中力に対してどのようなケアを行っているのかなど、この子ども食堂がどのように運営されているのか、もっと具体的に伝えた方がよかったと思う。

○　認知症でなくても年を取れば、記憶力などで若い人たちについていきたくてもついていけないことは日常的にあるが、私は若い人たちと一緒に社会の中で働いていたい。この番組で紹介された人たちは私たちと年齢がほとんど変わらなかった。若年性認知症について自分のこととして考えたときに、認知症と診断されることのショック、社会でまだ働いていたいという思いはどれほどのものかと考えさせられた。それだけに、若年性認知症の人への介護サービスもレクリエーション中心だということが、むしろ衝撃的だった。今、障害者に対しては就労支援の取り組みが行われている。認知症の人に対しても社会で働くためのサポートを行うことが、本来あるべき姿なのではないか。働きたいと思っている人が働ける環境を作らなければ、やる気は失われ、症状が進行してしまうのも無理のないことに思える。この介護施設のような取り組みがもっと脚光を浴びて、全国に広まってほしいと思った。

○　取材の苦労を全く感じることなく、３０分間素直に見られる番組だった。まず若年性認知症の人が全国で推定でも３万８千人もいることに驚かされた。その中で、介護関係者がサポートしながら若年性認知症の人たちが生きがいを感じられる場所を作るこの取り組みは、介護サービスの新たな形としてすばらしいと思った。こうした場所作りはこれからも地域社会でもっと実践されていくべきだと思う。猪鼻さんが学生に対して講演したが、自分のことをさらけ出すことの抵抗感は相当なものだったのではないか。学生たちにとってとても勉強になったと思うし、番組で紹介したことは、

自分たちのことを知ってもらうという意味で多くの認知症の人に希望を与えたと思う。介護する側の働く環境も含めて介護の問題は大きな課題であり、行政や医療の関係者だけでなく、私たち一人一人が考えなければならない。それを身近な問題として考えさせてくれたことが非常によかった。ただ、認知症と言っても症状の程度はさまざまだと思うので、その点についても説明があればなおよかった。

○　働く場を作ることで認知症の人たちの尊厳を守ると同時に、子どもたちの社会性を育んでいくことにも有効な取り組みだと思った。３０分という短い時間に伝えるべきことがうまくまとめられており、素直に見ることができた。異なる課題を相互に解決しようとする福祉のあり方は、これからの社会で非常に重要だと思う。今後もぜひこうした取り組みを継続して紹介してもらいたい。

○　とても参考になる番組だった。どんな困難を抱えている方でも、誰かの役に立てることが本人の生きがい、やる気につながることを具体的に見せてくれた。支援する側、される側というステレオタイプの福祉はもう古いと感じる。その人の理解者となり、その人なりの長所を発見して役割を設ける、あるいは参画型で世話をする側になる、できることを発表する、そんな場作りこそが福祉の主流になってきていると思う。人を元気にする、ふだんの暮らしの中に温かいつながりを生む、関係性を育める、そんな福祉の姿を今後も放送してもらいたい。また、福祉は当事者に学ぶ姿勢を大切にしている。この番組で紹介されたような、当事者自身が自分の気持ちを話したり、どうしてほしいのかを語ったりできるような場作りが求められていると思う。認知症だけでなく、多様な当事者が気持ちを発信するような番組を今後も期待している。

＜放送番組一般について＞

○　ＮＨＫは今年も震災関連の番組を数多く放送していたと思う。

○　３月４日(日)のＮＨＫスペシャル「“河川津波”～震災７年　知られざる脅威～」は、河川を遡上(そじょう)する津波のすさまじさが実際の映像により説得力をもって伝わってきた。海が見えない内陸がどのようにして津波被害に遭うのかを映像と証言とで明らかにしており、テレビでなければ伝えられない内容だった。

○　３月６日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「外国人から見た３．１１～

あの時　世界はどう動いたか？～」で紹介された海外からの支援のことを全く知らなかった。特に、アメリカ軍の救援作戦「オペレーション・トモダチ」の発端が空母の艦長の決断だったことには驚かされた。当時、海外で多くの人が日本を支援してくれたことを伝えてくれたことがよかったと思う。

○　３月７日(水)のＮＨＫスペシャル「被曝(ばく)の森２０１８～見えてきた“汚染循環”～」(総合 後 10:25～11:15)は、私たちがなかなか知ることができない帰還困難区域の汚染の実態とその恐ろしさを伝えていた。長期的な視野で放送し続けてもらいたいテーマだと思う。

○　３月１０日(土)の「津波ピアノ～坂本龍一と東北の７年～」(総合 後 11:25～11:58)は、津波で流されて壊れたピアノを自身の新作に使用し、さらにコンピューターと接続して地震波を音に変換する装置に生まれ変わらせた坂本さんと、ピアノの持ち主だった宮城県農業高校の先生や生徒たちの姿を見つめており、希望の持てる内容に感銘を受けた。

○　３月１１日(日)のＮＨＫスペシャル「めざした“復興”はいま…　～震災７年　被災地からの問いかけ～」は、土地や住宅の整備は進んでも、被災者の“心の復興”が進んでいないことがはっきりと伝わってきた。

○　このほか、３月１０日(土)のＮＨＫスペシャル「誰にも言えなかった～震災の心の傷　母と子の対話～」やＥＴＶ特集「忘却にあらがう～福島原発裁判・原告たちの記録～」、３月１１日(日)の「特集　明日へ　つなげよう　東日本大震災から７年」(総合 前 7:50～8:00、10:05～11:54、後 1:05～5:00)なども見た。震災から７年が経過した今でも、被災地ではさまざまな問題が起きていることがよくわかった。ＮＨＫは、そうしたことを行政の目線ではなく、被災者の目線から取材していることが伝わってきてとてもよかった。これからも被災者に寄り添い、さまざまな観点から取材を継続して、この時期に限らず震災関連の番組を放送し続けてもらいたい。

○　３月１１日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ東日本大震災「めざした“復興”はいま…　～震災７年　被災地からの問いかけ～」を見た。被災地の現状と課題を取材し、巨額の予算を投じた国の復興事業を検証していてよかったのだが、空き地の問題にしても、災害公営住宅で孤立する高齢者の問題にしても、もう少し問題点を端的に明言してもよかったのではないか。また、４月から学校を再開する福島県の５つの自治体の中で飯舘村は、突出して多い７５人もの小中学生が通うことになっていることが伝えられたが、すごいことだと思った。個人的にはその背景に、2010 年以来「日

本で最も美しい村連合」に加盟し、懸命に村づくりに取り組んできたことがあると考えているが、番組ではそうしたことに言及されておらず、他の自治体と並列で取り上げられていてやや残念に思った。最後の復興大臣のインタビューは、それまで伝えられた被災地の現状とはかみ合っていないように感じられた。

○　震災とどのように関わっているかは人それぞれだと思う。被災地で懸命に生きてきた方もいれば、全国にはあまり関わらずに過ごしてきた人もいる。双方の気持ちに寄り添うような伝え方を心がければ、番組を介して関心が高い人と低い人とをつなぐ役割が果たせるのではないか。ＮＨＫは東日本大震災の関連番組を数多く放送しているので、そのような役割を期待したい。また、震災関連の番組では、被災者や行政、ボランティアなど実際に被災地にいる人たちのことは取り上げていたが、全国で行われているイベントなどはあまり取り上げられていなかったように思う。特に３月１１日は各地でさまざまな取り組みが行われているので、そうしたことも機会を見て紹介し、現地に行けなくても復興をサポートしている人たちがいることを伝えてもらいたい。

○　３月１０日(土)のＥＴＶ特集「忘却にあらがう～福島原発裁判・原告たちの記録～」を見た。原発事故被害の責任を問う裁判で勝訴した原告の皆さんの現在の暮らしを描いていた。裁判には勝ってもいつまで続くかわからない不安を抱えながら、その不安さえ言葉にできない苦しい境遇が痛いほど伝わってきた。実際に土地や海が汚染されている中で、農家の方が「実害があるのだから風評被害ではない」と語っていたことには、風評被害ということばによって、原発被害がなかったことにされるのではないかという不安がにじみ出ていて重く心に響いた。また、敷地内で放射線が検出された保育園の先生が子どもたちに笑顔で接する姿には、不安を吐き出せずに押し殺す苦しみが表れていた。このままでは大人たちがつぶれてしまうのではないか。福島県外で電力供給を受けてきた私たち一人一人も、他人事ではなく自分たちのこととして感じなければならない問題で、とても考えさせられる内容だった。

○　３月６日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点　「外国人から見た３．１１～あの時　世界はどう動いたか？～」を見た。アメリカの「トモダチ作戦」の舞台裏、外国人ジャーナリストの報道の力、台湾の学生の募金活動、どれも初めて聞く話ばかりだった。改めて世界各国からの支援に感謝したい。また、支援の後に訴訟が起きていることなども伝えられており、リスクを負いながらも果敢に支援に乗り出してくれたことが丁寧に取材できていたと思う。

○　３月４日(日)の明日へ　つなげよう　ふるさとグングン！「国をこえて交流したい～埼玉・川口市～」(総合 前 10:20～11:08)を見た。住民の半数が中国人となってい

る川口市のマンモス団地を舞台に、住民同士のコミュニケーションがほとんど無いという問題を取り上げていた。番組は、高齢化する日本人住民と暮らし始めたばかりの中国人子育て世代の住民、何とか国を超えた交流を図りたいという自治会役員の思いをよく取材しており、ことばや文化、習慣、世代の違いなどの問題点を丹念に洗い出していた。その上で、住民同士の交流を生み出す名人の西川正さんのアドバイスへとつなげていたことは、課題と解決に向けた取り組みとがとても明確に伝わる伝え方だったと思う。また、ルールを守らないごみ出しや、夜に外で遊ぶ子どもたちの大声など、住民の不満の種も取材しており、お互いの理解が進んでいないと、こうした小さな行き違いがよくない感情を増幅させてしまうことにもしっかり気付かせる内容になっていた。西川さんのアドバイスを経て実施した交流イベントは遊び心にあふれており、お互いを知るよいきっかけになった様子が映像から伝わってきた。そうした住民たちの様子を通して、交流や会話によってお互いを理解することの重要性や、知り合うことが課題解決のきっかけになることを感じさせてくれたことが非常によかったと思う。この地域以外にも、同じような問題を抱えた団地はたくさんあり、とても参考になる番組だったのではないか。

○　３月１２日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「どんな時も、そばにいる～地域医療医師・長純一～」を見た。震災の１年後に長野県から石巻に移り住んだ地域医療医師に密着しており、徹底的に人と地域に寄り添う姿に感銘を受けた。患者とのやり取りからは、被災した方々が抱えている問題が本当にさまざまであることがかいま見えた。その患者たちが先生と話すことで笑顔になる様子に、先生と地域との強い信頼関係が感じられた。同時に番組も、大切な場面をきちんと映像で捉えていて、地域の方々と信頼関係を築きながら取材していたことがうかがえた。震災による心の傷から自殺を図ろうとした女性が、最後に「命の大切さがわかってきたような気がする」と語っていたこと、高齢で死期が迫る女性と自宅で看病を続ける夫婦との心の通ったやりとり、そうした大切な場面を時に控えめに距離を置きながらカメラに収め、映像として伝えたことで、説得力のあるドキュメンタリーになっていたと思う。とてもよい番組だった。

○　ＮＨＫは毎年３月１１日前後に東日本大震災の関連番組を数多く放送しており、今年も力の入ったさまざまな番組を放送していて感心した。しかし、今年はそれ以上にパラリンピックの放送に感心した。ＮＨＫはいつからこんなにパラリンピック関連の番組を放送するようになったかと思うほど、積極的に放送していたと思う。最近、オリンピック・パラリンピックは「オリパラ」と言われるようになった。こうして力を入れて放送することで、パラリンピックがオリンピックと並列で語られるようになったことは、とてもよいことだと思う。今後も力を入れて取り組んでほしい。ただ、ま

だ高い視聴率が取れるまでには至っていないと思う。どれくらい見られているのか、どの程度関心があるのかを知りたいと思った。

（ＮＨＫ側）

今大会のパラリンピックの放送時間は、テレビの計画値で前回のソチ大会と比較して約２倍に増えている。３月９日(金)の「ピョンチャンパラリンピック　開会式」(総合　後 7:59～8:55、Ｅテレ　後 8:55～10:03、Ｅテレ　サブチャンネル後 10:03～10:06)の総合テレビの関東地区の世帯視聴率は、ビデオリサーチの調査で８．７％だった。また、日中の競技中継や夜１０時台に放送している「パラリンピックタイム」でも通常の番組と比較しても劣らない結果が出ており、多くの人に関心を持ってもらえたと考えている。

（ＮＨＫ側）　パラスポーツについては、障害者キャスターの採用やアニメの制作など、さまざまな取り組みを行っている。今回は冬の大会だったが、アニメ「アニ×パラ」ではブラインドサッカーとパラ陸上競技を取り上げた。パラスポーツの魅力が伝わるように、意識的にさまざまな試みを行い始めているところだ。少しでも多くの視聴者に見てもらえたらと思っている。

○　ピョンチャンオリンピックとパラリンピック、東日本大震災の関連番組など、非常に多くの特集番組を丁寧に制作していたが、その多忙な中で通常の番組も再放送ではなく新たに制作していたところにもＮＨＫの努力を感じることができた。ピョンチャンオリンピックのカーリング中継で気になったことがある。カーリングの世界選手権などの中継では、解説者が次にストーンを投げる予想を画面上に線で示しながら戦術を解説しているのだが、オリンピックではそれがなかった。何か理由があるのか。

（ＮＨＫ側）

確認してお答えする。

○　ＮＨＫはピョンチャンオリンピックを積極的に中継していて、楽しませてもらった。また期間中は、新聞のテレビ欄の文章にも目をひかれた。特に大会後半、カーリング中継の原稿で、話題となった「そだねー」や「おやつタイム」「もぐもぐタイム」などのことばを積極的に使っていてひきつけられた。こうしたインパクトのある思い切った原稿は、ＮＨＫらしくはないが、番組によっては有効だと思う。こうした取り

組みも今後継続してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

テレビ欄の原稿は、基本的に視聴者の気持ちに寄り添うことを大切にしてことばを考えている。場合によっては、やりすぎだと思われることもあるかもしれないが、皆様の関心に応えること、気持ちに寄り添うことを心がけ、番組に適したことばを考えていきたい。

○　３月３日(土)のＮＨＫスペシャル　ＡＩに聞いてみた　どうすんのよ！？ニッポン第２回「働き方」(総合 後 9:05～10:04)を見た。特定の作業に用途が限定されない「汎用(はんよう)型ＡＩ」は、今はまだ実用化には課題があると言われている。この番組でＡＩが膨大なデータを解析して導き出した提言にもどこか未熟さを感じた。スタジオの専門家たちの解説は、ＡＩが出した提言の本筋からはかい離しているような感覚を覚え、興味深くはあったのだがこじつけのような印象も受けた。番組内でＡＩの現状や信頼性についても説明した方がよかったのではないか。道の駅に行くことと仕事の満足度の関係性の議論の中で、マツコ・デラックスさんが言っていた「大企業は創業地に帰ればいいのではないか」という提言が番組内で最もふに落ちた解説で、印象的だった。

○　大河ドラマ「西郷どん」で島津斉彬が江戸に向かう道中のシーンに使われていた乗物や傘について、この時代は使用する人物の格によって様式が決まっていたと思う。詳細を論文等と照合まではしていないのだが、ドラマでは厳密には再現されていなかったように見えてやや気になった。

（ＮＨＫ側）

専門家による時代考証をドラマでどこまで再現するかは総合的に判断しているのでご理解いただきたい。

○　「超入門！落語　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ」のシーズン２が３月８日(木)に最終回を迎えた。この番組は、タイトルのとおり落語の世界を再現して映像化しているのだが、落語家の語りに寸分たがわず役者の口が動いていて驚かされる。落語は本来観客が自分の頭の中で物語を思い描くものだが、こうして映像化することも、若い人やなじみのない人にとっては落語を身近に感じることができて非常によい企画だと思う。落語は古くからある日本の大切な文化であり、後世に伝えるべき芸能なので、今よりももっと多くの人に見てもらえるような時間帯に放送してもらいたい。シーズン３にも期

待している。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年２月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１６日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「ＮＨＫ経営計画　2018－2020 年度」の概要について説明があり、次に、「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画」および「平成３０年度国内放送番組編成計画」について報告があった。引き続き、「平成３０年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　員	岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
	大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
	斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
	杉山　正司（埼玉県立文書館館長）
	野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
	原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）

（主な発言）

＜「平成３０年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案)」について

-諮問-＞

○　防災・減災につながる放送については、記載されているとおりだと思った。実際に災害に直面したときのことをわが身のこととして想像できていない人は多いと思う。そうした人たちが危機意識を持てるような番組も放送してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

継続して取り組まなければならない問題だと認識している。例えば３．１１や９月の防災月間など、折に触れて、防災・減災について考えてもらえるような特集編成を行っていきたい。各放送局ともその意識は共有している。いざというときに動けることが重要なので、一般論としてではなく、視聴者に自分自身のこととして受け止めていただけるような放送を今後も検討していきたい。

○　「首都圏ネットワーク」の「ストップ詐欺被害！私はだまされない」のように、短いコーナー企画を継続的に放送するのは、問題や事例を具体的に伝えるのに効果的だと思う。公共メディアということがうたわれているが、児童虐待防止推進月間や防災月間などの時機を捉え、さまざまなテーマを設けてこうした取り組みを行うとよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

ホームページでは「首都圏防災ナビ」で災害への備えを呼びかけているが、例えば高齢者などで、テレビに比べてホームページには慣れ親しんでいない方がいるのも事実だ。防災をはじめ、いろいろなテーマで短い番組やコーナーを放送することで知識や理解を広めることも検討していきたい。

○　１２月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「激変する世界ビジネス “脱炭素革命”の衝撃」は、地球環境が危機的な状況にあること、そこにビジネスチャンスを見出した人たちを中心に世界が劇的に動いていることを伝えていて、非常にためになる内容だった。それを「Ｎスペ５ｍｉｎ．」という５分に凝縮した形で放送していたが、とてもよい取り組みだと思う。例えば再生可能エネルギーについてどのような取り組みが行われているのかなど、私たちがこれからも生きていくためのヒントになるような、課題に取り組む人たちを取材して具体的な解決の道筋を見せるような短時間の番組を毎日放送すると効果的だと思う。どこかで見てもらえる可能性が高まるのではないか。

（ＮＨＫ側）

環境を守るために身近な取り組みをしている団体は数多くある。そうした取り組みを紹介することで、放送を見た人が「自分もやろう」と感じてもらえることもあると思う。そのような放送も検討していきたい。

○　防災について、千葉県ではＮＨＫ千葉放送局と民放、コミュニティＦＭ局あわせて６局が連携し、緊急時に合同で放送できるような体制作りを何年も行っている。各局の連携はいきなりできることではない。いざというときに力を発揮するための地道な取り組みを評価したい。他の地域でも参考になるのではないか。また、地域の魅力を伝えることについては、各地に頑張っている人がいる。その人たちを紹介することが地域の魅力を紹介すること、ひいては世の中をよくすることにつながると思うので、そうした人の掘り起こしもしっかりと行ってほしい。先ほど環境問題の話が出たが、これだけ危機的な状況が叫ばれているにも関わらず、なぜ行動を起こせないのかと感じている。そのことを本質的に考える番組をぜひお願いしたい。多彩なデジタル展開で幅広い層の接触を拡大するとうたわれているが、若い人、今まで見ていなかった人にも見てもらう地道な努力が、こうした問題解決への行動につながることを期待したい。

○　各放送局とも地域の魅力を発信することを重点事項として挙げているが、地方は少子高齢化や人口減少が進み、東京への一極集中が進行している。地元の取り組みとも連携しながら地域の魅力を伝えることで、人が地域に定着するような放送をぜひお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

関東甲信越にも豊かな自然に恵まれた地域がある。子どもを育てるのによい環境ということで、中には東京から移り住む人も出てきており、そうした動きを伝えたこともある。今後も、地域の魅力を改めて見つめ直すような放送も検討していきたい。

○　地域の魅力を発信することに関しては、一つの共通したテーマについて関東甲信越で地域ごとに異なる魅力を伝えるような番組があるとよいのではないか。かなり前にラジオでそのような番組があり、リスナーからの反響も多かったと聞いている。ぜひ検討してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

既に放送している例もある。関東甲信越には、日本人にはあまり知られていないが外国人観光客が訪れる魅力的な場所がいくつもある。そのような場所をまとめて紹介する番組や、「食」をテーマに各地の魅力を紹介する番組を放送した。金

曜夜７時３０分からの番組は通常は３０分番組だが、７３分に拡大して放送することがある。その時に、東京だけではなく関東甲信越のさまざまな魅力を発信することに意識的に取り組んでいる。今後も継続していきたい。

○　世界に日本を発信する意味でも地域の魅力を伝えていくことは大切だと思う。一方で、地域が世界とつながっているということが実感できるような番組もぜひ検討してもらいたい。

○　原発についての報道は、民放には放送しにくい部分もあるように感じている。ＮＨＫにはぜひ積極的に伝え続けてもらいたい。また、今年は小笠原諸島が返還されて５０年の節目の年だ。歴史や島の魅力を伝えてもらいたい。

○　ＮＨＫのすばらしいところはテレビで言えば４つの波を持っていることだ。ある番組で問題提起をし、それに対して、別の視点からいわばアンサーのような番組を他の波で放送していることがある。そうした一つのテーマで放送されるさまざまな番組をまとめて紹介するような短い番組を作ってもらいたい。

（ＮＨＫ側）

例えば発達障害や子どもの自殺について、総合テレビやＥテレのさまざまな番組で多角的に放送している。さまざまな視点で波の特性を生かしながら、同じテーマを取り上げるような取り組みは今後も検討していきたい。そうした番組の広報についても多角的に検討していきたい。

○　各波の時刻表で平面的に番組を見せるのではなく、共通のテーマについてこの波ではこういう番組がある、といった整理した形での番組広報や、インターネット上で検索できるような仕組みができないか、という問いかけだと思う。ぜひ検討してもらいたい。

○　一般企業は経営方針を発表したら、進捗や結果について検証があり、翌年の方針を出すのが普通だ。来年度の方針について説明があったが、ＮＨＫは結果については公表しているのか。

（ＮＨＫ側）

３か月に１回、四半期業務報告という形で公表している。ホームページでも公開している。

○　この編集計画はＮＨＫからの方針の説明だが、逆に「こういうものが見たい」「こういうことをやってほしい」といった視聴者側の意向を受け止める場はあるのか。

（ＮＨＫ側）

視聴者からの意見は電話やホームページで受けている。寄せられた意向は、番組担当者や制作部局に情報が届く仕組みになっている。また番組モニターでは、番組を見た感想や批評をいただいているが、その中でも「こうした視点でこういうテーマを扱ってほしい」といった要望が寄せられることもある。

○　諮問された「平成３０年度関東甲信越地方放送向け地域放送番組編集計画(案)」について、各委員の皆さんの意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とする答申をしたいと思うが、異議はないか。

○　異議なし。

○　原案を可とし、答申することにする。

（ＮＨＫ側）

原案を可とする答申をいただき、ありがたく思う。いただいたご指摘とご意見を地域放送番組の編集に生かしていく。今後もよろしくお願いしたい。

＜放送番組一般について＞

○　１月から２月にかけての大雪報道について申し上げたい。Ｌ字画面では、積雪量が多いところから順に伝えられていたが、重要なのは積雪量ではなく降雪量がふだんと比べてどれくらい多いのかだ。報道では、大雪の映像とＬ字画面の情報を主として状況が伝えられたが、ふだんとさほど変わらない状況の地域もあったことがわかりにくかった。このような伝え方だと深刻な状況が強調されてしまい、特に観光業で風評被害のような影響があるのではないかと思う。例えば 24 時間の降雪量で前日と比較す

るなど、状況が深刻な地域とそうでない地域とがわかるような伝え方を検討してもらいたい。また、１月１１日(木)に大雪により新潟県三条市で電車が立ち往生した際、テレビでは三条市がどのような状況になっているのかがわからず、現地に行ってはじめて、何が起きてもおかしくない危険な状況にあることがわかった。映像があれば、少なくともそこに住んでいる人にはいつもと違う危険な状況にあることが伝わるはずだ。そのために、国土交通省や自治体などのライブカメラの映像を活用したらよいと思った。あるいは、ＮＨＫの報道の中で、こうしたライブカメラで状況が見られることを告知すれば、視聴者はその映像を見て実際の状況を知ることができる。長時間にわたって電車に閉じ込められた人たちにも、事前に状況がわかり「電車に乗らない」という選択肢もできたはずだ。来年度の編集計画でも、インターネットの活用をうたっている。ぜひ検討してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

Ｌ字での情報発信は各地の放送局ごとに行っているが、積雪量を伝えているところが多い。降雪量は確かに重要なので、検討したい。またＮＨＫは国土交通省と連携し、ライブカメラの映像を生放送できるようにしているが、今回の新潟の大雪では、ＮＨＫのロボットカメラの映像を使って報道していた。放送に使う映像はよく吟味し、状況がより詳しく伝わる報道を心がけていく。

（ＮＨＫ側）

１月１１日の大雪の際は、新潟市で一日８０センチという深刻な積雪となった一方、三条市は気象台の雪の観測地点がないこともあり、行政やＪＲなどとともに主に新潟市に目が行き、三条が情報の空白地帯になってしまった。この反省から、２月の２回目の大雪では、気象レーダーの情報等も注視し、早めに独自のカメラクルーを出して映像を伝えるなどの対応を行った。「ＮＨＫの映像を見て引き返した」といったご意見もいただく報道となった。今後もしっかりと対応していきたいと思っている。

○　１月２３日に草津白根山で噴火があり、１月２４日(水)の「ほっとぐんま６４０」では、噴火後の状況についてもフォローしていた。地域放送局ならではの放送だった。また、１月３１日(水)のＦＭほっとアワー「悲願の初優勝！前橋育英サッカー部 強さの秘密に迫る」では、全国高校サッカー選手権で群馬県勢初の優勝を飾った前橋育

英サッカー部の監督と主将をゲストに迎え、たっぷりと時間を取ってインタビューしていた。これも全国放送ではできない地域放送局ならではの放送でよかったと思う。

○　「ひるまえほっと」や「首都圏ネットワーク」は、自分で試したり体験したりできる身近な情報を伝えていて楽しく見ている。１月２４日(水)の「ひるまえほっと」では、フライパンに材料も調味料も入れてから火にかける調理法「コールドスタート」を特集しており、自分で試してみたら本当においしく調理できて驚いた。友人にも紹介してみたところ同様に驚いていた。また、２月９日(金)の「首都圏ネットワーク」では、都内の大使館をめぐるスタンプラリーを紹介していた。アフガニスタン大使館などが紹介されたが、これまで知らなかったような各国のよい面が体験できるところに魅力を感じ、参加してみたくなった。これからも身近で楽しい情報を期待している。

○　２月２日(金)の金曜イチからスペシャル「今こそ行きたい！築地 魚河岸粋ものがたり」(総合 後 7:30～8:43）は、長年築地で生きてきた人たちの人間味あふれるふれあいが描かれていて、心に残る番組だった。

○　２月５日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「漆を愛する　漆と生きる　塗師（ぬし）・佐藤則武」は、日光東照宮専門の塗師たちの姿を通して、地域の魅力がよく伝わってきた。世界遺産にもなった日光東照宮が、職人たちのこだわりと妥協を許さない姿勢によって、400 年にわたって守られてきたことがよくわかった。「自分の仕事が好き」「仕事が自分を育ててくれた」「漆ラブ」といったことばの一つ一つも印象的で、人の魅力、そして人が支える地域の魅力がよく表れていた。来年度の編集計画でも各放送局が地域の魅力を発信することを重点事項に挙げているので、今後もこのような放送を期待したい。

○　ピョンチャンオリンピックの放送は、出場している選手たちのこれまでの軌跡が丁寧に紹介されていて、競技をより興味深く見ることができる。４年前にメダルを逃し、これまで努力を積み重ねてきた高梨沙羅選手、けがから復帰して会心の演技を見せた羽生結弦選手などのストーリーも含めて楽しく見ている。

○　ピョンチャンオリンピックは、北朝鮮と韓国の選手が一緒に映っている映像に違和感を覚えて、テレビではなくインターネットで見るようにした。非常に充実していると思う。テレビではもう一度見たいと思っても見られないことがあるが、インターネットの見逃し配信は見たいものが何度でも見られるところがよい。ただ、先ほど行われた羽生選手のショートプログラムの演技を見たいと思ったが、まだ公開されていなかった。どれくらいのタイミングで公開されるのか。

（ＮＨＫ側）

他局に放送権がある競技の場合は、競技が終わってからＮＨＫで公開できる。今は競技が終了したので公開されている。

○　１２月２４日(日)の「女子第２９回全国高校駅伝」（総合 前 10:05～11:54）、「男子第６８回全国高校駅伝」（総合 後 0:15～2:54）を地元の高校を応援しながら見た。昔の駅伝の放送は画面が揺れたり、静止したり、乱れたりすることがあったが、今は常に鮮明な映像で見ることができ、技術の進歩に感心した。最後の「ＮＨＫはこれからもアスリートを応援し続けます」というコメントが深く印象に残った。

○　１月２７日(土)のＮＨＫスペシャル　未解決事件　Ｆｉｌｅ．０６「赤報隊事件」（総合 後 7:30～8:43）、２８日(日)の同番組「赤報隊事件　戦慄の銃弾　知られざる闇」を見た。３１年も前の事件だが、丹念な取材によるドラマとドキュメンタリーで具体的に事件の真相に迫っていて見応えがあった。今の時代も「反日」ということばがあふれている。日韓関係や北朝鮮の問題もある。群馬県では、戦時中に動員された朝鮮人労働者を追悼する碑をめぐって県と市民団体が裁判で争い、２月１４日に判決が出たばかりだ。さまざまな主張がぶつかり合う今の時代に、言論の自由について考えさせられたこの事件を特集したことは意義深く、マスコミのあるべき姿を見せてくれたと思う。

○　１月２１日(日)のＢＳ１スペシャル「平和の使節を“世界の記憶”に～朝鮮通信使登録への道～」(ＢＳ１ 後 9:00～9:49)では、江戸時代に朝鮮王朝が日本に送った朝鮮通信使の資料が去年ユネスコの「世界の記憶」に登録された舞台裏を伝えていた。申請したのは日韓の大学教授を中心とした民間団体で、番組では申請まで２年１２回におよぶ国際学術会議の録音テープや議事録などで議論の様子も伝えられた。400 年以上も前の豊臣秀吉の朝鮮出兵が、韓国では韓国併合などの記憶と相まって否定的な感情が増幅される実情などが語られており、朝鮮通信使が日韓友好の架け橋であるという認識は一致しながらも議論が難航する様子から、日韓の歴史認識の違いの根の深さを実感させられた。難しい議論を乗り越えて「世界の記憶」に登録されるまでを伝えるドキュメントは、友好関係を築く上で民間交流がいかに大切かを伝えており、未来志向の番組として高く評価したい。ただ、歴史認識がここまで違うと恐らくもっと白熱した議論があったのではないか。そこまで伝えてほしいと思った。

○　２月３日(土)のくうねるあそぶ　こども応援宣言「楽しい！つらい？学校給食」（Ｅテレ 後 9:00～9:54）を見た。子どもたちの“食のセーフティーネット”として学校

給食の役割が見直されている現状がとてもわかりやすく伝えられていた。同じような役割で「子ども食堂」が話題になることがあるが、まずは学校給食が重要だと感じた。給食をおいしく、楽しくするためにさまざまな工夫が行われている事例だけでなく、給食の方式、あるいは給食か家庭の弁当かという点で、地域や学校ごとの対応に違いがあることにも焦点を当て、大量の給食の食べ残しが問題となった地域の事例や、家庭の弁当を採用している学校の事例も紹介し、課題に言及していたことがよかった。とても重要なテーマなので、給食費未納の問題なども含めて今後も取り上げてもらいたい。

○　先日「ＢＳ日本のうた」の公開収録を観覧した。コーラスに地元の高校生を起用した演出や、他の観覧者たちのうれしそうな声から、こうしたところにも地域社会に貢献する姿勢が感じられ、よい取り組みだと思った。

（ＮＨＫ側）

前回いただいた、ＮＨＫの世論調査の結果をインターネットで見られないのかという質問にお答えする。ＮＨＫ放送文化研究所が中心となって毎月行っている「政治意識調査」の結果は、ＮＨＫ放送文化研究所のホームページで公表しているが、現在は内閣支持率や政党支持率など毎月共通の調査項目が中心で、すべての結果を公表していない。また、調査結果は放送ではすべて公表し、その内容を「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」でも公開しているが、このページは新しいニュースを順次公開していくため、一週間で見られなくなってしまう。「力士の傷害事件をめぐる処分」の質問項目について見つけられなかったのはこのためだと思われる。毎月刊行している出版物「放送研究と調査」には全質問と結果を掲載しているが、それだけでは不十分と考え、ホームページ「ＮＨＫ選挙ＷＥＢ」で２月の調査からすべての質問と結果を継続して公開するようにした。またＮＨＫ放送文化研究所のホームページでも調査結果をすべて公表するよう、準備を進めている。

同じく前回ご質問いただいた、ピョンチャンパラリンピックの放送計画についてだが、前回のソチ大会に比べ、テレビではおよそ２倍の放送時間を予定している。また、障害のある方などに向けたユニバーサル放送にも取り組む。一部の生中継で、副音声を使って競技の様子を詳しく実況しながら、ルールなどもわかりやすく解説するほか、総合テレビでは視覚・聴覚の障

害がある方に向けたハイライト番組も編成し、充実した放送にしたいと考えている。

（ＮＨＫ側）

前回、大河ドラマ「西郷どん」第１回の妙円寺詣りのシーンで子どもたちが着ていたかっちゅう類について、下級武士の子どもが大将クラスのかっちゅうを着ているのはおかしいとの指摘をいただいた。このシーンの時代考証も行っており、メインキャストには下級武士のかっちゅうを着せて撮影したが、多くのエキストラまで反映させる対応は難しかった。大河ドラマは時代考証を徹底的に行っているが、それをドラマでどこまで再現するかは、総合的に判断していることをご理解いただきたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年１月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１９日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、千葉放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、「首都圏ネットワーク　シリーズ　東京パラリンピック 1000 日前」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　　山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　　員　　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
　　大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
　　岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
　　奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
　　斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
　　杉山　正司（埼玉県立文書館館長）
　　野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
　　原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）

（主な発言）

＜「首都圏ネットワーク　シリーズ　東京パラリンピック 1000 日前」
（総合　１１月２７日(月)～１２月１日(金)放送）について＞

○　視聴者がパラリンピックへの理解を深めるのに大変よい企画だった。選手や練習会場の確保が難しい実態は知らなかった。企業がそれぞれの強みを生かして、パラスポーツ選手をサポートする取り組みは、すばらしいと思う。企業側の担当者がみないきいきとサポートしているのも印象的だった。障害のある木下航志さんとジョナタ・バストスさんの演奏はすばらしく、「見せたいのは『障害』ではなく『強さ』だ」ということばには励まされた。シリーズを通して、パラリンピックの見方そのものが変わり、パラリンピックが広く理解されることで、誰にとっても幸せな世界

や街作りができるのではないかと感じた。そのために東京オリンピック・パラリンピックではオリンピックの前にパラリンピックが開かれるとよいのではないかとさえ思った。

○　東京パラリンピック 1,000 日前というタイミングでパラリンピックをシリーズで取り上げたことはタイムリーで、視聴者の関心を高める企画になったと思う。このシリーズを通し、多くのことを知ることができた。競技人口の少ないトライアスロンで積極的に選手を勧誘しなければ選手の確保が難しい実状、タイヤメーカーの技術で義足の改良をする取り組み、自動車メーカーの子会社がロボット技術を生かして選手のフォームの解析を行っていることなど、日本の高いものづくりの技術が、こういう分野でも生かされているのだと感じた。健常者と障害者が車いすバドミントン、車いすバスケットボールをともに楽しむ様子を放送することで、パラスポーツの大変さや迫力が視聴者に伝わったと思う。ＮＰＯ法人の地道な活動などを通して、パラリンピックにはさまざまな人が関わって、普及や情報発信につとめていると思った。障害者の音楽活動もすばらしくて感動したと同時に２人のことばも心に強く残った。まもなくピョンチャンオリンピックが始まるが、2020 年に向けては東京オリンピックだけでなく、これまで以上にパラリンピックにも注目が集まるように、ＮＨＫにはパラリンピックも引き続き番組で取り上げてもらいたい。

○　このごろのＮＨＫはさまざまな時間帯でパラリンピックを特集していると思うが、オリンピックに比べるとパラリンピックはまだまだ認知度が低いと思う。「首都圏ネットワーク」の放送時間はテレビをつけながら家事などしている家庭のほうが多いと思うが、シリーズで一週間放送することにより、印象に残りやすいのでないかと思った。今回番組を見て、いかに競技種目について知らないかということを改めて感じた。５日間でいろいろな角度から取り上げており、トライアスロンに選手が集まらず、スカウトに行かなくてはならない現状や、いろいろな競技種目があることで、障害のある方たちの可能性がさらに広がることも初めて分かった。また、パラリンピックも一人の選手が出場するために多くの人たちが関わっていることを改めて知った。健常者が障害者と共にパラスポーツを体験することで、競技としてのおもしろさが伝わるとともに、競技者への尊敬の念も高まった。ミュージシャンのバストスさんと木下さんのセッションには引きつけられ、「見せたいのは障害でなく、強さだ」ということばはとても印象的だった。パラスポーツはいろいろな可能性を感じさせてくれると思う。他の番組のパラスポーツ特集で、障害がある方がキャスターになり取材していたが、今後どのように成長していくのか、本番でどんなインタビュー、取材をするのかとても興味を持っている。大変なこともあると思うが、その過程も含めて放送してほしい。

○　パラスポーツを５回シリーズで取り上げたことはよかった。トライアスロンでは選手が集まらない実状や育成機関もない問題が浮き彫りにされていた。選手の義足の開発にタイヤメーカーが半年かけ、足にかかる圧力と耐久性の問題をいかに解決したかという話題には感動した。車いすマラソンではロボット技術を駆使して自動車メーカーの子会社がミリ単位で車いすのポジションを調整しているなど、企業がパラスポーツ選手に協力しサポートしていることも今回初めて知った。世界の先進国と比べると日本は意外と遅れているということにも気づかされた。教育現場の例として、東京の東村山市の小学校が取り上げられていたが、最初は消極的だった健常者の児童がボッチャを一緒にやることで次第に障害者の児童にも積極的に話かけるようになり、最後は笑顔を見せていた場面がとてもよかった。こういった番組をもっと増やし、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、より多くの人に興味を持ってもらえるようにしてほしい。

○　「東京パラリンピック１０００日前」というタイトルがよい。タイミングを捉えてパラリンピック関連企画を放送したことは有意義だったと思う。１年前、100 日前など区切りごとに発展させて引き続き番組を作ってほしい。ただ、障害者をいささか意識しすぎた番組になっているようにも感じた。パラリンピックの陸上競技ではオリンピック選手とのタイム差がどんどん縮まっており、将来は追い越すのでないかと言われている現状がある。タイヤメーカーが選手に合った義足の開発に協力している話などが紹介されたが、それを見て、日本はパラリンピックに対する技術提供や選手の育成などが相当遅れているのではないかと思った。パラスポーツ選手が最先端の技術を駆使すれば、オリンピック選手の記録を超えるかもしれない可能性があり、各国が技術開発に力を注いでいる例を紹介するなど、もう少し強く訴えてもよかったのではないかと思った。仮に遅れているのであれば、なぜ日本企業が技術開発に協力しないのか、企業の社会貢献に対する意識の問題なのか、もう少し掘り下げた番組も見たいと思った。

（ＮＨＫ側）

できるだけ放送する機会を積極的に作っていきたい。今回は一週間通してのシリーズだったが、場合によっては３０分サイズの番組として放送していくなど、いろいろな手法があると思う。

（ＮＨＫ側）

ＢＳ１でアニ×パラ「ブラインドサッカー」を放送するな

ど、いろいろなメディアで関連番組を放送している。2020 年の東京オリンピック・パラリンピックはもちろん大事だが、その前にいかに盛り上げていくかも大事だと思っているので引き続きさまざまな番組でオリンピック・パラリンピックを取り上げていきたい。

○　オリンピックばかりがクローズアップされるが、パラリンピックを取り上げたことはよい取り組みだと思う。トライアスロン、車いすマラソン、車いすバドミントンなど、さまざまな競技が放送され、毎日見ることでよりパラスポーツが理解しやすくてよかったと思う。選手発掘にはまず、競技の認知度を上げる必要があるとのことだったが、競技人口を増やす試みには感心した。日本のものづくりの技術でパラスポーツ選手のサポートをする話は、企業にとっても自社の技術が技術革新につながるので、選手と企業どちらにとっても利点があり、企業がサポートする選手に寄り添う気持ちがよく表れていて好感が持てた。「スポーツは科学」と言った選手のことばにも、パラスポーツに技術開発が不可欠であることが表れていると思う。また、車いすバドミントンは障害者と健常者が一緒に楽しむ取り組みがすばらしいと思った。スポーツを通した仲間づくり、若い人への普及、出前授業など、シリーズを通してよい取り組みが紹介されていたと思う。子どものうちからそういう環境に触れることは重要だと思った。パラスポーツのイメージを変えた、インクルーシブという考え方はスポーツだけでなく、幅広い分野で生かすべきだろうと思う。音楽イベントからのアプローチは視点を変えていてよかった。バストスさんの「何でもできる」という前向きな生き方には感動した。目が見えないミュージシャンとのセッションで「あきらめない」「見せたいのは強さ」というメッセージはすべての人に共感できる内容だったと思う。パラリンピック競技応援校のことは知らなかったが、このような健常者と障害者の垣根を越える取り組みはもっと全国展開すべきだと思った。今回の企画は、パラリンピック競技者が抱える、あまり知られていない問題を多くの視聴者に知ってもらうという意味でも意義があったと思う。

○　５回シリーズを見て、パラスポーツについてもっと知りたくなった。選手層がなかなか厚くならない、規制があり練習環境が整わないことなど、現在のいろいろな課題を明らかにしていたが、まったく知らなかった。そういう情報を知った自治体などが使用可能な施設を提供してくれるなどうまく連携につながればよいと思った。「スポーツは科学だ」という話もあったが、日本は技術開発が遅れているのかもしれないと感じた。技術格差がパラスポーツの成績にも影響するのではないかと、パラリンピックの見方についても考えさせられた。スポーツを一緒に楽しむことで、インクルーシブという考え方を理解し、障害者と健常者の垣根が低くなることが重

要だと改めて感じた。アートや音楽をはじめ、障害者の取り組みは健常者のほうが励まされることも多く、いろいろなところで紹介してほしい。東京オリンピック・パラリンピックまでのプロセスが大事という話を聞いて、本当にそのとおりだと思った。東京オリンピック・パラリンピックに向けて首都圏内の共同的な取り組みは予定されているのか。

（ＮＨＫ側）

企画を定期的に放送している。東京オリンピック・パラリンピックの舞台は東京がほとんどだが、国のキャンプ地に選ばれているところや、競技会場になっているところもある。関東甲信越全体に参加してもらい、これからも番組をどんどん展開していく。首都圏放送センターでは、パラリンピックの陸上競技の義足の選手をテーマにしたもの、ブラインドサッカーのアニメなどを制作し放送している。また、「ひるまえほっと」ではタレントの武井壮さんがパラリンピックのいろいろな競技に挑戦するコーナーがあり、ＢＳ１でも番組化している。本番に向け、いろいろな角度から展開しようと思っている。

○　それぞれしっかりと取材されていた。選手発掘の舞台裏では、トライアスロンの選手を集めるのが大変なこと、選手を支える日本のものづくりの技術ではトライアスロンのマラソンを走る選手の義足の裏が滑らないようにタイヤメーカーが協力したこと、自動車メーカーの子会社がロボット技術で車いすマラソン選手を支援していることを紹介していた。障害をものともせず、活躍するミュージシャンの企画では、ギターを足で弾き、両腕とあごでピアノを弾くバストスさんを紹介した。バストスさんは「私たちに限界はない、何だってできる、僕たちが見せたいのは障害でなく、強さだ」と語り、パラスポーツマンにエールを送っていた。その演奏は心を打つ、すばらしいもので、障害者だけでなく、健常者にも勇気を与えてくれた。パラ競技応援校の取り組みでも小学校の教育現場でパラスポーツを理解し、パラリンピックを応援しようという取り組みを紹介していたが、分かりやすかった。ただ、障害者と健常者で共に楽しむ車いすバドミントンでは、ある選手をズームアップしたときにスーパーされた名前が選手の名前ではなくＮＨＫの担当者の名前だったので少し紛らわしかった。ところで、新聞では「障害者」と漢字表記を使っているが、「害」という漢字に少し違和感を覚える。ＮＨＫの表記は統一されているのか。

（ＮＨＫ側）

放送用語的には「障害者」を使うことが基本になっている。
障害者団体ともいろいろと検討したうえで決めている。

○　このような番組を通じ、心のバリアフリーが進み、いろいろな場所でユニバーサルデザインが取り入れられるように心から願っている。2020 年はそのような取り組みを国民全体で共有できるいい機会でもあると思うので、これからも今回のように多角的な視点から分かりやすく番組を制作していただきたい。

（ＮＨＫ側）

委員の皆さんからパラスポーツについて、知らなかったことがたくさんあることがわかった、さらにもっと知りたくなったというお話を頂いた。知らないことがまだたくさんあるということがパラスポーツをめぐる課題かと考えている。知らないことを少しでも減らしていけるよう放送を出していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１２月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「激変する世界ビジネス　“脱炭素革命”の衝撃」を見た。二酸化炭素の排出量削減をビジネスチャンスと捉えて世界が大きく舵を切る中、日本がその流れに乗り遅れている実態がよくわかった。ＮＨＫにはこういうことをぜひ伝えてもらいたい。

○　ＮＨＫスペシャル「激変する世界ビジネス　“脱炭素革命”の衝撃」を見た。パリ協定で、各国が二酸化炭素の排出量削減を義務づけられた。企業にしてみれば、大きなビジネスチャンスでもある。ヨーロッパ各国が本気で取り組むなか、遅れをとっている日本の企業の見解ももっと取り上げてもらいたかった。

○　１２月３１日(日)の第６８回ＮＨＫ紅白歌合戦「夢を歌おう」をじっくりと見た。演歌が少なくなった印象があり、これまでの紅白から変わりつつあるのかと感じた。今回は司会に内村光良さんを起用し、笑いを誘う場面もあり、スムーズに進行ができていたと思う。審査員が舞台袖で審査をするのは今回が初めての取り組みかと思うが、司会者が画面に映った時に審査員と顔が重なったのが気になった。

（ＮＨＫ側）

「紅白歌合戦」では審査員をステージの袖のほうに配置し、司会者の後ろに審査員が座った。紅白に対して多くの反響を頂いたが、なかには審査員が映り込むのが気になるという意見も頂戴した。頂いたご意見は現場に伝え、次回以降の参考にさせていただく。

○　「紅白歌合戦」は一年を総括するような日本のいろいろな出来事、ＮＨＫで取り上げたさまざまな番組がちりばめられた構成になっていたと感じた。紅組トリの石川さゆりさんが「津軽海峡・冬景色」を歌ったが、背景が葛飾北斎の富嶽三十六景だったのは少し違和感があった。

（ＮＨＫ側）　石川さんのパートの演出の意図は、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて日本文化のすばらしさを日本人にも知ってもらいたい、世界の人にも知ってもらいたいということだ。メッセージがきちんと伝わるような演出を改めて心がけたい。

○　１２月１６日(土)のＮＨＫ映像ファイル　あの人に会いたい「林京子(作家)」、１２月２３日(土)の「谷口稜曄(日本被団協代表委員)」を見た。２人とも有名な被爆者の方だが、とても貴重な言葉を残してくれた映像だと思う。ＩＣＡＮ(核兵器廃絶国際キャンペーン)がノーベル平和賞を受賞したタイミングに近い時期に放送されたのも意義があったのではないか。

○　１２月２９日(金)の連続テレビ小説「わろてんか」総集編（前編）(総合 前 8:00～9:28)、１２月３０日(土)の「ひよっこ」総集編（前・後編）(総合 前 8:20～9:48、9:55～11:20)など連続テレビ小説の総集編は、日頃じっくり見ることができなかった視聴者もまとめて見て楽しめるので非常によい。そのほかにもさまざまなレギュラーコーナーや番組が特集として放送されており１２月２３日(土)の「まちかど情報室スペシャル」(総合 前 7:30～7:55)、１月１日(月)の「超入門！落語ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ　一挙放送スペシャル２０１８」(総合 後 11:35～2 日(火)前 3:59)、１２月２９日(金）の「朝まで！ドキュメント７２時間　２０１７」(総合 後 11:45～30 日(土)前 4:30)などは、一年間のよりすぐりのニュースや情報を一気に見ることができてよかった。年末年始だけでなく、このようにまとめたパッケージで番組を楽しみたい視聴者もいると思うので、ぜひそういった編成も引き続き検討していただきたい。

○　１月１日(月)の「究極ガイドＴＶ　２時間でまわる伊勢神宮」(総合 前 7:20～9:19)を興味深く見た。伊勢神宮の内宮と外宮、伊勢神宮の成り立ちや、２０年に一度の式年遷宮の仕組みなどについてたっぷり時間を取って具体的に説明していておもしろかった。伊勢神宮の芝生、庭園の美しさ、五十鈴川の清流、鎮守の森の手つかずの自然のよさ、皇室との関係もかなり具体的に紹介しており、伊勢神宮が身近に感じられた。

○　１月５日(金)の「あさイチ」は、冒頭１０分くらいで、羽織はかまを着た、三味線、鼓、横笛、バイオリンのカルテットの演奏が始まった。和楽器と洋楽器のコラボレーションで、バイオリニストはハットをかぶっていたが、不思議と羽織はかまにも合っていた。四つの和洋の楽器がそれぞれの特徴を生かし、今まで見聞きした和洋楽器とは違う新しい演奏で、新鮮だった。スタジオにはジャズの巨匠セロニアス・モンクなどのレコードジャケットも飾ってあり、私たちの年代にとっては非常に懐かしかった。今まで「あさイチ」をあまり見なかったが、今回のコーナーによって番組を見るシニア層が増えたのではないか。「花は咲く」の演奏途中に鼓の奏者の手元がアップになったが、その奏者が演奏している様子はなかった。カメラマンが、曲のどの部分で鼓が演奏されるのかを事前に把握しておくことは難しかったのだろうか。演奏自体は大変すばらしかったので少し残念だった。その後「葉ボタンおしゃれアラカルト」というコーナーがあり、いろいろな種類の葉ボタンを紹介してくれたので、こちらも楽しんで見ることが出来た。

（ＮＨＫ側）

音楽番組は音の調整、照明もあるので、事前にどのカメラで撮るかを決め、リハーサルもしている。思いもよらないアドリブが入り、順番が狂ったことなどが考えられるが、指摘いただいた事は現場に伝える。

○ 大河ドラマは若い頃はあまり見なかったが、最近はかなり興味を持って見ている。「おんな城主　直虎」は森下佳子さんの脚本の流れがよく、引き込まれた。「おんな城主　直虎」や「篤姫」は、ともにあまり知られていなかったが、大河ドラマで取り上げられたことで有名になり、ドラマの影響力を強く感じた。今回の「西郷どん」は、歴史上有名な人物なので、どう描かれるのか今後の展開が楽しみだ。

○　大河ドラマ「西郷どん」を見た。毎年大河ドラマを楽しみにしている。学生と話をすると史学科の学生でもドラマの内容が史実だと思っている学生も多いが、それ

は視聴者も同じでないか。それだけに歴史考証は大変だと思う。第１回で妙円寺詣りのシーンが出てきたが、子どもたちがかっちゅうを着て走りがけをする場面で、着ていたかぶと、胴丸などのかっちゅう類に疑問を感じた。薩摩は身分制度が厳格なので、比較的下級の武士の子どもたちが大将クラスのかっちゅうを着ているという場面は、違和感があった。誤った歴史認識につながりかねないので、気をつけてほしい。

（ＮＨＫ側）

大河ドラマは歴史の再現でなく、歴史を背景に描くドラマだが、衣装、風俗、家、城、所作、振る舞いなどはそれぞれ専門家の指導を受けている。指摘は担当者に確認する。

○　１月１日(月)の香川照之の昆虫すごいぜ！特別編「カマキリ先生☆マレーシアへ行く」（Ｅテレ 前 9:00～9:44）のＰＲをたくさん目にしたので、１２月３１日(日)の一挙アンコール放送を家事をしながら見ていたが、あまりにおもしろくて目が離せなくなった。他局の番組で香川さんが「昆虫の番組をやりたい」と言ったのをＥテレの関係者が見て実現したようだが、香川さんが昆虫を愛してやまない様子が画面からあふれているだけでなく、昆虫から生き方を学び、平和や環境問題まで考えさせられるような、大変魅力的な番組だと思った。今後もぜひ続けてほしい。

○　１月１日(月)の新世代が解く！ニッポンのジレンマ元日ＳＰ「“根拠なき”不安を越えて」(Ｅテレ 後 11:30～2 日(火)前 1:30)を見た。去年まではいろいろな分野の若手がこれからの日本や社会的な風潮の話をしており、なかなか刺激的な内容だった。今年は若者の根拠なき不安について若手論客が答えるような形だった。タイトルを見た段階であいまいになるであろうと予想したが、そのとおりだった。若者の正規雇用率が上昇し、働き方改革が浸透しはじめ、雇用において売り手市場である若者にとって明確な不安が社会の中で探しづらくなっている昨今では至極当然の内容であるように思えた。彼らが現状の社会保障、画一的な働き方に不自然さを感じているのが見受けられ、2045 年にはＡＩが人間の知能を上回る、シンギュラリティが来るといわれているが、そのことによる生活環境の変化に肌では気づいているようにも見えた。この番組は時代の定点カメラのように感じられ、おもしろく見ている。最近はこの番組のお正月特番を見ているが、時代の変革をアーカイブするのにとてもおもしろい企画だと思うので、これから年を重ねる司会者、論客たちがどのように変化するか、新しい出演者にも期待したい。

○　１月３日(水)のダイアモンド博士の“ヒトの秘密”プロローグ　第１回「チンパン

ジーからヒトへ」と１月１０日(水)の第２回「動物のコトバ、ヒトの言語」を見たが、とても分かりやすく３０分ではもったいないくらい充実した内容だった。

○　１月６日(土)のＥＴＶ特集　シリーズ　よみがえるアーカイブ　第１回「日本とイタリア」、１月１３日(土)の第２回「ＴＯＫＹＯ」を見た。ＮＨＫが提供した映像を元にイタリアとフランスの放送局が制作した、国際的な視点から見た東京を描いていたが、海外からどう見られているのかわかり、とても興味深かった。

○　１月１３日(土)のＥＴＶ特集　シリーズ　よみがえるアーカイブ　第２回「ＴＯＫＹＯ」を見た。最近はネット文化の影響もあるのか、テレビの前でテレビだけを見る時間がなかなか持てなくなってきたが、この番組には最後まで引きつけられた。もともとはＮＨＫスペシャルだったようだが、東京の歴史を淡々と映像で追いかける構成は下手な演出をされるよりも好奇心を持って、最後まで興味深く見ることが出来た。ＮＨＫスペシャルとＥＴＶ特集は扱うテーマに違いはあるのか。ＮＨＫスペシャルはどちらかというと視聴率がある程度見込める派手なもので、ＥＴＶ特集は意義のあるテーマだが地味なもの、といった違いがあるように感じた。ＥＴＶ特集は夜１１時という遅めの開始時間なのでもっと多くの人に見てもらえる時間帯でもいいのではないかと感じている。１２月１６日(土)のＥＴＶ特集「砂川事件６０年後の問いかけ」を見逃したので、ＮＨＫオンデマンドで探したが見つからなかった。ＮＨＫスペシャルとＥＴＶ特集はＮＨＫオンデマンドでいつでも見られるようにしてほしい。先ほどのＥＴＶ特集を半年後にもう一度見たくなっても、録画していないと再度見ることができないのは残念だ。

（ＮＨＫ側）

ＥＴＶ特集は「“心の図書館”であること目指す」をキャッチフレーズにしている。世の中に伝えたい大事なテーマがある中で、ＮＨＫスペシャルはみんなが見たい、みんなが知っているテーマ、ＥＴＶ特集はあまり知られていないが伝えることに意味があるテーマをそれぞれ取り上げている。一方で、２つの番組で連携した企画も放送しており、好評だったＥＴＶ特集「亜由未が教えてくれたこと」というＮＨＫディレクターが妹を撮ったドキュメンタリーはＮＨＫスペシャル「亜由未が教えてくれたこと～障害者の妹を撮る～」として改めて放送したこともある。

○　１月３日(水)のＢＳ１スペシャル「欲望の資本主義２０１８～闇の力が目覚める

時～」(ＢＳ１　後 9:00～9:50、10:00～10:49)を見た。ダニエル・コーエンさん、安田洋祐さんなどが外国と日本それぞれの立場から欲望が欲望を生む資本主義の本質とは何か、世界の一流学者が資本主義をどうコントロールすべきかを伝えていて考えさせられた。

○　１月１４日(日)のグレートレース「目指せ！大荒野の冒険王～アメリカ・ロッキー～」(ＢＳ１　後 10:00～10:50、11:00～11:49)を見て、世界には想像を絶する過酷な競技があることに驚いた。参加者はもちろんだが、カメラマンが過酷な状況の中、どのように撮影したのか知りたかった。視聴者の好奇心に正月から存分にこたえてくれるすばらしい番組だった。テレビは見たい、知りたい、学びたい、楽しみたいという視聴者の気持ちを満たすものであると思う。また、偶然すばらしい番組に出会う驚きがあるのもテレビのよさであると思う。

○　１２月２６日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「紅白歌合戦　知られざる舞台裏」を見た。会場が見つからず、たまたま空いていた１２月３１日に紅白を行うことになったことや美空ひばりさんの出演の舞台裏などが取り上げられ、初めて知ることがたくさんあった。当時紅白は、８０％以上という今では考えられない視聴率を取っており、昭和３０年代くらいまでは、国民が一つの方向に向かい、価値観も似通ったような時代であったことがよく分かった。今は多様な情報があり、視聴者の関心がさまざま広がる中で「紅白歌合戦」の果たしてきた役割を改めてふかんすることができる番組だったと思う。

○　「西郷どん」の放送開始に合わせて、幕末の特集がたくさん放送され、その中で１月２日(火)の「時空超越時代ドラマ＆ドキュメント　美子伝説」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:59)を見た。明治になって西洋化を進めていく中で、皇太后が果たした役割について描いた番組だった。時空超越時代ドラマというタイトルの通り、推測もあるのかもしれないが、知らないことばかりで驚いた。

○　ＮＨＫがＪアラートに関する誤報を出したことをラジオで聞いた。経緯を教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

今回は別の速報を配信する際の操作の途中で、誤って緊急対応用に用意していたＪアラートの文言を選択し、配信ボタンを押してしまったという人為的なミスである。Ｊアラートという国民の安全・安心に直結する重要な情報に関し、誤っ

た情報を伝えてしまい大変申し訳ない。まさに公共放送の根幹に関わる、極めて重大なミスと受け止め、再発防止策を講じ、徹底させているところだ。

○　年明けに世論調査の結果をテレビで見たが、貴乃花親方の処分についてどう思うかという質問があり、違和感を覚えた。今回の暴力事件は日本相撲協会全体に関わる問題で、何人もが処分されているのに、なぜ貴乃花親方だけが世論調査の対象になったのか疑問だ。ＮＨＫオンラインでも世論調査について情報を探したが見つからなかった。ＮＨＫの世論調査について概要を教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの世論調査で貴乃花親方の処分について重いか、軽いか、妥当かという聞き方をした。暴行事件では元日馬富士関の引退が去年のうちに決まっていたので、世論調査を１月第２週に実施する際は貴乃花親方の処分に対しての世論の受け止めが最大の焦点だったので、そこに絞り、視聴者の反応を聞いたという経緯だ。

（ＮＨＫ側）

世論調査そのものはＮＨＫ放送文化研究所が中心となって行っている。調査内容をどこまで公開しているかなどについては確認する。それぞれのテーマについては報道局など、いろいろな部署と議論して決めている。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年１２月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１５日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、横浜放送局の取り組みと今後の予定について報告した。続いて、小さな旅「照葉の森　色つづる～神奈川県　箱根町～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　員	大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
	斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
	杉山　正司（埼玉県立文書館館長）
	野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
	原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）

（主な発言）

＜小さな旅「照葉の森　色つづる～神奈川県　箱根町～」
（総合　１２月３日(日)放送）について＞

○　「小さな旅」は日曜日の朝にふさわしい番組だと思う。青空に映える色とりどりの紅葉、雪が積もった富士山、芦ノ湖の遊覧船や鳥居など箱根らしい風景が美しく、番組スタッフの映像に対するこだわりを感じた。風景だけでなく、そこに暮らす人たちがしっかりと描かれていたのも大変よかった。昭和１１年に自由に木が切れなくなり、いつか箱根の木で寄せ木細工ができるようにと４０年前に植林したことなどはなかなか聞けない話なので興味深かった。観光客が行かないような場所の映像も一部含まれてはいたが、見慣れた風景も多かったので、あまり知られていない箱

根の魅力も別の機会に紹介してほしい。神奈川県の小学生は必ず箱根について勉強するので、番組の映像がそのまま教材として使えるのでないかと思った。ぜひそういった活用の仕方も考えていただきたい。

○　テーマ音楽が大好きで、曲を聴いただけで「小さな旅」と分かる。長く続いている番組なのでファンが多いのだろうと思う。山田敦子アナウンサーの話は落ち着いていて聞きやすかった。箱根に自生する植物が 1,800 種もあることや、ワカサギ釣りで魚が弱らないように、冷たい水に手をつけて網から外すということは知らなかったので驚いた。ススキがなびき、富士山と映っていた映像はロケーションがすばらしかったが、映像があまりにも美しすぎて絵はがきのようだったのでその場所を訪れた人の声を入れるなど、もう少し人の気配があってもよかったと思う。この番組は、観光地の紹介ではなく、そこに住んでいる人の目を通して、多角的な視点で箱根をとらえていたと思う。「小さな旅」は長い歴史があるので、取材の苦労話、番組づくりの舞台裏を紹介する番組も作ってもらいたい。

○　テーマ音楽を聴くと「小さな旅」だとすぐに分かり、歴史の長い番組と感じる。天気がいい日を狙って撮影に臨んだということだが、紅葉、芦ノ湖、富士山の絶景を見ることができてよかった。パステル画は地元の人しか分からない場所で描かれていたが、すばらしい絵だった。また、芦ノ湖のワカサギ漁について、釣ったワカサギを地元にしか卸さないといった話や、江戸時代から続く寄せ木細工をいつかまた箱根の木で作れるようにと４０年前から植林をしていた話など、それぞれのエピソードから人々の地元愛が感じられて感銘を受けた。「小さな旅」は長い歴史があり、朝のさわやかな時間に適した番組だと思う。

○　長く続く番組のすばらしい魅力の一つはテーマ曲にあると思う。視聴者一人一人に懐かしさを感じさせてくれると同時に、上質な番組をより一層気品のあるものにしている。番組冒頭で上空から山々の紅葉を見せてくれたことで、タイトルの「照葉の森　色つづる」の雰囲気がよく表現されていたと思う。どのように撮影したのか気になった。最初に登場したパステル画を描く８９歳の男性が絵を描き続けることについて「よい年になったがまだこれからです」と言ったことばからは探求心があふれていて、その気持ちがあるから若々しくいられるのだと感じた。このほかにも、観光客が知らない芦ノ湖のワカサギ漁師の苦労話や、寄せ木細工の細やかな技法など、その土地ならではの話題を視聴者に分かりやすく伝えていてよかった。最後は雪を頂く富士山をバックに芦ノ湖の湖面を滑るように進む遊覧船の様子が映し出され、箱根に行きたいと思わせるよいエンディングだったと思う。

○　箱根は何度も訪れているが、紅葉の映像が美しく、初めて見る場所のようで新鮮だった。「1,800 種類の植物が織りなす紅葉のリレー」「複雑で豊かな色模様」「華やかさが競い合い」など、ナレーションのことばがきれいで、小説を読んでいるようだった。パステル画を描く男性がいつどこに行けば最もきれいな風景が描けるのか知っているのはすてきだと思った。ワカサギ漁を家族で営む男性が丁寧にワカサギを網から外す様子や「こんなによいロケーションの仕事場はほかにない」ということばから、箱根の暮らしに本当に豊かさを感じていることが伝わってきた。また、寄せ木細工職人が４０年前に材料となる木を植林し、手入れを怠らず「あと３０年はかかるだろう。それでもいつの日か後輩たちが箱根の木で寄せ木細工を作れることが夢だ」と語っていたのも印象的だった。出演した３人がそれぞれ違う角度から箱根を愛し、箱根の暮らしを大事にしていることが伝わってきた。照葉樹は秋の紅葉と同じぐらい春紅葉も美しいので番組で取り上げてほしい。「小さな旅」は肩ひじを張らずに素直に楽しめる番組だが、丁寧に見るとこんなにも大事なことを教えてくれる番組であるのだと改めて感じることができた。ナレーションの表現はきれいだったが、映像がとても美しいのでナレーションがもっと少なくても十分に楽しめたのではないか。

○　タイトルの「照葉」を照葉樹林の「しょうよう」ではなく、照り紅葉の「てりは」と読んだ。「照葉の森　色つづる」というのは美しいタイトルだと思う。紅葉の見どころなどを取り上げるのかと思ったが、オープニングで流れたダイジェストを見て、自然だけではないところにひきつけられた。森が美しいのは当然だが、パステル画は自然の美しい情景を人が写し取り、ワカサギ漁は自然から慈しみつつ食べる分を頂き、寄せ木細工は自然から人が色を探して作り、さらに材料を得るために植林することで森を守り、自然を未来に残していくという自然の中での人々の営みがすばらしいと感じた。自然の色ばかりでなく、人を包むような色、人が感じる色、人が作る色、暮らしを彩る色といった、色のにおいのようなものを番組から感じることができ、人と森の営みの中でそうした“色”が循環していくようなどこか哲学的な印象を与える番組だと思った。エンディングは富士山をバックに芦ノ湖に遊覧船が浮かぶよく見かける映像だったが、なぜか遊覧船が去っていく姿が印象に残った。

（ＮＨＫ側）

「照葉」は「てりは」と読む。草木の葉が紅葉して美しく照り輝くことを意味する「照葉（てりは）」ということばをタイトルにした。紅葉にもさまざまな色があり、今回はモミジやカエデではなく、ツルウメモドキ、アブラチャンなど、紅

葉の中では“脇役”の木にあえてスポットを当てた。冒頭の紅葉の映像はロープウェーから撮ったものだ。箱根は多くの観光客が訪れるが、その人たちと同じ目線で遊覧船やロープウェーからの風景を撮影しようというカメラマンのこだわりだった。

○　テーマ曲が流れると、懐かしい気持ちになる。目まぐるしく変わる世の中だからこそ、変わらないものがあることにホッとするので、テーマ曲は今後も変えないでほしい。今回は映像がとても美しく、旅をするような気持ちで番組を見られてよかった。ワカサギ漁では、網にかかっているワカサギを丁寧に外す漁師の心遣いから、地産地消の精神で必要な分だけ取り、自然を大事にする姿勢が感じられた。寄せ木細工は大変な手間がかかっていることや、色を塗らずに木そのものの色で表現されていることも今回初めて知った。職人たちが４０年も前から地元の人たちと植林をし、「いつかは箱根の木で寄せ木細工を作りたい」と語っていたのが印象的だった。職人の石川一郎さんが時間をかけても寄せ木細工に使う木を次の代に引き継ぎたいという話で番組が終わったことで、次の世代にバトンを託すような印象を受け、見ていて心が和んだ。山田アナウンサーは節度を持って取材しており、人との触れ合いや距離感が程よく見ていて気持ちがよい。情報も多すぎないところが想像力をかき立ててくれて、よいと思う。「小さな旅」は３０年以上放送されているが、同じ場所を訪ねて以前の映像と現在を比較して放送すると時代の流れが感じられてよいのではないか。これからも大切に放送していただきたい番組だと思う。

○ いつも通り安心して見ることができる内容だった。今回も美しい情景だけでなく、ワカサギを釣ったときなどの音も相まって、臨場感あふれる演出で心地よく見た。きれいな景色からパステル画を描く男性の話につながり、ワカサギの天ぷらからワカサギ漁師の話につながり、寄せ木細工職人の話から植林の話につながるなど、話がさまざまな方向に展開しても無理なく１つの番組としてまとまっていたと思う。「小さな旅」はＮＨＫにとっても長く続く宝物のような番組だと思うので、これからも作り続けてほしい。

○　テーマ音楽を聴くと「小さな旅」が始まったという感じがする。ワカサギを地元のみで消費していることが紹介されたが、地域の中でお互いが支え合ってよい経済の循環を作る、地域活性化のあり方が箱根にもしっかり残っている姿が紹介されたのはよかった。寄せ木細工について、箱根全体が国立公園に指定され、材料となる木を自由に伐採できない制約があるなかで４０年前に植林をした人たちがいる。「いつか箱根の木で寄せ木細工を作りたい」という寄せ木細工職人のコメントは心

に残った。観光で訪れる人たちが非日常を楽しむことを地域で支えてくれる人たちがいる。そうしたことに思いをはせるきっかけになる意義のある番組だったのではないか。最後に富士山、湖、遊覧船、紅葉、箱根神社の鳥居の映像が出てきたのにはホッとさせられた。華やかな観光地でない箱根の魅力を視聴者にどう見せるのかがこの番組のテーマだったのだろうと思う。観光客の視点ではなく、そこに住む人たちがどう地域を支え、生活をしているのか、それを伝える「小さな旅」は長く続けてほしい番組だ。

（ＮＨＫ側）

箱根は観光地としてよく知られており、景色もよい。有名で華やかな部分が大きいので、どう取り上げるのか難しかったが、知られざる箱根の魅力を伝えられたと思う。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２６日(日)の目撃！にっぽん「そして名作は生まれた　山崎豊子“大地の子”秘話」(総合 前 6:15～6:49)を見た。山崎さんと当時の中国共産党・胡耀邦総書記の対談の肉声テープが発見され、困難な中国の取材を可能にした２人の絆が感じられた。音声からは、最初は親日的だった胡耀邦総書記が、２年の間に取り巻く状況が変わって緊迫感が増し、立場が厳しくなっていったことが伝わってきた。当時の日本と中国の関係の変化も感じられ、とても貴重なものだと思った。「大地の子」はいまだに中国では出版が認められていないということだが、４年前に山崎さんが亡くなった後も残留孤児の支援は継続され、支援を受けている子どもが日本と中国の架け橋になりたいと話していた。日中の関係について改めて考えさせられる番組だった。

また、１１月１９日(日)の激動の世界をゆく「台湾（前編）“天然独”高まるアイデンティティー」を見た。「自分たちは中国人ではなく台湾人だ」と考える“天然独”と呼ばれる若者が台湾で急増している現状について、大越健介キャスターがわかりやすく解説していて勉強になった。

私たちは隣国に対し関心を持たなければいけないが、１１月から１２月にかけてはＮＨＫが丁寧にいろいろな切り口から紹介してくれたと感じている。中国も台湾も若者たちが自分たちの国をどのように見ているのかという視点が重要だったと思うので、日本の若者たちが自分たちの国についてどう考えているのかについても取り上げてほしい。また、幼児教育の無償化や待機児童の問題、少子化問題など、さまざまな問題があるので番組でも取り上げていただきたい。

（ＮＨＫ側）

子育て支援は重要なテーマなので継続して放送している。待機児童の問題についても日々取材し「首都圏ネットワーク」などで継続して取り上げている。

○　当事者だけの問題にせず、特に子育て世代でない方々に向けて、子育て世代を取り巻く環境や課題について知ってもらえるように取り上げてほしい。

○　１１月２７日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「夫婦の流儀スペシャル」を見た。箱根駅伝３連覇を成し遂げた青山学院大学陸上部の原晋監督夫妻、１枚100 万円の掛け布団を作る夫婦、「ここで証明写真を撮ると、合格する」というロコミから毎年 5,000 人が訪れる写真館の夫婦などのエピソードが紹介された。夫婦が助け合い、夫を妻が陰で支えるすばらしさとお互いの努力する姿を紹介したことは番組のタイトル「夫婦の流儀スペシャル」どおりで大変よかった。原監督は若者の気持ちを的確に把握し、上から押しつける指導でなく、選手が自分たちで考え、自分たちで努力するような環境を整えるという今の時代に合った指導をされていて、共感を覚えた。申し上げたいのは構成についてだ。最初に原監督夫妻のエピソードを紹介し、そろそろエピローグかと思ったところで２番目の夫婦の話題に移り、３番目、４番目と紹介し、最後に１番目の原監督夫婦のエピローグから順番に４番目までのエピローグとなった。すべてのエピソードを内容が最高に盛り上がっているところで中断して、次のエピソードに移るのは、民放的な手法だと思う。制作者の意図は分からないでもないが、ＮＨＫを見る人、特にこの番組を見る人はあまり途中でチャンネルを変えないのではないか。１話ずつエピソードを完結したほうが見やすかったと思う。

（ＮＨＫ側）

「この番組を見る人は途中でチャンネルは替えないだろう」というありがたいことばを頂いたが、最近の視聴者、特に若い視聴者はそうでないということがある。夫婦の流儀スペシャルは７３分という長時間の番組だったので、最後まで見ていただける演出の一つとして試みた。構成についてはそのつどベストを尽くしているが、ご意見は今後の番組づくりに生かしていきたい。

○　１２月１０日(日)の目撃！にっぽん「１００キロ歩いて」を見た。100 キロ歩く

大会に出たことがあり、参加者全員にドラマがあると実感していたので、今回取り上げられて大変うれしい。

○　「目撃！にっぽん」は意欲的な番組づくりをしており、毎回取り上げるテーマに感心させられる。日曜日の朝６時１５分に放送されているが、もっと多くの方が見られる時間にも放送してほしい。

○　１２月１０日(日)のＮＨＫスペシャル「追跡　東大研究不正～ゆらぐ科学立国ニッポン～」を見た。研究不正が相次ぐ背景を明らかにする、勇気ある報道だったと思う。激化する国際競争の中で変容してきた科学研究費の配分を巡り、科学者たちが不正を行った実情から、今の日本の科学が直面する構造的な問題が見えてきて見応えがあった。この報道をきっかけに、課題解決に向けた取り組みが進んでほしいと願っている。

○　１２月１１日（月）のクローズアップ現代＋「“核廃絶”分断を越えて～ノーベル平和賞　そして日本は～」を見た。今回ノーベル平和賞は核廃絶を訴えるＩＣＡＮが受賞し、サーロー節子さんが被爆者として核廃絶への強い願いを世界に向けて発信したことを丁寧に伝えていた。国連での核兵器禁止条約の交渉会議で、被爆国の日本にいてほしかったというメッセージとして折り鶴が席に置いてあったのは印象的だった。今後、日本が唯一の被爆国として、核廃絶問題にどのように対応するのか、世界から姿勢を問われていると感じた。戦後生まれが多くなり、平和が当たり前の時代になったと思うが、北朝鮮の核開発問題など、大きな問題もあるなかで、日本が進む方向性や世界の平和について強く考えさせられる番組になっていたと思う。難しい問題、課題に対し「クローズアップ現代＋」「ＮＨＫスペシャル」などでも視聴率にとらわれず正面から取り組むＮＨＫの姿勢は高く評価したい。

○　「ＮＨＫスペシャル」「クローズアップ現代＋」や、「ひるまえほっと」「首都圏ネットワーク」などでもそれぞれの時間帯に合わせ、見てほしいターゲットに向けてさまざまな問題にも配慮した興味深い番組づくりをしていると思う。

○　１２月１４日(木)の「あさイチ」を見た。「篠田桃紅～１０４歳のメッセージ～」で有働由美子アナウンサーが篠田さんにインタビューしておりとてもインパクトがあった。篠田さんは 104 歳とは思えないくらいしっかりしていて、今の日本をどう見ているかについての話は興味深かった。有働アナウンサーが「篠田さんに６時間インタビューした」と言っていたが、すべては無理にしても、ぜひ１時間くらいにまとめて改めて放送してほしい。これからの高齢化社会において生きるヒントや

生きがいを教えてもらえると思う。

○　　１２月１２日(火)のハートネットＴＶ「ある青年の死」は、ある精神障害の青年の死をめぐる裁判をきっかけにわかってきた精神科医療の現実を取り上げていた。難しいテーマに切り込む意欲的な姿勢が感じられた。

○　１２月１３日(水)のオイコノミア「経済学で“安心”を手に入れる！」を見た。日常生活で無意識の内にわれわれが行っているさまざまな行為を経済学的に整理して解説する番組だが、リラックスして学べておもしろい。今回は“安心”をテーマに、安全・安心を確保するために認識すべきリスクとその回避の仕方や、リスクと利益とのバランスを見て判断する必要があることなどが紹介され、とても興味深かった。リスクに対して正しく判断し、正しく怖がることについても伝えていて大変よかったと思う。最後に「又吉直樹の経済ポエム」というコーナーがあるが、まさに言い得て妙という感じで、番組を締めくくるのにふさわしいコーナーだと思う。ただ、慶應義塾大学の教授と又吉さんと中田敦彦さんの３人が番組の中で寸劇のようなことをやっていたが、３人の温度差にやや違和感を覚えた。

（ＮＨＫ側）

最近のテーマは「遊園地・テーマパークの経済学」「借金の経済学」「ファッションの経済学」などだ。初期のころは金利と経済の関係を分かりやすくひもとくような広いテーマで放送していたが、最近は身近なことを経済の視点で見ると何が見えてくるのかということを取り上げている。

○　１２月１４日(木)の福島をずっと見ているＴＶ　ｖｏｌ.７１「徹底討論！“福島を伝えること”」を見た。福島の今と未来を見つめる若者たち、大学生、漫画家、学校の先生などがゲストで出ていた。福島の農産物の風評被害、特にコメの風評被害に対する、若者の意見が具体的に紹介されて大変参考になった。若者たちはマスコミに対して「悪い情報は伝えるが、よい情報はあまり伝わってこない」「ニュースはマイナス面ばかり強調する」と言っており、本当にその通りではないかと感じた。今後も若者たちの意見をどんどん取り上げてほしい。

○　１１月２６日(日)のＢＳ１スペシャル「原発事故７年目　甲状腺検査はいま」を見た。原発問題は放送で継続的に取り上げられているが、このままだと当事者以外の関心は薄れていってしまうのではないか。甲状腺がんの発症率は 100 万人に１人か２人だそうだが、福島県が原発事故当時の１８歳以下の子ども３８万人を調査し

たら194人ががんまたは、がんの疑いと診断されたという報告があった。一方、過剰診断の可能性や、不要な手術が行われた可能性も指摘されており、甲状腺検査の見直しを求める人たちと検査の継続を望む人たちとの間で意見が対立している。番組ではそれぞれの意見を取り上げており、そのことも重要だと思うが、原発事故が起こらなければそんな問題は起こらなかったはずなので、原発事故そのものについてもしっかり追及してもらいたい。１２月１３日に広島高裁が四国電力・伊方原子力発電所３号機の運転停止を命じる仮処分の決定をしたことが大きく報道されたが、そういった事実も原発事故問題を考える上で判断材料になると思う。

○　１２月５日(火)～９日(土)のＢＳ世界のドキュメンタリー「カラーでよみがえるアメリカ」は、いかにもアメリカ目線という感じは受けたが、年代ごとに分かりやすく１時間にまとめられており、よい勉強になった。「ＢＳ世界のドキュメンタリー」は学校の教材にも使えるのでないかと思うものがたくさんある。映像で見ると印象に残り説得力があるので、それゆえに怖い部分もあるが、うまく活用できればよいと思う。

○　１２月９日(土)のＢＳ１スペシャル「仲代達矢　命と向き合う」を見た。８４歳になってもなおエネルギッシュに芝居に取り組み、戦争の愚かさ、怖さ、人間とは何かを愚直に表現しようとしている姿に感動した。ＢＳの番組のよさは十分な時間をかけて放送できることだと思う。丁寧に取材されていてよかった。

○　ふだんドラマを見ることがほとんどないが、１１月１２日(日)に始まったプレミアムドラマ「男の操」を楽しく見ている。主演の浜野謙太さんはじめ、ほかの役者もすばらしく、内容も温かみを感じることができ、日曜日の寝る前に見るのには最高のドラマだと思う。最近は衝撃的な内容を取り上げる作品が多く、こうした安心してゆっくりと見られるドラマはＮＨＫならではだと思う。今後もこのようなドラマを作り続けてほしい。

○　１２月１日(金)の新日本風土記「利根川」を見た。自然の美しさ、水とのかかわり、水の恵み、水の驚異、祈りと願いなど、利根川にまつわるさまざまな姿がよくとらえられていたと思う。カメラを水中に入れ、水しぶきを浴びるような迫力のある臨場感あふれる映像はＮＨＫならではで、すばらしかった。エンディングのナレーションの「やさしくて怖い、怖くてありがたい利根川」ということばで利根川が端的に表現されており、番組で伝えたかったことが集約されていたと思う。

○　「新日本風土記」は特にナレーションがすばらしく、時折メモを取りたくなるぐ

らいだ。制作者はそのことばをどうやって生み出したのだろうといつも感心させられる。

○　「球辞苑～プロ野球が１００倍楽しくなるキーワードたち～」を見ている。「初球」「けん制」「敬遠」「グリップ」など、毎回野球のキーワードを１つ取り上げ、それをデータ分析などで掘り下げていく番組だ。司会の徳井義実さん、アシスタントの塙宣之さんをはじめ、データ、統計などを伝えてくれる方々、選手からの視点を伝えてくれる現役・ＯＢの方々も絶妙にマニアックになりすぎないようにしてくれるので興味を持って見られる。来年のペナントレースが始まるまで楽しみたい。

○　「茨城ニュース　いば６」について、１０月初旬に水戸発全国展開のアートプロジェクトについて取り上げていたが、自治体主導でなく、地元の経営者、市民が主導となり活動資金を集めるなど、これからの地方アートの在り方にも一石を投じるプロジェクトであることを丁寧に紹介していた。地方発のアートプロジェクトをきちんと取材し、分かりやすく視聴者に伝えるのは地方創生の観点からも重要であると思う。プロジェクトは来年９月３０日まで開催されているということだが、引き続き取材して地方にもたらす効果なども伝えてほしい。たとえ規模が小さくても、このような地域発のアートプロジェクトを「日曜美術館」の「アートシーン」などで取り上げてもらいたい。

○　１１月２３日(木)の「今日は一日“小田和正”三昧」のようなラジオで人気のあるコンテンツを動画で配信することはあるのか。

（ＮＨＫ側）

「今日は一日“小田和正”三昧」は動画で配信していない。
いろいろな番組でインターネットと連動させる取り組みをしているが、どこまでできるかを探りながら検討している。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年１１月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１７日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、水戸放送局の取り組みと今後の予定について報告した。続いて、茨城スペシャル「私たちが見つけた“昭和”～あの頃（ころ）のひよっこたち～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　員	岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
	大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
	斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
	杉山　正司（埼玉県立文書館館長）
	野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
	原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）

（主な発言）

＜「茨城スペシャル　私たちが見つけた“昭和”～あの頃（ころ）のひよっこたち～」（総合　８月１８日(金)放送）について＞

○　何度も見返した。見るたびに懐かしい気持ちになり、無名でも頑張って生きてきた人たちがいることを改めて知り、励まされた。当時の、ものが十分になく、今ほど自由でもなかった状況を今の若い人たちに理解してもらうには、伝え方に工夫がいると感じているので、２人の若手俳優の目線で番組を進めていくことにやや物足りなさは感じたが、彼女たちの感想を聞くうちに、今回はこの演出でよかったと思った。彼女たちは、今と比べてものがない代わりに、先生と生徒、親子の絆など

人と人とのつながりが強く、一人一人が輝いていたと感じていた。それを見て、今の時代も私たち大人が責任を持って作っていかなければならないと改めて感じた。俳優２人の素朴ではっきりした口調のナレーションとその後ろで流れていた音楽はよかったが、ナレーションとスタジオのトークとで声の印象が少し違って聞こえたのはやや気になった。また、ナレーションでバネ職人の父親のことを「父」と言っていたが、自分の父親以外の人に「父」ということばを使うことに違和感があった。

○　スタジオに、白黒テレビや冷蔵庫、ちゃぶ台、そして集団就職列車の写真パネルなどを配置したのは、当時を思い起こさせる演出としてよかったが、このセットの話題が最後まで全く出てこなかったのは残念だった。せめてアナウンサーから“あの頃”のものとして紹介だけでもすべきだったと思う。スタジオでは、前列に若手俳優２人、後列に取材したディレクター２人が並んで座る配置だったが、４人が話し合うときには俳優が後ろを向いて話さなければならず、見ていて違和感があった。ディレクターには取材秘話を聞くとのことだったが、２人とも話した時間が少なかったため秘話という印象は受けず、ディレクターに話を聞く必要があったのか疑問に思った。

○　全体的によくまとまっていて内容が濃く、メッセージ性もあって４３分があっという間に過ぎた。ただ、若者に伝えるには今の時代とのギャップを埋める何かが欠けていたように思う。われわれよりも上の世代の方たちの話で、私でもややジェネレーションギャップを感じた。また、ディレクターはよい番組を作ったと思うが、出演することには慣れていないのか、身だしなみがやや気になった。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」のストーリーを切り口にしたことで、ドラマの視聴者にも共感できる内容だったと思う。俳優たちが出演していたことにも引きつけられた。彼女たちのナレーションについては、やや棒読みのように聞こえて残念だった。また、茨城らしさや故郷への思いが全体的に希薄だったように思う。登場した“ひよっこ”たちについて、他の地域から上京した人たちとどう違うのか、当時の茨城の状況、育った環境、故郷を離れる思いなど、背景をもっと伝えていれば、それぞれの生きざまがより迫ってくるものになったのではないか。上京していく教え子たちを見送った先生の話は興味深かったが、例えば教え子たちと対談してもらうなど、当時の思いを生の声で聞くことができれば、より地域への思いが伝わってきたと思う。ディレクターの取材秘話は、あまり深い話が聞けなかったので、もう少し掘り下げてほしかった。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」の出演者２人はドラマのイメージが強く印象に残っていて、普通の姿での出演にギャップを感じた。役柄のイメージを保ったまま出演したほうがよかったと思う。番組は、５人もの人を取り上げたため個々の話が浅い印象はあったが、高度経済成長期に悩み、苦労しながら生きる道を決めていった人たちのエピソードは、時代が大きく変わろうとしている今にも通じるものがあったと思う。その中で、バネ職人の「創意工夫は無限だ。まだ挑戦する」ということばは印象的だった。自分で道を切り開いていくことが難しい世の中だが、今の子どもたちには、そのような気持ちを持てるような環境が必要である。そんなメッセージが伝わればよいと思う。こういう番組を若い世代がどう受け止めるのか、意見を聞いてみたいと思った。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」の出演者が出ていたので、特にドラマのファンには関心を持ってもらえたのではないか。実際に高度経済成長期を生きてきた方々のエピソードには説得力があったが、それぞれの内容がやや薄い印象だった。生き生きと夢を抱いて上京したというコメントがあったが、実際にはそんなに単純ではなかったと思う。どのような状況の中で上京したのか、どのような気持ちで家族と別れ、どういう思いで東京に出てきたのか、見送った家族はどのような気持ちだったのかなど、当時の背景や思いをもう少し深く伝えていればより見応えのある番組になったのではないか。その中で、バネ職人のエピソードは、オイルショックの危機的な状況を創意工夫で乗り越えた話などを通して、手仕事の尊さ、手で仕事をしてきた人のすごみが感じられて感銘を受けた。また、上京する教え子を見送った先生は、５０年近くも前に生徒からもらった手紙を今も大事に持っており、その手紙だけでも、先生と生徒それぞれの思いが伝わってきた。当時を懸命に生きた人から、今は本当に豊かと言えるのか問いかけられているような、よい番組だったと思う。

○　高度経済成長期を生きた若者たちの姿を現代の若者に伝えたいという趣旨はよく伝わってきた。頑張って生きてきた方々のことばにはそれぞれに重みがあり、感銘を受けた。無名でも一生懸命生きてきた人のたちの姿を伝える番組がもっとあればよいと思った。ただ、スタジオでの俳優とディレクターのトークがあまり印象に残らなかった。連続テレビ小説「ひよっこ」を切り口に、実際の“ひよっこ”たちの人生を見つめる内容なのだから、トークをなくし、その分もっと個々のエピソードを掘り下げたほうがより印象に残る番組になったと思う。

○　高度経済成長期を生きた“ひよっこ”たち４人の人生や仕事を具体的に紹介していて厚みのあるよい番組だった。集団就職は東北のイメージが強かったので、茨城でも同じようなことがあったのかと新鮮な思いがした。若手俳優２人の取材は素朴

で初々しく、高齢になったかつての“ひよっこ”たちとの対比が鮮明でおもしろいと思った。ただ、番組では成功した人を取り上げていたが、挫折して茨城に帰った人もいたと思うので、そういう人も取り上げてほしかった。また、昭和３０年から４０年頃は、砂川闘争や浅沼稲次郎暗殺事件など、かなり激しく動いた時代なので、時代背景を具体的に伝えるような映像をもっと盛り込んだほうがよかったと思う。スタジオパートについては、俳優とディレクターの配置が話しにくそうで気になった。ディレクターの出演にあまり必要性は感じられなかったが、トークするのであれば対面にしたほうがよい。俳優２人にとっての昭和とは、との問いに対する「家族」と「希望」という答えには、平凡ではあるが本質的で重要なことを受け止めている印象を持った。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」の単なるスピンオフ番組かと思ったが、高度経済成長期に上京して懸命に働いた方々の人生を見つめる内容で、当時の時代背景もかいま見られてとても興味深かった。一つのドラマをきっかけに多彩な番組を放送し、視聴者の視野を広げていくＮＨＫの姿勢には番組作りへの情熱を感じる。ドラマ出演者のリポートは、当時と現代の若者との対比が感じられて興味深く、またスタジオでのディレクターの真摯（しんし）なコメントは番組全体を誠実なものにしていた。当時を生きた視聴者が懐かしく番組を見ることは容易に想像できるが、この時代を知らない世代の人たちにとっても、遠くない昔の歴史を知るよい機会となり、先人たちを敬うような気持ちになれるすばらしい番組だったと思う。

○　時代や環境が変わっても、挑戦する、やり遂げる気持ちを忘れてはいけないというメッセージが伝わってきてよかった。高度経済成長期を象徴するような４人をうまく選んだと思う。紹介されたエピソードから、「モータリゼーション」「男性優位」「中卒」「粘り強さ」など、あの時代に対して思い起こされるようなキーワードが読み取れた。ただ、うまくいった人の話だけを伝えるのではなく、よくなかったことにも目を向けていれば、高度経済成長の明暗なども見えてきてなおよかったのではないか。連続テレビ小説「ひよっこ」出演者の２人は、役柄とイメージがかなり違っていたので残念に思った。また「２人にとっての昭和とは」の問いに答える場面では、向かい合って話してしまい、内輪で話しているような印象を受けた。もっと視聴者に伝えるような見せ方にしてほしかった。この問いに２人が書いた「家族」と「希望」というキーワードは、今回の取材を通してというよりは、ドラマ撮影の過程から感じ取ってきたものに思えた。彼女たちについてはもう少し事前の準備が必要だったのではないか。

（ＮＨＫ側）

紹介した人物の背景については、コメントやインタビューで触れてはいるが、十分に伝えきれなかった部分もあると思う。俳優とは事前の打合せは行っているが、今回はその場で出てくる率直なコメントを大切にしたいと思い、あえてライブ感を重視した収録を行った。それが功を奏した部分もあれば、指摘につながる部分もあったと思う。ディレクターも緊張で話が十分にできず、その場で話してもらうことの難しさを感じている。頂いた意見は今後の番組制作の参考にさせていただく。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２９日(日)のＮＨＫスペシャル「“血圧サージ”が危ない～命を縮める“血圧の高波”～」を見た。血圧が正常とされる人の中にも、重大疾病につながるリスクがあることが伝えられ、驚かされた。生放送で視聴者からの疑問・質問に答える視聴者参加型にしたことや、８０人に協力してもらって行った調査などによって、とても説得力のある番組になっていた。さらに家にあるもので簡単にできる予防方法まで紹介していたこともよかった。１１月５日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ人体　神秘の巨大ネットワーク　第２集「驚きのパワー！“脂肪と筋肉”が命を守る」も、第１集に引き続き、非常におもしろかった。健康に関する番組は他局でも放送しているが、ＮＨＫで続けてほしいと思った。

○　１１月４日(土)のＮＨＫスペシャル　シリーズ古代遺跡透視「大ピラミッド　発見！謎の巨大空間」を見た。クフ王のピラミッドは謎が多く、世界中の関心を集めてきた。この番組でその謎が明かされるのではないかと期待して見たのだが、内部に未知の巨大空間が見つかったという歴史的発見を伝えただけだったので少し残念だった。この発見や「スキャンピラミッド計画」は確かにすごいもので、全体的によい番組ではあったが、謎を解き明かすような内容になっていればなお良かったと思う。また番組では、透視がうまくいかない場面も伝えていたのだが、その原因についての説明がわかりにくく少し残念だった。シリーズとのことなので、次回以降を楽しみにしている。

○　ＮＨＫスペシャル　シリーズ古代遺跡透視「大ピラミッド　発見！謎の巨大空間」は、巨大空間の発見が報じられた直後の放送ということがまず興味深かった。

また、ピラミッドをスキャンするという新技術「ミューオン透視」も興味深く、一体どうやってやるのかと思いながら番組を見た。歴史的な遺産を壊さずに透視して中の状態がわかるのは、すばらしい技術だと思った。スタジオで巨大空間を実物大で再現したのは、その大きさを実感させるよい演出だった。こんなにも大きな空間が 4,500 年もの間発見されずにいたこと、その空間にクフ王のミイラや装飾品が残されている可能性があることに壮大な歴史のロマンが感じられ、期待が膨らむ調査であり番組だった。この調査はＮＨＫが呼びかけ、ＮＨＫがすべてを記録するとのことだが、この調査にどのように関わっていたのか。

（ＮＨＫ側）

「スキャンピラミッド計画」は２年前にカイロ大学やフランスのＮＰＯなどと一緒に国際共同プロジェクトとして発足させたものだ。ＮＨＫは福島第一原発で実績を上げたミューオン透視をピラミッドに活用できるのではないかという知恵があったため、名古屋大学と高エネルギー加速器研究機構にプロジェクトへの参加を呼びかけた。ＮＨＫは画像解析技術の提供などさまざまなバックアップをしながら、研究のプロセスを長期にわたって独占取材し、その成果を今回放送した。解析によって巨大空間の存在は確認されたが、実際に目で見ないと納得できない部分もあると思う。課題は多いが、内部に何があるのか、何らかの形で撮影する可能性を探っていきたい。残念だったとの意見もいただいたが、どこまで謎に迫れるか、期待していてほしい。

○　ＮＨＫが科学者たちの壮大なプロジェクトと連携して番組を制作していることがすばらしいと思う。今後の調査によって大きな結果が出るかもしれない。ピラミッドの謎については、世界中が注目しているので、機会を捉えて最新の情報を伝えてもらいたい。

○　１０月３０日(月)のクローズアップ現代＋「“プルトニウム大国”日本～世界で広がる懸念～」では、日本が保有するプルトニウムが原発約 6,000 発分相当の約４７トンにも及び、海外から懸念の声が上がっている現状が伝えられた。この現状は日本ではあまり知られていないのではないか。原発再稼動と使用済み核燃料の最終処分の問題もあり、また来年には日米原子力協定の有効期限が切れる。そのような状況の中でどうしていくのか。ＮＨＫにしかできない報道だと思う。これからもきちんと報道してもらいたい。

○　１１月１２日(日)の目撃！にっぽん「ショッピングモールの歌姫」(総合 前6:15～6:49)を見た。１０年間にわたり、全国各地のショッピングモールで自分の作った歌を歌って回る半崎美子さんを取り上げたドキュメンタリーだったが、とても心に染み入るよい番組だった。足を止め、何気ない歌詞に涙を流す買い物客たち。ステージ後、歌に共感した人たちが半崎さんに悩みを相談する様子。その悩みや思いを歌に込めて再びステージに立つ半崎さんの姿。そうした内容が、余計なナレーションなく伝えられていて非常によかった。歌を聞かせる際のアップや引きの撮影の仕方も効果的だったと思う。日曜朝の放送は出かける準備などがあると落ち着いて見られない。もう一度じっくり見たいと思った。新聞やテレビ情報誌の番組表では「目撃」「にっぽん」としか書いていなかったが、タイトルをすべて載せるようにしたほうが番組を知ってもらうには効果的でないかと思った。

○　１０月２１日(土)のＥＴＶ特集「がんとともに歩む力を」を見た。ががんの相談支援施設を舞台に、がん患者の方々の日常生活や思いを丁寧に伝えていた思う。特に小児がんの患者について、家族との会話で現実を受け止めようとする姿や、未来にどう希望を持つのか悩む親の姿など、ナレーションを入れずに見つめ続ける形で伝えていたのは非常に説得力があった。がん告知を受けた気持ちをどう乗り越え日常生活を送るのか、患者本人の心境やそれを支える家族の様子、恐怖と闘いながらがんと共存して生きる姿・気持ち・精神を誠実に伝えていた。がんという現実を受け入れ、勇気を持って生きている人たちの姿は、同じようにがんで苦しむ人を力づけるものだったと思う。

○　１０月２６日(木)、２７日(金)の「シリーズ　子どもたちの夢」(ＢＳ１ 後 9:00～9:25、9:25～9:50) は、貧困や震災後の村などさまざまな困難な状況の中で現実と闘いながら夢を持って生きるアジアの子どもたちの姿を、その国のディレクターが密着して描く番組だったが、取材者の思いが伝わってくるような内容ですばらしかった。カメラで周囲を笑顔にしたいと周囲の人を撮影し始めたホームレスの少年や、被災して絶望の中にいた大人たちを歌声で勇気づけた少女など、子どもの持つ可能性を感じさせてくれる内容だった。また、どうにもならないような環境で生まれてしまったとしても、たった一人の大人や社会保障との出会いで人生は変わりうることも実感させられた。子どもの問題は、これからの世界を考える上でとても重要だと思うので、各国の状況を伝える意味でもぜひ再放送してほしい。子どもの可能性という意味では、１１月７日（火)、８日（水）のＢＳ世界のドキュメンタリー「ゴミ処分場のオーケストラ（前編・後編)」もよかった。「ＢＳ世界のドキュメンタリー」は、非常によい番組が多く、シリーズで再放送していることもすばらしい

と思う。

（ＮＨＫ側）

「シリーズ　子どもたちの夢」はたくさんの好評をいただいた。再放送については現在検討している。

○　１１月７日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「手塚治虫　ブラック・ジャックからの伝言」を見た。「ブラック・ジャック」が安楽死や終末期医療など、扱う内容に先見の明があったたけでなく、命について重い問いを投げかけた、現代にも通じる作品であることに改めて驚かされた。医師の鎌田實先生が、地域で患者に寄り添う医療を志すきっかけの一つがこの作品だったというエピソードは興味深かった。また、手塚さんと同じく戦争体験をした大林宣彦監督の「人間は善悪がごちゃまぜになっている。それを描くのが手塚漫画だ。」「医学も、映画も、児童漫画も、“仁術”である」ということばはとても印象的だった。作品にはあの時代を生きた人々の思いと、作者のメッセージが色濃く反映されているように思えた。こうした作品が、今、クールジャパンと言われ、海外からも評価される日本の漫画文化の礎になっていることに気付かされ、貴重な番組だと思った。

○　「第６８回ＮＨＫ紅白歌合戦」の出場歌手が発表されたが、なぜ出場できるのかわからない歌手も一部いる。ＮＨＫの番組なので出演者はＮＨＫが選べばよいと思うが、一方で例えば演歌の出場歌手が減ってきている中で、それでも出場できる歌手についてはどうしてなのかとも思ってしまう。選考基準のようなものがあるのか。

（ＮＨＫ側）

出場者の選考については、６つのデータを参考にさせていただいていることを公表しており、幅広い世代・地域の視聴者へのアンケートや、ＣＤ等の売り上げなどをもとに今年の活躍、世論の支持、番組の企画演出を中心に総合的に検討して決めている。幅広い世代の方にアンケートを取ると、演歌が聴きたい人もいれば、若いアーティストが見たいという人もいる。そういう状況の中で、ジャンルなどのバランスを取るようにしている。

選考基準についてよくご質問を受けるが、お願いして出ていただいているというスタンスだ。今お話ししたような基準でオファーしても、断られる場合はある。

○　多くの人の意向を反映してバランスを取るような番組づくりだと、いずれは、ただいろんな歌手が出てきて終わり、という番組になりかねないのではないか。番組全体を一本貫く筋のようなものが必要と思うが、どのように考えているのか。

（ＮＨＫ側）

毎年テーマを決めている。去年からの４年間は「夢を歌おう」とした。幅広い方たちに楽しんでもらいたい総合テレビの番組なので、若い人に人気のアーティストをお年寄りが見たり、演歌を若い人が聴いたりする中で、それぞれのよさに気づくような機会になればと考えている。今後もジャンルの細分化などではなく、そういう意味では緩やかなテーマで番組全体の一体感を出していきたい。

○　「連続テレビ小説」の物語や主人公はどのようにして決めているのか。最近は実在の人物がモデルとなったドラマが多いと感じている。実在の人の物語はリアリティがあって感情移入できるなど、よい面もあるのだが、一方で事業家も多く特定の企業の広報になりかねない面もある。実在の人の次はフィクションで、などの法則はあるのか、考え方を伺いたい。

（ＮＨＫ側）

法則はない。一律ではないがほとんどの場合、担当者が、時代と視聴者の関心を考えながら「こういう物語を作りたい」という企画を立てるところからスタートする。それにはまる実在の人物がいればその方をモデルにすることもあるし、いなければ「ひよっこ」のようなオリジナルで作る。実在の人をモデルにする場合でも「連続テレビ小説」は伝記ではないので、その方の人生をなぞるのではなく、あくまでモデルとしてさまざまなアレンジを加えながら物語を作っている。その意味では、時代と視聴者の関心を見極めることが題材選びの一番の柱だと考えている。

○　「ワールドスポーツＭＬＢ」を毎年楽しく見ている。スタッツキャストなどの機材も活用しながら、元メジャーリーガーの３人がさまざまな角度から解説しており、日本にいながらメジャーリーグのことを詳しく知ることができておもしろい。海外のスポーツでもきちんと取り上げるＮＨＫの姿勢はよいと思う。

○　先月に引き続き政見放送について申し上げたい。先日総務省の方と話す機会があった。総務省も投票率を上げることを重要な課題としてさまざまな取り組みを行っている。選挙権年齢が１８歳に引き下げられ、若い人の情報源がインターネット中心になるなど状況が変化していく中で、政見放送をより多くの人に見てもらえるようにしていくことは重要なことだと思う。ＮＨＫが先頭に立ち、総務省とも連携しながら、今の時代に合った政見放送について検討してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

頂いた意見を参考にし、部内で検討したい。

○　災害報道では、見ている人に「気をつけてください！」と呼びかけるようなアナウンスを実践しているが、通常の番組でも、見ている人を想定し、視聴者が自分へのメッセージとして受け止められるようなアナウンスができないだろうか。放送は伝わり方が一方通行だが、そのようなアナウンスが番組を通してではなくとも要所要所に入ることで、双方向であるかのような感じで伝わると思う。例えば寝たきりで辛い思いをしている方などに向けて、そのような伝え方があるとよいと思うので検討してもらいたい。

○　座間市の遺体遺棄事件について、被害者が実名で報道されているが疑問に思う。何か基準のようなものがあるのか。

（ＮＨＫ側）

実名報道が原則だ。報道は事実を伝えなければならず、事実であることを伝えるためには実名が必要だからだ。ただ座間市の事件の場合、事件の全容を明らかにするため、警察が発表したこともあって当初は実名報道したが、２日目ぐらいからは遺族の方々の思いなども考慮し、実名であることがどうしても必要な場合には実名を１回だけ使い、それ以外は実名を出さずに女子高校生などの表現にしている。さまざまなことを考慮して匿名にすることはあるが、実名で伝えることが報道の基本であることは間違いない。そこはご理解いただきたい。

○　この事件について、ＮＨＫがそのような配慮のもとで報道していることを初めて知った。被害者に関しては、実名報道が基本であったとしても、こうした配慮が必

要だと思う。

○　「茨城ニュース　いば６」は、現在女性キャスターのみで放送しており、当初はニュース番組としての“重み”などで危惧する声を耳にしたが、そのようなことは一切ない。きぜんとしていて清潔感があり、ニュースから文化的な話題まで、内容によってシャープにも朗らかにもなって視聴者をひきつけていると思う。番組を心地よく見ているという感想をいろいろな人からも聞く。先日の衆院選でも深夜に及ぶ開票速報の中で、正確にわかりやすく情報を伝えており、頼もしさを感じた。もちろん男性アナウンサーもニュースなどで安心して見ていられる安定感がある。また日々の放送を通して水戸放送局の放送現場の努力も感じている。茨城県は民放がないため、ＮＨＫがニュースや防災だけでなく、スポーツや文化などの情報の生命線になっている。これからも正確で楽しい番組を放送してもらいたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年１０月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２０日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、長野放送局の最近の取り組みと今後の予定を報告した。続いて、「山の信州　夏旅スペシャル」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　員	岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
	大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
	野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
	原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
	古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）

（主な発言）

＜「山の信州　夏旅スペシャル」（総合　７月２８日(金)放送）について＞

○　日本が大好きで実際に生活している外国人の目を通して信州の魅力を発見するという作りは、日本人が観光という切り口で伝えるのとは違った視点があって新鮮だった。国宝・松本城の天守閣から見る風景がヒマラヤ山脈の稜線に似ているという見方や、山里を目を輝かせながら歩く感性などは外国人ならではのものだったと思う。それだけではなく、奥蓼科温泉三大原生林の苔（こけ）の森や白駒の池など、日本人にもあまり知られていないような幻想的な場所も紹介されていて、自分でも行きたくなるような内容だった。「一度味わってしまうと出られない。それが信州。」という案内人の言葉には、実際に信州に来て魅力に触れてほしいという番組

の趣旨が集約されていたと思う。ただ松本城の場面で、国宝なのに金網がほつれているところが映し出されたのは残念だった。国際放送でも放送したとのことだが、この番組を見た外国人の反応や信州を訪れている様子が紹介されていれば、海外発信しているイメージが国内の視聴者により伝わると思う。続編などでそうした様子も紹介してもらえるよう期待したい。

○　四季折々の美しい風景写真をちりばめながら、松本城などの歴史や山里などの田園風景、人々の暮らしなどがほどよいバランスで紹介され、海外に向けて信州の魅力を伝える番組としてはよかったと思う。案内役の２人も信州にほれ込んでいる様子が表情や言葉から伝わってきて、説得力のある番組になっていた。外国人観光客を増やそうという全国的な動きを側面からサポートする意味で、地元のことをよく知る制作者がさまざまな角度から魅力を掘り下げた番組を国際放送でも放送することは重要なことだ。どういう見せ方がインパクトがあるのかは国によって異なるという話も聞くので、その点も研究しながら番組を制作するとよいと思う。ただ一方で、日本人が見る番組としては全体的にまったりしすぎていたように感じた。鍮絵（こてえ）や苔の森など魅力的なところや初めて知るようなことが美しい映像でたくさん紹介され、ナレーションも心地よく楽しかったのだが、例えば移住してきた外国人数のデータを盛り込むなどの工夫があればメリハリがついてよりよくなったのではないか。

○　地元の人でも知らないような場所や地域の食など、たくさんの魅力を紹介していてよかった。番組冒頭は、これから紹介される信州のすばらしさが凝縮されており、ナレーションもさわやかで期待が高まる作りになっていた。案内人の２人がそれぞれインドとイタリア出身だったことで、信州が世界各国から人が訪れる土地であることが実感できた。松本城や山里の田園風景、温泉、郷土料理などさまざまな視点で信州の魅力を紹介していく中で、外国人にとってはとても珍しく感じられそうな600体の道祖神や、地元の人にもあまり知られてなさそうな鍮絵など珍しいものがちりばめられて、とても興味深い内容だった。最後が信州の夏旅を象徴する上高地の景色だったのも印象的だった。一方で、インドの案内人のカレー教室の場面は番組の趣旨からするとやや違和感があったし、イタリアの案内人の温泉の場面はコメントがなく物足りなかった。温泉に入ったコメントがあればより旅の臨場感が出たと思う。また、白駒の池は最近人気がある観光地なのでもう少し長めに紹介してそのすばらしさを伝えてほしかった。随所にちりばめた四季の風景写真については、それぞれにコメントを入れていたらなおよかったのではないか。

○　自然、歴史、文化など信州のさまざまな魅力が紹介されたが、特に、日本アルプ

スの景観や棚田の風景など映像や写真がどれもすばらしく、見入ってしまった。また、そばやトウブキなどの食べ物を通して地域の食文化を紹介した中での「信州の魅力は空気と水」という言葉は、地方ならではの魅力を言い表していてとてもよかった。武田信玄が傷ついた兵を癒やした秘湯として紹介された奥蓼科温泉については、温泉と源泉とで温度が違うという話が興味深かった。苔の森の神秘的な風景は、日本の森林のすばらしさを映し出していた。その地域に住んでいたら気づかないような、人々の温かさや暮らし、文化、自然などの地域のよさが外国人の視点でうまく伝えられていたと思う。地域の魅力を世界に伝えるには効果的な番組だった。ぜひほかの地域で同じような取り組みをして地域を盛り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

各放送局とも全国発信はもちろん、海外への発信も意識して取り組んでいる。期待に応えられるよう努めていきたい。

○　番組冒頭のテンポがやや冗長に感じられた。また、最近はＮＨＫ以外でも日本各地の魅力を紹介する番組はあるので、もっと地域放送局ならではの踏み込んだ取材がほしかった。道祖神について「餅つき道祖神」や「接吻道祖神」などいくつか紹介していたが、どういう意味があるのか、どのぐらい種類があるのか詳しく説明がほしかった。信州そばについては、そばつゆだけではなく食べ方なども紹介した方がよかったのではないか。鏝絵（こてえ）を作る伝統技法や農業用水の堰についてももう少し詳しい解説があればなおよかったと思う。一方で、苔の森のようなあまり知られていない場所が紹介されたことや、四季折々の風景を写真で挿入していたのはよかった。写真は動画のほうがより訴求力があったような気もするが、信州の魅力をたっぷりと伝えた番組だったと思う。全国各県に魅力的な場所や人情あふれる人の営みがたくさんあるので、地域放送局のますますの活躍を期待したい。

○　山々の表情、季節の変化がとらえられ、スイスの美しさにも匹敵する映像だと思った。スーパーハイビジョンのきれいな画質でもぜひ見てみたい大変すばらしい番組だった。地域放送で視聴率がよかったことは、長野の人たちがいかに自分たちの地域を大事にしているかを表していると思う。２人の外国人案内人の入れ込み方からも、映像には表れない人々の郷土への思いが感じられた。信州の美しさ、日々の営みが素直に映し出されており、海外の人たちにも届いたと思う。番組を見た人たちから長野に行ってみたいと感想が寄せられたそうだが、国際放送が、日本に昔からあるよさ、美しさを知ってもらう機会になっていてうれしく思う。日本の魅力を海外発信する番組は、日本人が自分たちに当たり前にあるよさを再発見するチャンスにもなると思った。

○　この番組は地元が取り組んだキャンペーンにタイミングを合わせて制作し、全国放送、国際放送とも連動したとのことだが、とても画期的な取り組みだと思う。今自治体は切迫感を持って観光誘致に取り組んでいる。今回のような取り組みをもっと他の地域にも広げてほしいと強く感じた。長期間取材できる予算をつけ、美しい映像をふんだんに使って各地のよさをアピールできるような番組を制作すれば、地域にとって心強いと思う。

（ＮＨＫ側）

長野県は去年は大河ドラマ「真田丸」の効果で観光客が大変多く来たが、今年も引き続き観光客に来てほしいという地元の意欲が高かった。県や自治体を中心に地元が一体となって地域を盛り上げようという機運が高まっているなかで、番組を制作することができた。

ＮＨＫワールドは日本を世界に発信する取り組みを強化している。地域からの発信の強化も大きな柱の一つだ。今回の取り組みは、地域放送局と国際放送局が最初から海外発信を念頭に置いて番組を制作したという面で新しい試みで、これからも続けていきたい。また番組以外でも、各放送局からニュースの企画など 200 本以上を英語化して放送している。今後も、各市町村、各県のさまざまな取り組みとも連携しながら、海外の人たちに日本の地方をもっと知ってもらい、地方のさらなる発展に資する放送に努めていきたい。

○　とてもおもしろかった。日本語の部分をどのように表現したのか、国際放送で放送した英語版も見たいと思った。

○　全体的には信州のプロモーションビデオのような印象だった。写真の挿入は賛否両論あると思うが、信州の四季折々の魅力をうまく伝えていたと思う。写真は誰が撮ったのか、著作権はどうなっているのかが気になった。鬼瓦とは何か、道祖神とは何か、鏝絵とは何かなど、日本人でも知っていそうで知らない事柄について、外国人が聞くことによって改めて確認できるという番組の仕立てもよかった。また、地域の人々の温かさが伝わってきて、そうした人柄が外国人案内人がそこで暮らしている理由の１つだと感じさせる内容だった。番組は、案内人親子の姿やお寺の家族など、さまざまな家族のつながりを映し出していたが、海外の人たちに向けて日

本の家族のあり方を見せるような形になっていればなおよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

長野放送局ではホームページの中に「撮るしん。」という写真の投稿サイトを設けており、よい写真がたくさん寄せられている。番組の写真はその中から使わせていただいた。撮影した方全員に連絡したところ、「長野の魅力を世界に知ってほしい」と快諾をいただき、使うことができた。

○　「地元で暮らす２人の外国人による案内」というのが新鮮で、まさに信州に行ってみたくなる番組だった。インド人の案内人・アシシュさんのパートからは、長野の文化と共に、国境を超える、家族、人とのつながりを感じた。松本城の紹介で、天守閣からの景色がヒマラヤの景色とそっくりだというコメントに引き付けられた。妻の実家の寺でのアシシュさんの様子から、インドと日本の文化の共通性を感じた。穂高の旅では、田んぼの用水路を「流しそうめんの水」と評したアシシュさんのお子さんのみずみずしい表現力に驚いた。「長野の食べ物、山、水、空気、そして周りの人たち。味わうと出られない」と語る笑顔に、長野を大事に思う気持ちが感じられた。イタリアのクリスティーナさんは、「八ヶ岳の恵みを体感できる路線バスのツアーを計画中」とのことだったが、リポートに慣れていない様子にかえって好感を持った。魔よけや招福のために蔵などに飾る鏝絵は、４０種類もあるとのことだが、初めて知るもので、地域の人の想いや、ユーモアも感じられ大変興味深かった。番組の合間に挟み込まれる、信州の四季の映像も大変美しく、更にこの２人のレポーターの感性によって、旅番組の枠に収まらない特別なものを感じた。海外の人にも興味を持ってもらえると思った。

＜放送番組一般について＞

○　９月１５日(金)の歴史秘話ヒストリア「世界が驚いた３つのグレートウエーブ　葛飾北斎　パワフル創作人」、９月１８日(月)の「日本－イギリス　北斎を探せ！」(総合 前 9:05～9:50)、１０月７日(土)の「北斎インパクト～世界が愛した超絶アート～」(ＢＳプレミアム 後 9:00～10:29)など、９月から１０月にかけてさまざまな番組が葛飾北斎を取り上げ、多様な切り口でその生きざまや作品のすばらしさに迫っていて興味深く見た。特に、「北斎インパクト～世界が愛した超絶アート～」では、北斎が印象派などの西洋美術のみならず、世界のファッションや、音楽、アニメ、さらには社会思想にまで多大な影響を与えてきたことが紹介された。そうし

た影響力が結果として幕末以降の日本の歴史にも大きく関わっていることもわかりとても見応えがあった。

○　９月から１０月にかけて葛飾北斎の関連番組を数多く放送していて、興味深く見た。中でも９月１８日(月)の特集ドラマ「眩（くらら）～北斎の娘～」(総合 後 7:30～8:43)や、９月２２日(金)の歴史秘話ヒストリア「おんなは赤で輝く　北斎の娘・お栄と名画のミステリー」では、今まであまり焦点が当たらなかった北斎の娘、お栄を取り上げていて目新しさがあった。浮世絵師・お栄の知られざる姿を知ることができてとてもよかったと思う。北斎は長野県とも関係が深く、長野放送局が９月２２日(金)の知るしん。信州を知るテレビ「北斎×亜門～“スーパー老人”に学ぶ！～」でも北斎を取り上げていた。長野県における北斎晩年の足跡をたどりながら、北斎やお栄のすばらしい作品も見ることができて大変よかった。

○　歴史秘話ヒストリア「世界が驚いた３つのグレートウエーブ　葛飾北斎　パワフル創作人」を見た。「グレートウエーブ」はレオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」に匹敵すると言われるぐらいに世界で高く評価されているが、そのことは日本人にあまり知られていなかったと思う。北斎がその境地にたどり着くまで、４０年間にもおよぶ下積みの中での西洋絵画との出会いや、ライバル歌川広重との対決など、さまざまな苦難の中から名作が生み出されたことが紹介され、非常に説得力があった。このほか、特集ドラマ「眩（くらら）～北斎の娘～」や「日本－イギリス　北斎を探せ！」、「北斎インパクト～世界が愛した超絶アート～」など、さまざまな番組で多角的に北斎の天才性を紹介していた。日本人が知らなかったようなことも数多く伝えたことは、浮世絵をはじめとした日本の美術が世界的に評価されることにつながると思う。これを契機にほかの浮世絵作家なども積極的に取り上げてもらいたい。

○　９月３０日(土)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　プロローグ「神秘の巨大ネットワーク」を見た。シリーズ全８回の輪郭を示すような内容になっており、導入番組としてよかったと思う。また、１０月１日(日)の第１集「“腎臓”が寿命を決める」は、司会の山中伸弥教授とタモリさんが専門用語を多用せず平易な言葉で番組を進行していてとてもわかりやすかった。これまでは尿を作る臓器という理解だった腎臓について、メッセージ物質を発して体内のさまざまな臓器をコントロールする臓器であることが、ＣＧなどの映像を交えてとても詳しく、わかりやすく伝えられていた。今までにない知見が紹介され大変興味深かった。

○　１０月１日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　神秘の巨大ネットワーク　第１集「“腎臓”が寿命を決める」を見た。腎臓について新たな知識を得るこ

とができ、またタモリさんの進行が見る人を引き込むものになっていて、とてもおもしろかった。これからのシリーズにも期待している。

○　９月８日(金)の金よう夜　きらっと新潟×ぐんまスペシャル「尾瀬～私たちに何ができるのか～」は、シカの食害によって尾瀬の自然が被害を受けていることが伝えられていて非常によかった。シカの食害はあまり取り上げられないが、全国各地で起きており、自然破壊だけでなく、農業にも害を及ぼすため非常に深刻な問題となっている。動物愛護の観点もあって難しい問題だが、この番組を契機に、今後も農業に与える影響や全国の状況など、視野を広げて伝えてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

動物による食害については、各地で問題になっているため継続的に取材をしている。尾瀬についても継続取材すると前橋放送局から聞いている。現時点では未定だが、今後ニュースの企画リポートなどで放送することもあると思う。

○　９月２５日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「ようこそ地下空間へ！知られざるプロの現場ＳＰ」は、日本の大型トンネル史上最も困難といわれる大工事の現場に密着しており大変興味深く見た。地下の現場での大がかりなトンネル工事であるにも関わらず、わずかなズレも許されない過酷な作業に驚かされ、現場スタッフたちの緊張感や迫力がとてもよく伝わってきた。作業内容やその難しさの説明もアニメーションなどを用いてわかりやすく、ナレーションも的確だったため、視聴者としても緊張感の中で番組を見ることができて大変よかった。番組ではこのほか、高級フランス料理店のソムリエや全国から客が訪れるホットケーキ店の主人、最高級ホテルの理髪店の店主など、地下を舞台に活躍しているさまざまなプロフェッショナルたちを紹介していた。それぞれ分野は全く異なるが、皆すばらしい仕事をしていることがよく伝わってきて、楽しく見ることができた。

○　「ブラタモリ」では、１０月７日(土)「＃８６　黒部ダム」、１４日(土)「＃８７　黒部の奇跡」と、２週にわたり黒部ダムを取り上げていた。今までは“観光スポット”や“発電”というイメージしかなかったが、番組では、この場所がダムを作るのにうってつけの“奇跡の地形”であることが徹底的に解き明かされていて大変興味深かった。特徴的な地形ができた成り立ちについてのチョコレートを使った説明が非常にわかりやすく、感心した。富山大学の竹内章教授の解説もわかりやすく、この場所で水力発電を行う有利性についてよく理解できた。また、一般には入ることができないダムのトンネル内部や放水口間近で見る放水など、なかなか見ら

れない映像に圧倒された。戦後間もない時期にスタートした工事だったが、完成の裏には当時の工事技術の高さや外圧に屈しない姿勢があったことも伝えられ、日本人の知恵と意気込みが伝わってくる番組で、とても勉強になった。

○　１０月９日(月)の「下っぱ酒場」(総合 後 11:20～11:50)を見た。チャラン・ポ・ランタンを“ママ”役、ふかわりょうさん、マンボウやしろさんを“常連客”役にして、いろいろな職業で活躍されている“下っぱ”の方々をお客さまに迎えて話を伺う仕立てでおもしろかった。各職業のおもしろいところや悩みを編集でつなぎながら、出演者のカットを多角的に映し出すなど見せ方の工夫があって飽きずに見続けることができた。テンポがよい一方で内容に薄さを感じたが、現代社会を忠実に切り取っていたと思う。ふかわさんとマンボウやしろさんには、チャラン・ポ・ランタンの２人やお客さまの魅力をもっと引き出してもらいたかったが、実験的な番組としては興味深く、次が見たいと思った。

○　１０月１１日(水)のプレミアムカフェ選「イグネ～仙台平野に浮かぶ緑の島～」は、風雪から守るために家の周りに作られた屋敷林・イグネのある生活を見つめる内容で、最近見た中でも秀逸なドキュメンタリーだった。複数の家族の姿を通して仙台平野の原風景ともいえるイグネのある暮らしから、景色、情緒、風習、文化などが見えてきて興味深く見ることができた。放送後、実際に現地に行く機会があったが、現在イグネはわずかしか残っておらず、この番組の映像がいかに貴重なものかわかった。いつの時代に見ても心に残る番組制作を今後も続け、後世に残してもらいたい。

○　「囲碁フォーカス」は、印象的なトピックを設けて基礎的な戦術を紹介する「囲碁ワードで基礎力アップ」や囲碁を笑いで身近に感じてもらう「囲碁川柳」、囲碁の今を伝える「フォーカス・オン」など、多彩なコーナーで初心者に囲碁の基礎と楽しさを伝えていておもしろい。「囲碁ワードで基礎力アップ」は小山竜吾六段の冷静な解説と、司会のダイアナ・ガーネットさんのやりとりが絶妙だった。１０月から新たに安藤和繁五段が担当するが、これからも楽しみだ。「囲碁川柳」ではほのぼのとした作品が紹介され、「フォーカス・オン」では全国高校囲碁選手権大会の様子などを伝えており、いろいろな世代に向けて囲碁の楽しみ方が紹介されていて見逃せない番組になっている。その分野に詳しくない人にも興味を抱かせる番組づくりはＮＨＫにしかできないことだと思うので、これからも視聴者の生活を豊かにし続けてもらいたい。

○　気象情報で、雨雲の推移を表示する際の時間が数字のみで表記されているが、これだと雨雲の動きを見るのと同時に時間も読まなければならないので、見にくいと感じている。一時期、時間の推移をスライド式のバーで表示するようになり、感覚的に見られるようになってよかったと思っていたが、ほどなくして元の表示に戻った。今の表示は２つのことを同時にしなければならないので、より直感的に見られるような表示方法を検討してもらいたい。

○　今回の衆院選は、北朝鮮の問題など課題が山積する中突然の解散で、野党の動きも慌ただしく、焦点がわかりにくい選挙戦となっている。その中で多くのマスコミが興味本位の報道を行っているという印象を強く受ける。ＮＨＫには、公共放送として有権者が政策によって判断できるような選挙報道をお願いしたい。公平公正で正確な情報発信に期待している。

（ＮＨＫ側）　選挙報道については、突然の解散や新党の誕生など目まぐるしく情勢が動く中、情緒的な問題は極力抑え、冷静に各党の主張が伝わるような報道に努めている。開票速報についても投票行動の詳しい分析や結果の意義を伝えながら、今後の日本の政治がどのように動くのか、記者解説や各党へのインタビューなどを通じて全体像がわかるような番組を心がける。

○　政見放送のタイトル表示について壁紙のようなものでなく違った色のものにするなど、もう少しやわらかい雰囲気のものにした方がよいと思う。可能な範囲でより多くの視聴者に見てもらう工夫をお願いしたい。

○　政見放送について、毎回全く同じコメントで始まり、そうした放送が、何回も流されることに違和感がある。ＮＨＫは、他の番組では視聴者を意識した番組づくりを行っているのに、政見放送は視聴者との間に溝を感じる。もっと工夫することはできないか、可能な範囲で検討してもらいたい。

○　政見放送もほかの番組同様、多くの人に見てもらうための工夫は必要だと思う。

○　全く音楽がない番組も珍しい。例えばなんとなく見てみようと思うような音楽を用意し、この音楽が流れれば政見放送という誘導を図るといった工夫もできるのではないか。可能な範囲で検討してもらいたい。

○　番組のＢＧＭについて申し上げたい。ＮＨＫスペシャル「映像の世紀」のテーマ

曲などで、映像と音楽が作り出す感動の大きさは理解しているが、一方で最近いくつかの番組のＢＧＭで、民放の有名な番組の曲が流れ、番組のパロディかのような演出があった。遊び心というのもわからないではないが、あまりにも安易な選曲ではないか。

（ＮＨＫ側）

パロディの意図はあったと思う。安易な選曲との指摘ついて、否めないこともあるが、一般的にＢＧＭについてはさまざまな課題があると考えている。「音が大きすぎる。コメントが聞こえない」といったご意見も頂くが、世代による傾向や個人の好みの問題もある。すべての方に満足していただくのは難しいが、音楽の有無を含めて、その時々で一番ふさわしい形で制作しているつもりだ。選曲が安易でないかという指摘も含め、音楽・音声については今後も慎重に検討していきたい。

○　「あの人に会いたい」(総合 前 5:40～5:50)は、１０分の番組だが、さまざまな分野で活躍し、亡くなられた方の名言や生き方が、今に生きる私たちに、たくさんのヒントを与えてくれる番組だと思う。

○　「あの日、わたしは～証言記録　東日本大震災」(総合 前 10:50～10:55)は、僅か５分でありながら、その時そこに生きる人の思いや取り組みが伝わってくる。取材を続け、制作し続けることは、容易ではないと思うが、ずっと続けてほしい。

○　「びじゅチューン！」(Ｅテレ 後 7:50～7:55)は友人に勧められて見始めた。井上涼さんのたぐいまれな才能を感じる。時間が短い番組は見やすく、興味を持つきっかけになるのでぜひ続けてほしい。

○　１０月９日(月)のハートネットＴＶ「１００万人に１人の笑顔　難病ＰＬＳを生きる　落水洋介」(Ｅテレ 後 8:00～8:29)を見てとても感動した。ＡＬＳを深く知るきっかけになったのが何年か前のハートネットＴＶだったが、地道な番組作りには敬服する。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年９月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１５日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、宇都宮放送局の最近の取り組みと今後の予定を報告した。その後、平成２９年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、平成３０年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。続いて、とちスペ「トライ　～難病ＡＬＳと向き合って～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　員	岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
	大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
	斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
	野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
	原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
	古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）
	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜「平成２９年度後半期の国内放送番組の編成」および
「平成３０年度の番組改定」について＞

○　番組タイトルについて、新番組の「ドスルコスル」のように意味がすぐに理解できない番組タイトルはいかがなものか。子どもの興味を引くためだとしても、なるべく正しい日本語のタイトルを心がけていただきたい。

○　「熱血解剖！Ｂリーグ」という新番組でバスケットボールを取り上げていただけるのは大変よいことだが、昨今は女子も強いので、男子だけでなく女子のゲームも取り上げていただければと思う。

＜とちスペ「トライ　～難病ＡＬＳと向き合って～」
（総合　６月９日(金)放送）について＞

○　番組を見て初めてＡＬＳという難病を認識した。アニメとドキュメントという新しい表現方法に挑戦したのはとてもよかった。アニメはプロではなく地元の学生たちが制作していたが、素人っぽいシンプルさがかえって難病ＡＬＳの現状をリアルに表現していたと思う。上原さん親子の関係がとてもうまく描かれており、特に、友人に父親の病気を隠していた主人公が次第に父親を励ますようになる心の変化の過程は分かりやすかった。人工呼吸器をつけるかつけないかの家族の議論では、生きる意味を考えさせられた。今後も地元の大学や企業と連携して番組作りをすることで、地域放送局の番組として見応えがあるものになると思う。

○　少々深刻な番組かと思ったが、冒頭の母親の笑顔と親子の会話がそのイメージを和らげてくれた。地元の大学との協力でアニメ化したそうだが、映像の動きや色彩などを必要最小限にとどめ、シンプルに作られていたのは番組の内容に合っており、大変よかった。初めて父親から病気のことを聞いたときに子どもたちは大変ショックを受けていたが、それとは対照的に、子どもたちを思う両親の気持ちや対応のすばらしさ、家族の絆に感動した。また、話せなくなった後も会話ボードを使って心を通わせる姿に、夫婦愛や心の強さを感じた。ＡＬＳの患者が新薬によって快方に向かうことを祈りたい。なお、「とちスペ」というタイトルが３秒ぐらい出たが、もう少し長く表示してもよい気がした。

○　地元の大学の学生がアニメを作ったことは意味があると思う。一見難しそうな病気について、見る人が自然に入り込みやすいアニメになっていた。私は介護施設に勤めており、今まで会ったＡＬＳの患者さんとアニメの家族の姿が重なって胸を打った。ＡＬＳを患った父親がいったんは家族に迷惑をかけたくないと呼吸器をつけない選択肢を選んだが、呼吸器をつけてでも生き続けることで、息子の成長する姿を見たいと気持ちが変化するところにとても感動した。最後に治療薬の開発が進んでいることも取り上げられたので希望が持ててよかった。ＡＬＳの患者や家族にも見てほしいすばらしい番組だった。

○　父親の病気を周りに話せなかった主人公が、かつて父親が熱中していた地元ラグ

ビーチームの仲間たちと触れ合ううちに気持ちが変化し、成長していく姿をアニメの中でうまく描いていた。悩みながらも父親には人工呼吸器をつけてでも生きていてもらいたいと思う主人公の心の変化がうまく捉えられていた。地元の大学生たちが中心に作ったアニメだが、素朴さがかえって内容を心に訴えるようなものにしていると思った。栃木県の大学のＡＬＳに関する研究も紹介され、地域の話題をうまく取り上げた地域放送局らしい番組だった。全国に向けてもぜひ放送してほしい。

○　ＡＬＳという病気の恐ろしさがよく理解できた。もともとラジオドラマだったとのことだが、家族一人一人の心の動き、実際の行動などがシンプルな中にも的確にうまく表現されていたと思う。特に母親が深刻な話題でも、取り乱すところがなく、しっかりしているので重い話が救われたような印象を持った。実際はもっと過酷な状況がいろいろとあったのではないかと想像するが、ＡＬＳという難病を知ってもらうという意味では今回のような作り方でよかったのだろう。ドキュメンタリー部分で息子が「父が頑張っているからもっと頑張ろうと思う」と語っていたが、健康な父親でもこのようなメッセージを子どもに伝えるのは難しいのに、この家族の絆の強さに改めて感心した。

○　１時間という中でアニメに関しては若干間延びした印象があった。地元の大学生と協力して制作していること自体はすばらしいことだと思うが、あの表現方法のアニメとしてはいささか長く感じられた。新薬開発の話は興味があるので、もう少し時間を割いてもよかった。実際は患者本人にはドラマで描かれている以上に大変なことがあるだろうと想像するが、感動的なドラマとして仕上がっており、ＡＬＳを多くの人に知ってもらうという点では意義があったのではないか。

（ＮＨＫ側）

患者の視点にすることも考えたが、ドラマに関しては主人公を患者の子どもにしようと考えた。ドキュメンタリー部分の父親のインタビューはもっと工夫が必要だったかもしれない。アニメ部分をもう少し短くし、ドキュメンタリー部分を膨らませることはできたが、今回はラジオドラマで作ったものを生かし、なるべく長さを変えずに番組を制作した。

○　ＡＬＳは一刻も早い治療方法の開発が望まれる病気の一つだと改めて考えさせられた。自分がもしＡＬＳになったらどのような選択をするか、家族だったらどうするかと突きつけられる番組だった。迷惑をかけることを恐れるのではなく、家族や地域の人たちとお互いを気にかける関係性をどう育むのかが大切だと思う。アニ

メを地元の大学生と作ったことについては制作側の意図を伺いたい。アニメだけで終わらせるという選択肢もあったと思うが、病気の現実や治療の最前線を伝え、患者やその家族が少しでも希望を持てる内容になっていた。

（ＮＨＫ側）

文星芸術大学では普通のアニメーションとは違う手法でデジタル技術を使い、比較的時間やお金をかけずにアニメを作れる方法を開発しており、地元企業などのホームページ・広告で使われ始めた。そのため番組で栃木らしさや地域性を出すため、今回その新しい技術を取り入れた。地元の若い人たちの取り組みを発表する場にもなればうれしい。

○　栃木を舞台にＡＬＳへの理解を深め、地域の人たちと関わってアニメを制作し、番組にしたことはすばらしい。実話を元にしているからこそリアリティがあり、もしも自分の身に起きたらと想像しながら見ることができた。ＡＬＳの治療法の開発を信じながら息子の成長を見届けるために、人工呼吸器をつける選択をした父親の現実の姿がドキュメンタリー部分で取り上げられ励まされた。情報番組で単に取り上げるだけでなく、地域の人たちに番組制作に携わってもらうことでも公共放送として地域づくりに貢献できることに感銘を受けた。

○　難病のＡＬＳを取り上げたラジオドラマとしてはよくできていた。最後のドキュメンタリーも丁寧に取材し、掘り下げられており、すばらしかった。栃木県でいろいろな人が関わったことや、そういう取り組み自体はすばらしかったが、アニメには引っかかった。ＡＬＳの啓もうという視点で考えると、きちんと番組制作をしている中で全国に発信するのであれば、このアニメのクオリティではいささか厳しいのではないか。

○　番組全体についてであるが、自分はどう生きるのか、そしてどう命を閉じるのかという死生観を問われる番組だった。人生を長引かせずに終えるのではなく、病気と闘い続ける意思を持って人工呼吸器をつける決断を父親が下す場面では、支える家族や地域社会の中で、そして一人では生きていけないという現実がある中で、自分はどう生きていくべきなのかという重いテーマを投げかけられた。地元の技術や知恵、アイデアを活用しながらの番組作りは、地域でこれから生きていこうという若い人たちにとって良い経験にもなったと思う。このような番組が引き続き、続々と生まれることを期待する。

（ＮＨＫ側）

ラジオドラマとしていったん完成したものをより多くの人たちにどう届けるかと考え、アニメ化という手法に取り組んだ。地域放送局としては一つの挑戦だったと思う。

＜放送番組一般について＞

○　８月５日（土）のＥＴＶ特集「告白～満蒙開拓団の女たち～」を見た。９２歳になる元開拓団の女性が「理屈ではない。命があって日本に帰らなければならなかった」と言ったひと言はとても重かった。

○　ＥＴＶ特集「告白～満蒙開拓団の女たち～」を見た。元開拓団の女性たちが、やっとの思いで話してくれた様子を見て、当時の苦しみをいまなお抱えて生きている人のことを改めて考えさせられた。一方でこうした戦争の記録をどのように保存するのか、若い世代がどうしたらこのような番組を見てくれるのか、課題も感じられた。ひとつ気になったのはテレビ情報誌で実際放送されたものとは違うタイトルで紹介されていたことである。タイトルは放送間際に決まっているのだろうか。

（ＮＨＫ側）

特に戦争と平和を扱った番組については戦争を知らない世代に見てもらいたいという強い願いがある。８月１２日（土）のＮＨＫスペシャル「本土空襲　全記録」は通常より多くの３０代、４０代の現役世代に見てもらえたという手応えがあった。

８月に放送した戦争関連の「ＮＨＫスペシャル」は５９歳以下の方に昨年度よりも平均してよく見られたというデータもある。今後詳細を分析し、さらにより多くの方に見ていただけるような工夫を重ねたい。

番組のタイトルについてであるが、ドキュメンタリーなどは編集を通して最初の構想と大きく異なるものになることもある。放送の間際まで、一番適切なタイトルを考えているとご理解いただきたい。

○　戦争と平和を考える特集を中心に番組を見た。総合テレビでは「ひるまえほっと」「首都圏ネットワーク」など地域の身近な話題に切り込んだ一方で、Ｅテレ、ＢＳではより専門的な分野や、世界規模の視点など、各波で幅広く取り組んでいた。

○　ＥＴＶ特集「告白～満蒙開拓団の女たち～」を見た。元開拓団の女性たちが勇気を持って真実を打ち明ける姿を見て胸打たれた。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」の中で登場人物がインパール作戦の話をしていたので、８月１５日（火）のＮＨＫスペシャル「戦慄の記録　インパール」(総合 後 7:30～8:43)を関心をもって見ることができた。そのほかドラマ仕立ての８月１２日（土）のスペシャルドラマ「返還交渉人～いつか、沖縄を取り戻す～」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～11:29）や、人々の暮らしに着目した８月１９日（土）のＥＴＶ特集「描き続けた“くらし”戦争中の庶民の記録」など、いろんな番組で取り上げることでふだん戦争の話題にさほど関心がない視聴者にも興味を持ってみてもらえたのではないか。

（ＮＨＫ側）

戦後７２年にあたり、繰り返しやることにも意味があるが、歴史に新しい光を当て、新資料を発掘することには毎年力を入れている。ここに来て、証言される方は９０代の方など人生の最後のステージに入っている。これまで語ってこなかった方に語っていただけるのは、取材者が何回も足を運び、信頼関係を作ってきたからである。ビッグデータなどの新しいさまざまな手法を使うことで、今後も戦争の真実を伝えていきたい。

○　８月６日（日）のＮＨＫスペシャル「原爆死～ヒロシマ７２年目の真実～」は、戦後７２年もたっているにもかかわらず、５５万人分のビッグデータを元に新たな真実が次々に明らかになり、原爆被害の恐ろしさを改めて感じさせられた。

○　８月１３日（日）のＮＨＫスペシャル「７３１部隊の真実～エリート医学者と人体実験～」を見た。部隊が証拠を隠滅、また関係者が堅く口を閉ざしていた中で、ソ連で行なわれた裁判の音声記録を発掘し、多くの資料や記録の解析とともに、７３１部隊の実態に迫っていた。

○　ＮＨＫスペシャル「戦慄の記録　インパール」を見た。イギリス軍の拠点があっ

たインド北部のインパール攻略のために無謀な作戦で３万人以上の日本兵が亡くなった悲惨な状況が改めてわかった。

○　ＮＨＫの戦争と平和を考える番組は単に歴史を振り返るのでなく、戦後７２年がたってもいまなお新しい事実や証言を掘り起こしていた。今後も戦争の真実を伝え続けてほしい。

○　７月２２日（土）のＮＨＫスペシャル「ＡＩに聞いてみたどうすんのよ！？ニッポン」（総合 後 7:30～8:43、9:00～9:49）を見た。２時間を超える長い番組だったが、とても興味深かった。ＮＨＫが開発したＡＩが今までのデータを分析し、その提言の因果関係を人間が考えていくという新しい手法は、今後さまざまな活用ができるのではないかと感じた。

○　９月３日（日）のＮＨＫスペシャル「世界初　極北の冒険　デナリ大滑降」を見た。北米大陸最高峰のデナリ（標高 6,190ｍ）のほぼ垂直の南西壁を滑り降りる冒険に挑む山岳スキーヤーに密着した番組だった。途中でコースを間違え、断崖絶壁から転落しそうになるなど、まさに大冒険そのものの番組だった。迫力のある映像をどのように撮影したのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

今回のデナリのロケはヘリコプターを中心に撮影したものである。

○　９月９日（土）のＮＨＫスペシャル　ＭＥＧＡ　ＣＲＩＳＩＳ　巨大危機Ⅱ～脅威と闘う者たち～　第２集「異常気象・スーパー台風　予測不能の恐怖」を見た。パネル、映像などをふんだんに使いながら、スーパー台風が関東、東京に上陸するという想定のドラマも交え、視聴者に分かりやすいものになっていたと思う。視聴者の不安をあおるのではなく、あらかじめ危険性をわかりやすく解説し、何かがあったときの判断材料になるような番組を作ってほしい。

○　８月２６日（土）に再放送された「北アルプス　ドローン大縦走」（総合 前 10:05～11:18）を見た。天空から見たドローンの映像は、まるで空中を散歩しているかのような景色で、自分が鳥になり、アルプス上空を飛んでいるような気持ちよさを感じた。特に槍ヶ岳の山頂に到達したときの真上からの映像はまさしくドローンにしか撮れないものであり、すばらしかった。

○　「ＢＳ世界のドキュメンタリー」は本当にすばらしい番組が多く、何回再放送してもよいと思う。８月２２日（火）、２３日（水）に再放送された、ＢＳ世界のドキュメンタリー選　シリーズ　ビフォー＆アフター・ヒトラー「ヒトラー　権力掌握への道　前編」「後編」と８月２４日（木）、２５日（金）に再放送されたＢＳ世界のドキュメンタリー　シリーズ　ビフォー＆アフター・ヒトラー「アフター・ヒトラー　前編」「後編」は、いま改めて、戦争に勝者はおらず、あらゆるものを破壊するのだということを感じさせられた。

○　ＮＨＫワールドで放送している「Ｃｏｒｅ　Ｋｙｏｔｏ」がＢＳ１で放送されているのを見た。９月７日（木）の「京料理　味の極意～こだわり尽くす食のたくみ～」(ＢＳ１　後 2:00～2:28）では和食、京料理の話をしていた。ユネスコの世界無形文化遺産に和食が登録されたが、京料理だけが和食のすべてであるかのように取り上げることには違和感を覚えた。京都だけでなく日本各地を取り上げてほしい。

○　９月９日（土）と１０日（日）の「カーリング　ピョンチャンオリンピック　女子日本代表決定戦」(ＢＳ１　９日(土)前 8:55～11:56、後 3:25～5:54、10 日(日)前 8:55～後 0:03)を見た。全試合見ることができて最高の週末になった。

○　「ブラタモリ」で長瀞が取り上げられたが、地元の人も知らないような所を新しい切り口で取り上げており、地域の活性化につながっている。

○　「ブラタモリ」は毎回見ている。９月２日（土）の「十和田湖・奥入瀬」でも、地形や環境、さらには気候などさまざまな分野の情報が織り交ぜて取り上げられており引き付けられた。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」はいろいろな話題が盛り込まれており、いつもほほえましく見ている。８月１１日（金）の放送では、記憶喪失で見つかった実が奥茨城に帰り、田植えをするシーンがあったが、あたかも前進しながら田植え作業をしていたようだった。地域によって違うのかもしれないが、手植えは後ずさりして行うのではないかとやや疑問に思った。

（ＮＨＫ側）

連続テレビ小説「ひよっこ」には農業指導の方もいて、万全を期しているはずだが、指摘があったことは現場に伝える。

○　土曜時代ドラマ「悦ちゃん～昭和駄目パパ恋物語～」を楽しく見ている。土曜日

の１８時台に家族で楽しめるような番組が編成されているのも好感が持てる編成だと思う。

○　ニュース番組でのＪアラートの扱いには戸惑いがあった。視聴者はＪアラートが発信されたときにどう対応したらよいのかわからないのではないか。報道機関としてＪアラートの伝え方についてどのように考えているのか教えて欲しい。

（ＮＨＫ側）

Ｊアラートについては、われわれとしてもどのような形で伝えるのがよいのか、悩んでおり、日々検討を進めている状況である。

○　本日もＪアラートが発令されたが、前回の８月２９日（火）のときよりは混乱が少なかったように感じている。前回はミサイル発射についての報道番組の中で、同じセリフを繰り返しアナウンスされることで、一大事であるということはわかったものの、どう受け止め、行動に移したらよいのか分からなかった。ＮＨＫの報道、アナウンスは危機に関してどのようなマニュアルがあるのかを知りたい。

（ＮＨＫ側）

まずは命と暮らしを守るという観点から危険を伝えている。それから、ミサイルの発射を伝え、できる限り避難してもらう、自分の命を守る行動に出てもらう放送を心がけている。日本の上空を通過しているときと上空を通過した後では放送内容をできるだけ切り替え、いかに行動したらよいのか、視聴者の皆さんが判断できるような報道にしたい。

○　茨城県知事選関連番組について申し上げたい。水戸放送局では「茨城ニュースいば６」の中で８月１０日（木）の公示日以降、毎日のように特集を組み、一人ひとりの候補者の政策や意見を丁寧に取り上げ、有権者に役立つ情報を伝えていた。

○　ＮＨＫワールドＴＶの「Ｊｏｕｒｎｅｙｓ　ｉｎ　Ｊａｐａｎ」という番組の日本の風土や祭りを取り上げた映像がすばらしい。もっと多くの人に見てもらえるように、例えば、外国語で作った日本の番組を一覧して見られるようなサイトを作ってはどうか。

○　「Ｊｏｕｒｎｅｙｓ　ｉｎ　Ｊａｐａｎ」のウェブページにブランドがはっきり

わかるワインが映っている。ニュースを除く番組などにおける企業や商品名の扱いについて、ルールがあれば教えていただきたい。

（ＮＨＫ側）

放送についてもホームページについてもガイドラインを作っている。ご指摘は担当部局にも伝えたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年７月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２１日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、首都圏ネットワーク　シリーズ「シェアが映すニッポン」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙野孫左ェ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　　員	岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
	大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
	斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
	野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
	原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜首都圏ネットワーク　シリーズ「シェアが映すニッポン」
（総合　５月２９日(月)～６月２日(金)放送）について＞

○　シェアというと、単に「モノを分け合う、分かち合う」というイメージだったが、このシリーズを見て、さまざまなシェアの形があることが分かった。５月２９日(月)の「消費も変える！？“シェアガール”の日常」では、住まいや旅行先の宿泊、さらにはハンドバッグや衣類までシェアで賄う若者を紹介していた。モノを所有せず必要なときだけシェアすればよいという、私たちの世代とは全く異なる価値観に驚かされた。同時に、危険や破損の不安はないのか、リスクはないのか、気になった。５月３１日(水)の「孤立しがちな親を支援！」で取り上げた、子どもを預ける

“子育てシェア”は、まず親同士が知り合いにならないと子どもを預けられないという仕組みや、万が一の保険など安心・安全面の配慮もあり、分かりやすいものだった。地域とのつながりがない母親でも、子育てシェアを通してつながりが生まれ、また、増加するシニア層にも参加してもらえば、世代を超えたつながりも生まれ、地域再生の可能性が感じられた。初めて聞く取り組みだったが、効率的でもあり、社会の流れとして必然的に生まれたサービスに思えた。６月１日(木)の「地方自治体のユニーク活用法」では、町長室や議場、廃校などの施設だけでなく、今まで町民だけで行っていた祭りの山車の引き手なども、町外の人とシェアしようという試みを紹介していた。外国人が祭りに参加した例など、シェアによって地域外から人を呼び込む取り組みがよく取材されており、町の活性化や観光客誘致といった地方が直面する課題に役立つ大きなヒントを伝えていた。よいシリーズだった。

○　シェアがさまざまなところで取り入れられていることがよく分かった。アイデアや人の力までもシェアという形で扱う事例が紹介され、時代とともに価値観や社会が変わってきていることを実感した。特に“子育てシェア”には好感を持った。昔なら親や周囲を頼って解決できていた子育ての問題に、今は若い母親が独りで悩んでいるという話をよく聞く。その問題を、特に若い人になじみ深いスマートフォンを活用しながら、シェアという形で解決する仕組みができつつあるのはすばらしいと思った。６月２日（金）「公共交通を変えるか“ライドシェア”」で紹介された“ライドシェア”は、地方都市、特にタクシー会社が撤退した地域の新たな交通として可能性を感じた。規制や安全面などさまざまな問題があるが、人々のニーズに応えて社会が変化していく力強さを感じ、今後に期待が持てた。シェアリングという私たちの世代には無かった価値観がこれほどまでに広く浸透していることは、とても勉強になった。１つの番組としてまとめて放送してもよいと思う。

○　今回のシリーズで取り上げた事例すべてをシェアということばでまとめるのは少し無理があるように思った。５月２９日(月)の“シェアガール”で伝えられた、衣類やバッグをシェアするという発想は私たちの世代にはないもので、新たな価値観が広がっていることを伝えていたが、５月３０日(火)の「社外の能力・アイデアビジネスに生かせ！」で伝えられた、ビジネスでの取り組みにはあまり新しさは感じられなかった。以前からどのような産業でも異業種との交流によって、新しい発見やいろいろな学びを得ようとする動きはあったと思う。５月３１日(水)の“子育てシェア”は、今の社会を映し出していたと思う。地方には家族３世代や近所で子どもの面倒を見るつながりが今でも残っているが、都会に移住してきた人たちにはそういったつながりがない。その中で、新たなつながりを作るこのような取り組みを紹介したことはよかったと思う。遊休施設の有効利用はいろいろな地域で取り組

まれているが、６月１日(木)の放送で、町長室や議場まで貸し出す取り組みが紹介され、そういう考え方もあるのかと気付かされた。施設活用を模索する地域にとって１つのヒントになったと思う。６月２日(金)の“ライドシェア”では、規制、安全、保障の問題などが絡むと思うが、こうした取り組みが積極的に取り入れられるようになれば、特に交通が不便な地域において高齢者が社会参画しやすい環境になっていくような期待が持てた。さまざまな社会背景がある課題に対して、参考になる事例を紹介しており、よいシリーズだった。

○　少子高齢化、核家族化、単身世帯の増加が進む中で、どのようにつながりを再構築していくのか、そのヒントを伝えるシリーズだった。子育ての問題に限らず、地縁や血縁がない人たちが地域の中でつながりを作るうえで、シェアという考え方は重要な意味を持つと思った。ファッションや旅行先の宿泊、住まいまでシェアし、その中で他人と関わる経験が多い若者には、つながりを作るうえで重要なコミュニケーション能力の高さが感じられた。単身世帯が増え、また家を持っても子どもは家には戻って来ないような状況の中で、どうつながりを作ればよいかという問題に新たな視点を示したと思う。子育てについては、全国にサポートの制度もあるが、場合によっては使いにくい面もある。そうした部分を補完する形で、“子育てシェア”のような民間のコミュニティービジネスが行われていることに頼もしさを感じた。この事例を通じて、制度と民間の活動が重層的に社会の支えとなるヒントを伝えていたと思う。全体的にシェアは国外から入ってくるものという印象が強いが、支え合いのような日本らしいシェアも広がっていくことに期待したい。そうした観点でこれからも取材を継続してもらいたい。

○　６月１日(木)放送の「ひるまえほっと」でもファッションレンタルを取り上げていた。１つのことについて時間帯を変えて伝えられると、社会の変化をより強く印象づけられ、よい取り組みだと思った。シェアというとモノや家というイメージがあったが、５月３０日(火)の放送では、社外から全く視点の違うアイデアをシェアという形で取り入れようとする企業の取り組みが紹介されており、興味深かった。社会で対人関係を築くことが苦手な人にとっても、自分の能力を生かし、自信を持つことにもつながる可能性が感じられた。５月３１日(水)に紹介された“子育てシェア”は、一度会って信頼関係を築いた仲間に子どもを預けられる仕組みが、私自身の子育ての経験から見ても、とても心強いと思った。さらに高齢者が参加するようになれば、さまざまな世代がつながり、地域づくりのよい足がかりになると思った。６月１日(木)の放送では、廃校での写真撮影のために町を訪れたアニメのコスプレをした若者たちについて、地元の人たちは「最初は何を考えているのかと思ったが、若い人たちの声が聞こえてきて明るくなった」とうれしそうに語ってい

た。世代の異なる人たちの交流が生まれる可能性が感じられた。一方で、シェアが自分に便利なところだけ都合よく取り入れるような形にならなければよいとも思った。１つのものを大事に使うことも大切だと思う。リスクや安全面の問題も出てくると思う。そうした視点も持って今後も取材を続けてほしい。

○　モノを所有するというこれまでの価値観に縛られることなく、あるものをもっと生かし、人と人とをつなげることで地域や社会の課題解決をめざす好事例を伝えており、よいシリーズだった。今回は女性、ビジネス、子育て、行政といった分野での事例が紹介されたが、シェアという考え方はこれらに限らず、どんな課題にでも応用が利くと思う。全国にはもっと多くの事例があると思うので、今後も取り上げてほしい。ＮＨＫでは関東甲信越の各放送局が協力して制作するシリーズをたびたび放送しているが、それはどんなスパンで、テーマはどのようなプロセスを経て決めているのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

明確なスパンはないが、首都圏放送センターと横浜局、千葉局、さいたま局は定期的に会議を行い、テーマやアイデアを出し合っている。また関東甲信越の遊軍記者が集まる会議も行っている。大都市圏共通のテーマや課題など、１つのテーマをそれぞれの視点で取材することで、重層的かつ多面的に伝えることができると考えている。「首都圏ネットワーク」だけでなく、各局それぞれが独自に放送している夕方の地域情報番組に向けても、よりよい企画を放送していきたい。

○　番組ではシェアのよい部分だけが取り上げられ、あまり問題点には言及されていなかったように思う。家電製品をシェアで賄いひとつも所有していない若者がその生活に慣れてしまった場合、家庭を持ったときに生活は成り立つのか。他人の子どもを素人が預かる育児シェアは安全性に問題はないのか。町長室を貸し出すというが、重要書類がある場所に外部の人を入れてもよいのか。疑問に思ったことがいくつもあった。そうした問題点についてもっと掘り下げてもらいたかった。社会が急速に変化する中で、シェアリングサービスは市場規模を拡大しつつある。今回のシリーズは、その概況を伝えてくれたことで、シェアの現状や今の社会について考えさせられた。その意味では問題提起する内容だったと思う。

（ＮＨＫ側）

シェアリングサービスはスマートフォンの発展に伴い急速

に普及したビジネスで、急速に市場が拡大する中でリスクがつきまとい、さまざまなサービスの運営において、どのようなルールづくりをすべきか検討が進められている。今回のリポートの中でも、“子育てシェア”においては、事前に面会をして交流を深めており、町長室のシェアにおいては、職員がきちんと同行しているなどそれぞれの現場でのリスク管理についても紹介しているが、安全面、リスク管理の問題は今後の課題としても検討していきたい。

○　シェアの現状をよく映し出しており、見応えがあったが、シェアの問題点よりも、シェアを推進するような視点に立った編集や全体構成になっていたのではないか。特に“ライドシェア”の回については、アメリカで開発されたサービスなども紹介されていたが、昔から日本にある「乗り合い」についてもきちんと言及してもらいたかった。とはいえ、シェアは世界中で起きている話であり、今回のシリーズはその現状をわかりやすく伝えていたとは思う。

（ＮＨＫ側）

今回のシリーズは、シェアという新しい概念を紹介することがねらいだった。社会にシェアが広がる現状については、わかっていただけたと思う。今後は指摘いただいた点も含めて、シェアの課題や問題点などを掘り下げていくことも検討していきたい。

○　５月３０日(火)の放送では、アイデアをシェアするビジネスの動きなど、フリーランス的な仕事のあり方を紹介していた。これまで社会保障の番組を多く制作してきたＮＨＫが、こうした動きとその背景にあるシェアリングという考え方についてのシリーズを制作したことに、社会環境の急激な変化の中で正規・非正規の枠にとらわれない多様な働き方を提案する時期に来ているのかと感じた。重要な問題を提起したシリーズだったと思う。多角的な視点を持ち、引き続き取材をしてもらいたい。別番組を放送していた地域もあるが、関東全域で放送してほしい内容だった。

○　インターネットが私たちの生活に必要不可欠なものになっていることを背景に、コミュニティーとしてのつながりが、これまでの家族のような限定的な関係から、オープンなものに広がっていることを紹介したシリーズだった。そうしたつながりは新たなサービスによって生み出されてはいるが、つながりの意識は希薄で、バーチャルなものでしかないように思えた。それでも“ライドシェア”の回で、かつて

「ＩＴ難民」と言われた高齢者がタブレットを操作して車を手配する姿を見て、必要に迫られて現実が変わっていく様を見せつけられた思いがした。単なる新しいライフスタイルの紹介ではなく、これからのビジネスは「モノ」から「コト」に転換していく消費にどのように対応していくかが課題だということを突きつける内容だった。必要なときに必要なものを必要な形で使えるシェアは便利であり、必然なのかもしれないが、一方で、その裏にある人への配慮、モノに対する思いやりといった価値観が継承されるのか心配になった。そんな中で祭りの事例は、地域から人がいなくなる中、祭りに興味、関心、価値を感じる人たちが新たに担い手として参加できる取り組みで、新たな角度から解決の糸口が見えたという意味でよいリポートだったと思う。

（ＮＨＫ側）

今回はシェアという新しい概念を紹介することをまず目指した。ご指摘いただいた課題や問題点については、今後検討していきたい。午後６時台は主婦の方にも見ていただける時間帯であり、主婦を含めたより多くの方に、社会の今を映し、日本の将来を考える良質な企画を見ていただけるよう努めていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　九州北部豪雨の報道はとても冷静で、好感が持てた。現場の映像、地図、河川などさまざまな情報を伝えていたが、地元の人でないとどこなのか分からないような映像もあった。現地に伝える配慮やリアルタイムで伝える工夫などがあったと思うが、災害時にはＮＨＫを選んで見る方が多いので、そうした配慮や工夫について教えていただきたい。

（ＮＨＫ側）

九州北部豪雨から、地元にできるだけきめ細かい情報を出すために、小さな川なども紹介し、地名は郡や町だけでなく字まで伝えるようにした。地元の人たちにより身近に感じてもらい、防災、減災意識をしっかり持っていただきたいという思いも込めている。映像は、ＮＨＫ独自のものだけでなく、国土交通省や防衛省などの映像もできるだけ多く活用できるようにしており、災害の実態や危険が迫っている様子をより

早く伝える姿勢で取り組んでいる。また、ＮＨＫでは「スクープＢＯＸ」というホームページを開設し、視聴者からも映像を提供していただいている。その他、動画投稿サイトに投稿された映像も正確な映像であることが確認できた場合には投稿者の了解も得たうえで放送に使うなど、さまざまな方法できめ細かい情報をより早く伝えていくよう努めている。

○　災害報道は時間との勝負だ。今後もどのような災害が起こるか分からないので、きめ細かい情報をより早く伝える態勢を構築することはとても重要だ。引き続きよろしくお願いしたい。

○　九州北部豪雨のほかにも新潟、福島で線状降水帯による災害があったが、ＮＨＫの報道は正確で安心感がある。災害時にはニュース番組、報道番組などを通じて、命を守る報道をしていただくことに公共放送の役目があると思うので、引き続きよろしくお願いしたい。

○　６月２５日(日)のＮＨＫスペシャル「人工知能　天使か悪魔か　２０１７」を見た。将棋の佐藤天彦名人と人工知能が戦う電王戦を読み解いていく中で、人工知能が答えを導き出すプロセスはブラックボックスの中にあり、なぜその答えが導き出されたのかは分からない、ということがよく分かった。人工知能の驚異的な能力に注目するだけではなく、そこに潜むさまざまな可能性、注意すべきポイントなどにも言及していれば、さらに示唆に富む番組になったと思う。

○　７月８日(土)のＮＨＫスペシャル「徹底解剖　藤井聡太～“進化”する１４歳～」では、人工知能を使った将棋ソフトに取り組んだことで弱点を克服したという話を見て、勉強のしかた次第で、若い人は飛躍的に成長するということが実感できた。スポーツでも 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、１０代の力が芽生えてきている。若い人の能力が飛躍的に伸びる姿を番組で紹介することで、年配の人も将来の日本に期待感を持てるようになると思う。今後もこのような番組を放送してほしい。

○　７月１６日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　ディープ・オーシャン「南極深海に巨大生物を見た」は非常によかった。深海は宇宙と同じくらい未知で神秘的な世界だと思うが、あまり紹介されることがない。撮影した取材班の苦労は大変なものだったと思うが、こうした挑戦は必要だと思う。この番組を見た若者が触発されて海洋学者を目指してほしい。そう思わせるほどの刺激に満ちた内容だった。

○　６月２３日(金)のノーナレ「ミアタリ」(総合 後 10:50～11:15)を見た。手配犯の写真を何回もくまなく見て記憶し、雑踏の中で同じ「顔」を見つけだす。そんな人間の感覚を武器にした捜査手法が今の時代にあることに驚かされた。この手法でこれまでに 4,000 人以上を検挙しているという。自らの記憶と目を頼りに結果を出している人たちに敬意を感じるとともに、そういう人の存在を伝えてくれたこの番組をありがたく感じた。

○　７月１０日(月)のクローズアップ現代＋「密着！下請けＧメン　中小企業いじめの深層」を見た。私も含めてスーパーなどでつい安いものを買ってしまいがちだが、その裏でさまざまな人たちが大変な状況に追い込まれていることがコンパクトにわかりやすく伝えられていた。格安競争の裏で起こっている実態について改めて考えさせられた。今後も現代が抱える課題を取り上げてほしい。

○　７月１４日(金)のぐんまスペシャル「尾瀬～私たちに何ができるのか～」は、入山者数の減少や、鹿の食害など深刻な問題を伝えており、考えさせられた。

○　先月の視聴番組の題材を全国放送で取り上げた、７月１６日(日)の目撃！にっぽん「心ひとつに　“鼓童”に挑む若き太鼓打ち」を見たが、今回は鼓童がどんな活動をしている集団なのかが丁寧に説明されており、地元以外の人にも分かりやすかったと思う。自分を変えたいという若者が成長する姿もきちんと伝えられており、とても見やすくなっていた。

○　７月１７日(月)の海洋アドベンチャー　タラ号の大冒険２「太平洋横断　サンゴの危機を救え！」(総合 後 10:00～11:13)は、地球温暖化の海への影響を調査してきた帆船タラ号の日本での調査を、北野武さんと西島秀俊さんのユニークな解説を交えながら伝えており、見応えがあった。沖縄のサンゴの白化などを伝え、海の深刻な状況と未来について考えさせられる内容で、海の日の良質な企画だったと思う。

○　「ブラタモリ」では先日から埼玉県が次々に登場しており、地元の人はとても喜んでいる。８月１９日(土)は長瀞が予定されているそうだが、どんな番組になるのか今から期待している。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」は、オープニングにも、ドラマ本編にも、高度経済成長期のさまざまな出来事を思い出させるような情景があり、自分の記憶を重ねながら見ている。内容も、誰かのために動くことがわざとらしく見えないストーリー

や、ちょっとした日常のやりとりやせりふのひと言に善意がにじみ出ており、すばらしいドラマだと思う。一日の始まりに、人間も捨てたものじゃない、今日も前を向いて頑張ろうという気持ちにさせてくれる。原作などがないオリジナル作品なので次はどうなるのだろうとワクワクしながら見ている。

○　６月２３日(金)にスタートしたドラマ１０「ブランケット・キャッツ」を見ている。事故で妻を亡くし、飼っていた７匹のネコの新しい飼い主を探す主人公を軸にストーリーが展開するが、いじめなど現代の社会が抱える問題が盛り込まれていて引き付けられる。７匹のネコたちがどのような家庭に引き取られるのか、今後の展開も楽しみだ。

○　７月８日(土)に最終回が放送された土曜時代ドラマ「みをつくし料理帖」は、俳優の魅力をうまく引き出していた。毎回楽しい料理が出てきて、ドラマが終わった後には役の衣装のままで料理番組のように料理を解説するコーナーもあり、非常によかった。

○　７月９日(日)の「Ｔ４４Ｔ５４～パラアスリート　私の視点～」(ＢＳ１　後7:00～7:50)は、世界で活躍するパラアスリートの考えや思いをドラマ、ドキュメンタリーなどを通して伝える番組だったが、ドキュメンタリーと合間のドラマのバランスがよく、５０分間飽きることなく見ることができた。パラアスリートならではの苦悩や体験を気負うことなく自然に伝えており、私たちが抱きがちな「障害者には優しくしなければならない」という思い込みを根底から解きほぐすような番組だった。音楽や詩の要素も交えて散漫になりそうなところだが、それを一体感ある番組に構成した手腕も見事だった。このような番組が東京オリンピック・パラリンピックをさらに期待感あふれるものにすると思った。今後もこのようなすばらしい番組を放送し続けてほしい。

○　７月９日(日)のＢＳ１スペシャル「ラスト　ドライブ」(ＢＳ１　後10:00～11:49)では、死を前にした人の願いをかなえようという終活プロジェクトについて伝えられた。ヨーロッパのプロジェクトだが、日本も高齢化が進み、自分が最後に何を願うのかは切実な問題だと思う。自分にひきつけて考えさせられる内容で、大変見応えがあった。

○　６月２４日(土)のスープレミアム「日本人が最も愛した男・石原裕次郎」(ＢＳプレミアム 後7:30～10:29)を見た。当時の「ビッグショー」など、いろいろな映像盛り込んで構成していて、ビッグスターたちの共演などが堪能できた。

○　７月１１日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「沖縄返還～祖国復帰運命の１日～」、７月１８日(火)の同番組「オイルショック！　列島が翻弄された７１日」を見た。自分が生まれてから起きた出来事が振り返って語られる時代になったのかと思った。子どもだった当時は知りえなかったことを知ることができ、自分が経験してきたことでもこれまでとは違った見方をすることができた。親子が一緒に見て話ができるよいきっかけにもなると思うので、今後もこのような番組を期待している。

○　６月２８日(木)のＦＭほっとアワー「読める！聞こえる？上野三碑～１３００年前からのメッセージ～」は、ユネスコの「世界の記憶」に登録が期待されている上野三碑について放送していた。全国に発信してもらいたい内容だった。

○　「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の「まちかど情報室」は商品になったものばかりが紹介されているように感じる。他にも一般の人が工夫を凝らしたり、努力しているものがたくさんあるのでないか。紹介するものはどのようなねらいで選ばれているのか教えてもらいたい。また、１日に何度も見ることがあるが、再放送のサイクルについても教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

「まちかど情報室」では、商品に限らず、さまざまな知恵や工夫が凝らされたものを紹介している。商品を取り上げることも多いが、その際は多角的に検討したうえで放送している。

「まちかど情報室」は前日の内容を、時間帯を変えて再放送している。

○　私はインターネットでの放送の同時配信は今すぐにでもしてもらいたいし、アーカイブスも有料で構わないので配信してほしいと考えている。さまざまな議論がなされているようだが、ラジオのインターネット配信も含めて現状を教えてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫのテレビ国内放送のインターネットによる常時同時配信は、現在の放送法ではできない。常時でなければ、災害

報道をはじめオリンピックなどでは同時配信を実施している。常時同時配信の実施に向けては、総務省の検討会にＮＨＫの要望を伝えており、検討されているところだ。アーカイブスについては、有償のＮＨＫオンデマンドのほか、「戦争証言アーカイブス」などは無償で公開している。また、埼玉県川口市のＮＨＫアーカイブスや全国の各放送局にある端末では、およそ１万本の映像を見ることができる。ラジオのインターネットでの配信については、ＮＨＫは「らじる★らじる」というサービスで札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、松山、福岡の放送を常時同時配信している。

○　ニュース番組を副音声の英語で聞いているが、英語の発音や話し方など、人によってスキルにいささか差が感じられる。翻訳についても同様に感じる。緊急ニュースの場合など、難しいことがあるとは思うが、話し手はどのように選んでいるのか。

（ＮＨＫ側）

副音声はＮＨＫのアナウンサーでなく、同時通訳の方が話している。日本語の原稿を見て、即座に通訳するには相当なスキルや集中力が必要なため、高いレベルで同時通訳できることを優先している。話す訓練もしているが、アナウンサーと同等のスキルを求めるのは正直なところ難しいのが現状だ。ご指摘については真摯（しんし）に受け止めたい。

○　茨城県の県北、県央、県西北部の人は水戸放送局の電波を受信しているが、県南、県西南部、鹿行地区の人は東京からの電波を受信し、首都圏の放送を見ている場合が多い。この状況は平時なら問題ないが、有事や地方選挙においては、県民に平等な情報が伝わらないおそれがある。民放のテレビ局の無い茨城県では、ＮＨＫへの期待は大きい。８月には茨城県知事選挙も控えている。今回は１８歳以上が投票権を持ち、夏休み期間中でもあり、選挙の重要性を伝えるのに適したタイミングだと思う。首都圏向け放送の中でも茨城県知事選挙の情報を発信し、選挙への関心を高めてもらえないか。

（ＮＨＫ側）　茨城県の視聴者の受信状況については承知している。茨城県知事選挙については「首都圏ネットワーク」でもきちんと伝えるし、政見放送もきちんと届く形で放送する。また、災

害報道についても必要な情報が届くように放送していく。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年６月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１６日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、新潟放送局の最近の取り組みと今後の予定について報告した。その後、金よう夜きらっと新潟「心ひとつに～若き太鼓打ちの挑戦～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　員	岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	奥山 千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
	斉藤　とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
	野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
	原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
	古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役

（主な発言）

＜金よう夜きらっと新潟「心ひとつに～若き太鼓打ちの挑戦～」
（総合　６月２日(金)放送）について＞

○　すばらしい番組で感動した。「鼓童」に研修所が存在し、研修生が合宿をしていることに驚いた。集まった９人の若者たちは子どものころから太鼓をたたいており、プロになりたい若者が全国に多くいることに感動した。若者たちのがんばる姿を全国の方にもっと見てもらいたい。同時に彼らがその後どうなるのかが気になった。２年目以降、脱落する人も出て、「鼓童」のメンバーになれる人はごくわずかだという。「鼓童」の迫力ある太鼓の背景に、厳しい練習を経てメンバーが選抜されているという実態があることがよく分かった。今後も継続して取材すれば、「鼓童」

の迫力のある演奏がどうやって生まれているのかが分かる番組が作れるのではないかと思う。文化的な島である佐渡の伝統芸能や、たとえば宿根木の町並みなど、もっと佐渡らしさが出るとよかった。

○　大きく三つの楽しみを感じることができた。一つ目は世界でも活躍する「鼓童」のグループ内の理念のようなものがかいま見られたこと。二つ目は佐渡の芸事、信仰心の厚さ、伝統文化、風習をかいま見られたこと。三つ目は現代の若者の心情がかいま見られたことだ。２８分の番組としてはうまくまとめられており、本質を見極める取材力の高さが見られた。ぜひ取材を続け、１年生の成長、苦悩などをさらに見せてほしい。まさに全国でも放送してもらい番組だと思った。

○　「鼓童」のメンバーになるために研修所に入った９人の内の２人にスポットを当て、研修で精神と技術を鍛える様子と、その葛藤、挫折、交流など、彼らの成長を軸に番組が進められていた。パソコンも携帯電話も使用禁止、早朝の５キロランニング、利き手を使わない食事などの苦労や不自由さなどは、ある意味で若い人にとってとてもよい経験だと思う。覚悟はしていても研修所での共同生活に戸惑う若者たちがとてもかわいらしかった。「好きなことを仕事にできるのは幸せなこと」ということばとは裏腹の大変な毎日に、がんばれと応援したくなった。自作のバチ、仲間と心をひとつにして打つためのアイコンタクトなどは、なるほどと思った。春祭りの料理のリーダーとなった若者の相談相手が母親であるのは、今風だと感じた。彼は１人で抱え込んで悩む傾向があったが、共同生活を通して成長する姿は、自分の人生をどう生きていくか悩んでいる多くの青年たちに参考になるのでないかと思う。残念だったのは、映像から「鼓童」の演奏のダイナミックさ、すばらしさを受け取ることができなかったことだ。映像の限界を感じた。

○　「鼓童」が生み出す荒々しく純朴な音の響きはどのように生み出されるのか、興味が湧いた。研修所での最初の場面では全国各地から集まった９人の若者を歓迎する太鼓、鐘の演奏があり、太鼓芸能集団「鼓童」の原点がどれほど明かされるのか、期待が大きくなった。「１年生が目指すのは太鼓芸能集団“鼓童”のメンバーになること」と紹介され、翌朝からの体育会的なトレーニングのほかに、練習を通して仲間と心を一つにするコミュニケーションの大切さを指導していた。そこまでは期待どおりのよい番組だったが、後半、春祭りで１年生が地元の人たちに料理を振る舞うという話題で、リーダーの苦悩に１０分近くも使ったのは長すぎる気がした。番組のテーマである地元の人とのつながりや、チームワークづくりが大事であることは分かるが、結果としてエンディングが単純すぎてしまい、尻切れとんぼのように感じられたのは残念だった。ぜひ続編が見たい。

○　全国から集まった９人の若者が先輩たちと一緒に共同生活するだけでも、今の若者には大変なハードルだったのではないか。最初に感動したのは１日がかりで自分のバチを手作りすることだ。当然あるはずのものをあえて自分の手で作ることによって、バチ一つにも意味が出てくるのかと思った。このほか利き手でない手での食事や、心を合わせなければ音が出ないというコミュニケーションの訓練など、彼らの体験一つ一つが、番組を見た若い人にとって自分の生活につながる発見があるものだったように思う。春祭りの料理のリーダーの話では、周囲に声をかけられずに自分で責任を背負ってしまう経験を通して、自分だけが空回りしてしまうことを実感した様子を映し出していた。彼に対する先輩の声のかけ方も、どこで声をかけたら一番伸びるのか、それぞれの立場から見守っている感じがした。段取りがなかなかうまくいかず、どう動いたらよいのかてんてこ舞いになるという状況はひと事ではなく、そういう失敗を繰り返して成長していくという基本的なことを、改めて感じさせてくれた。１人でも多くの人に見てもらいたい番組だった。彼らが２年後にどのように成長しているのか、見たいと思った。あまり紹介されなかったが、韓国の若者がどのような思いで研修所に来たのかももっと知りたかった。

○　「鼓童」の活動の背景に若い人たちの研修所があることを初めて知った。何期にもわたり研修所で選抜された層の厚さがあってこその「鼓童」なのかと思った。集まってきた９人がどうやって選ばれたのか、説明がなかったのでそこが気になった。廃校をうまく活用して研修所にし、便利な環境ではないが、地域に根ざし、地域に大切にされていた場所で活動していることに心が奪われた。佐渡は芸能の島ということだが、そこに若者たちが家族との関係を一度断ち切って全国から集まり、生活を共にし、その文化を学び、太鼓をブラッシュアップする姿に覚悟を感じた。彼らが特別な子でなく、身近にいる現代っ子たちと同じような子どもであることに安心もした。いろいろな方とのつながりの中で育つのことが難しい現代、ここでは誰かが答えを出してくれるのではなく、自分たちが協力してチームワークなりを育てなければいけない。そうした中で成長する姿、太鼓のパフォーマンスを通じて深まっていくつながりを、今後も見たいと思った。全国にも発信できる、とてもよい番組だったと思う。

○　２８分という短時間でこれほど充実した番組にしたのはすばらしいと思う。特に研修生活でのランニング、利き手でない手で箸を使う、バチを自分で作るなど、密着取材により研修所の様子がよく分かった。コミュニケーションからリズムが生まれてくるということも、よく伝えられていたと思う。短時間で、かつ若者のことを描いているので難しいとは思うが、世界各国で何千回と演奏している「鼓童」の活

動状況などももっと入れてもらいたかった。また佐渡を拠点にしている背景、根拠がよく分からなかった。佐渡は芸能の島と紹介していたが、佐渡には古くから能舞台などもある。もう少しそうした佐渡の状況を描いてもよかったのではないか。

○　番組を見終わっての第一印象は、２８分が長く感じられたということだった。新潟県向けの番組だったかもしれないが、佐渡のいろいろな地名が出てきても、その位置関係や距離感が分からなかった。今後他県向けに放送することがあるならば、地図などで分かるようにしてほしい。また９人の新入生については、出身地、年齢、どんな思いで入ってきたかなども伝えてもらえれば、一人一人の背景が分かってよりよかったのではないか。研修内容についても、３か月後にはここまで上達し、１年後にはこうなるという想定があるのであれば、伝えてもらうとより分かりやすかったかと思う。祭りで地元の人たちを招待し、地元と密着したコミュニケーションを取る取り組みはすばらしいと思うが、番組後半の春祭りの料理を作るくだりで番組の焦点がぼやけてしまったと思う。リーダーの悩みも、今の若者であれば「鼓童」に限らずあるだろうし、別の番組を見ているようで、少し冗長な感じがした。現代っ子の新入生が「鼓童」の団員になるために不自由をしても我慢し、厳しい訓練を通じ、１年後には２年生がやったような演奏ができるまで成長する、という流れのほうが、より分かりやすかったのではないか。あの部分をもう少しうまく表現するととてもよい番組になったと思う。

○　佐渡を芸能の島と伝えていたが、ほかにどういう芸能があるのかが全く分からなかった。地元の方が見る前提であればよいのかもしれないが、佐渡が持つ歴史的な背景の紹介があれば、より分かりやすくなったと思う。「鼓童」自体をあえて紹介しなかったのは、「鼓童」という太鼓の集団が地域社会にどういう貢献をしようとしているのかを中心に映し出そうとしたからだと思った。地域社会の中で活動するにあたっては、地域のためになることをきちんとしないと周りから支援もされないし、活動を継続することも難しいというメッセージを伝えたかったのだろう。また太鼓とは直接関係のない事柄も含め、さまざまな場面で思い悩む若者の姿を通して、チームで解決するためには信頼とコミュニケーションが必要であることを伝えていた。かつて学校で体験したことが今の学校教育ではなくなってきており、それを体験する場を与えているようにも見えた。「鼓童」のメンバーは基本的には研修所の卒業生だけということだが、若い世代をどう育成するのか、会社の新人研修としても参考になるような、見応えのある番組だった。

（ＮＨＫ側）

「芸能の島」についての説明など、県域放送の番組のため

県外の人にとっては情報が不足していた部分もあったと思う。太鼓か、若者の成長か、どちらを主題にするのかは番組を制作するうえで悩んだ部分だった。太鼓に焦点を当てるならば、「鼓童」をもっと紹介したほうがよかったが、今回は研修を始めて１か月の段階だったため、技の成長ではなく、人の考え、成長のほうが普遍的なテーマになると思い、あえてそちらに焦点を当てた。「鼓童」の技の迫力や生で見たときの感動は、テレビのスピーカーを通すと伝わらない部分があり、技と今回のテーマをリンクさせるのは難しかった。全国の方に番組を見ていただく機会があれば、もう少し工夫したい。「鼓童」の研修所や選抜の仕組みについては、今回は研修を始めたばかりの段階だったため詳しくは触れなかった。メンバーに選抜されるのは非常に厳しい狭き門なのだが、その厳しさの中で仲間と協力もしないといけない難しさをもう少し深く描ければ、また違う番組になったのではと思う。そこまで継続取材して番組を作れば、そうした部分もきちんと描けると思った。

○　新潟県佐渡を拠点に世界で活躍している太鼓芸能集団「鼓童」の若き研修生の成長がとらえられていた。１８歳の女性は、３歳のころから地元の太鼓チームで太鼓を習い、将来はプロの演奏家になるのが夢であり、人生をかけたいと研修所に入ったという。生き生きと練習し、地域活動に参加している表情をとらえていた。また弱い自分を変えたいと研修所に入所した男性は、春祭りで住民に食事を振る舞うリーダーになった。仲間との話し合い、連携がうまくできなかったが、先輩のアドバイスにより、話し合うこと、仲間を信頼することの大切さを学び、逃げない自分に変わろうとする姿勢が伝わった。太鼓の演奏は全員で気を合わせることで、壮大な音を奏でる。太鼓のリレーでは次の人にアイコンタクトで音をつなぎ、１人でなく、仲間と心ひとつにすることの大切さを学んでいた。番組では、仲間との共同生活で成長する若者の姿を映し出していた。研修生として参加した新人の活動、地域とのつながりを大切にした番組構成になっており、地方のよさが出ていた。ただ、「鼓童」の活動内容の紹介が少なく、どのような集団なのか分かりにくかった。また、多くの研修生が卒業後にどんな活動をしているのかが気になった。そのような取材があれば番組に厚みが出たと思う。

＜放送番組一般について＞

○　６月３日(土)のＮＨＫスペシャル「祇園　女たちの物語～お茶屋・８代目女将(おかみ)～」を見た。そのお茶屋は祇園きってのお茶屋であり、一見(いちげん)さんお断りで、どんなにお金を積んでも入ることのできない場所だと聞いている。そのお茶屋の創業200年をきっかけにした番組だが、通常入ることのできない場所、会うことのできない人の映像は見応えがあった。舞妓、芸妓の身のこなしの美しさ、流れるような京都弁の親しみやすさ、高級料亭の料理人による料理の品々にはひとときも飽きることなく、見入ってしまった。特に驚いたのが、「代々女将を継ぐものは結婚してはならない。跡継ぎとなる女の子を未婚のまま生むか、養女をもらわないといけない」という世間の物差しとは異なる家訓を守ってきたことだ。そういう別世界だからこそ200年もの間、絶えることなく守られてきたのだと思った。最初に見たときは若女将の着物の着方などに「これではこのお茶屋はもたないのでないか」と心配になり、次世代への継承に悩む女将の葛藤に共感したのだが、もう一度番組をよく見ると、その仕草や立ち居振る舞いの中に先代、先々代から受け継いだものが見てとれ、安心した。ふだん見ることができない世界を見せてもらい、ありがたく感じた。

○　６月１０日(土)と１１日(日)のＮＨＫスペシャル　ニッポンの家族が非常事態！？　第１集「わが子がキレる本当のワケ」と第２集「妻が夫にキレる本当のワケ」を見た。最新の脳科学やホルモンの影響など、科学的な知見を基に伝えていた。今の核家族化の状況下での子育ては、共同養育を前提として発達してきた人類の子育てと反しているという示唆は、共感を生みやすいだろうと思った。思春期の子どもたちの脳の発達の話では、大人の脳になるには２５歳まで時間がかかり、感情が先に来るからこそ若者は爆発的な力を持つことができるということ、それを抑えることとの差からエネルギーが発出されるということが紹介された。人としての戦略的な進化といった話に共感でき、興味深かった。ただ、番組で紹介したさまざまな知見について、より詳しい内容や科学的な位置づけなどをもう少し伝えてほしかった。子育ての大変さを科学的見地から整理することで、母親も、父親も、冷静に向き合えるようになる部分があると思った。もう少し重層的な知見が追加され、こうした知見がもっと広がることを期待したい。

○　５月１９日(金)の茨城スペシャル「ＮＯＲＡＧＩ　ＣＯＮＴＥＳＴ」を見た。農作業時に着ているものをもっとポップに明るく提案できないか、茨城県の農家と高校生が組み、ファッションショーのように見せるという企画だが、県民同士の交流を創るという点で高く評価したい。やや大ざっぱな作りだったが、地方局らしい温

かみも感じられた。連続テレビ小説「ひよっこ」のスピンオフという観点が強いように感じ、なぜ野良着なのかとも若干思ったが、参加者などからの温かいコメントもあり、こうした地域を元気にするような番組の重要性を再認識させられた。

○　５月２１日(日)の「大相撲夏場所　八日目」を見た。相撲は最近とても盛り上がっている。「カラーでよみがえる名勝負～双葉山と名力士たち～」のコーナーでは、双葉山、羽黒山などの取り組みをカラー映像で見ることができた。今回初めて見た映像もあったが、カラーで見るといろいろなことがとてもよく分かり、やはり違うと感じた。昭和１６年の映像で、テレビもない時代、つり屋根になっているところに４本柱があり、それぞれに布が巻いてあり、時代を感じた。お客さんの服装などもカラーだと説得力があり、訴えるものが全く違う。ＮＨＫは過去の映像をたくさん持っているので、モノクロのよいところは残しながらも、一方では持っている技術でカラー化してほしい。ＮＨＫスペシャル「カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の１００年～」を見たときにも話をしたが、画期的な技術だと思う。いろいろな映像資料をカラーにして見せて、歴史的価値を高めてもらいたい。

○　５月２８日(日)のこれでわかった！世界のいま「テロ震源地はアフリカ　犠牲になる子どもたち」を見た。５月に起きたロンドンのテロ事件で多くの死傷者が出たことに続いて、アフリカ各地で多くの異なるイスラム過激派集団が暗躍していることを、地図を使って分かりやすく説明していた。ただ出演者の１人の服装が気になった。テロの惨状を伝える内容だが、血を連想させる真っ赤な肩を出した服装だった。もう１人のゲストの服装は真っ白で、犠牲者を悼むように見えたため、対照的で余計に際立っていた。服装については、出演者にその日の話題を前もって伝えているのだろうか。

（ＮＨＫ側）

出演者には、その日のテーマと内容を説明したうえでコメントしていただいている。衣装については目が行き届いていなかったので、頂いた指摘を今後の参考にさせていただきたい。

○　「クローズアップ現代＋」はコンパクトな時間でテーマについて整理・解説をし、理解を深めてくれるので興味深く見ている。５月３１日(水)の「人類のピンチ！？天体衝突を回避せよ」も楽しく見た。地球防衛会議なるものが実際に行われており、そこには世界各国を代表する研究者が集まっている。ケーススタディーから想定される問いに対して答えを導き出す議論の過程を見ることができ、大変興味深かった。

天体衝突のリスクがあれほど高いことを知らなかったし、それを回避する方法も、最先端の技術者たちが示していた。その方法を実施することによってもたらされるリスクについても真剣に議論が交わされている様子を見て、専門職は必要だと思った。われわれの知らないところで専門職がしっかりと議論し、技術開発が行われていることを知らせる意味でもよい番組だったと思う。国、宗教、文化を超え、一つのテーマに真剣に取り組んでいるチームがあることを知った。またそれぞれの国の特性に応じた役割がしっかりと確認されるプロセスも示されており、大変おもしろかった。日本はアマチュアの天文家を研究に巻き込もうとしているということだ。日本は人口減少などのさまざまな社会環境の変化の中で、国や行政が十分に果たしきれない機能を、民間がしっかりとサポートしなければいけない社会に変わりつつあることも伝えられていた。本来学校で教えることが教えられなくなってきており、それを補完する機能が自然と生まれているという変化にも目を向けることができ、よい番組だと思った。

○　「クローズアップ現代＋」は、今起きている大きな問題をかなり具体的に取り扱い、漠然としていて分からない問題に対し、かなり突っ込んで放送しているので感心している。中でも６月６日(火)に放送した、「原発事故から６年　未知の放射性粒子に迫る」に注目した。東京電力福島第一原子力発電所から放出された不溶性放射性粒子の存在が最近になって分かったことに驚いた。研究者が注目する理由は、それが水に溶けず、長い間残留し、吸い込んで肺の中に入るとどうなるか分からないからだ。普通のセシウムは水に溶け、３０年ぐらいで薄められるらしいが、不溶性放射性粒子はそうではない。除染は基本的に屋外だけで、屋内にもそうした放射性粒子が残っている場合があるということだ。関東地方にも飛んできているそうだが、不溶性放射性粒子がどの程度存在するのか、健康にどのような影響を与えるのか関心を持った。現時点で分かっていない情報を伝えることもテレビの大事な役割だと思う。はっきりと結論は出ていないが、こういう状態にある、という情報を伝えてくれることに注目している。水溶性と不溶性の放射性物質では、肺の被ばく量が大人で７０倍、影響を受けやすい子どもは 180 倍になるそうだ。福島に帰還している人たちにこれからどのような健康被害があるのか、ないのかは分からないが、ＮＨＫには追いかけ続けてほしい。

○　６月４日(日)の目撃！にっぽん「老いた愛馬と見る夢は」を見た。東京パラリンピックの強化選手が１５人から６人に絞られる中、愛馬とともにトレーニングする方の番組だった。昔から馬術をしていたのではなく、事故に遭い、脚を失ってから始めた方で、お金のかかるスポーツであるため自らスポンサー集めをしていた。東京オリンピック・パラリンピックに向けたアスリートの動きを、この２、３年の準

備期間の中で、物語として見ることができるのはとてもよいと思った。

○　５月２６日(金)と６月２日(金)の奇跡のレッスン「アート編　違いはみんなのために」と「失敗を忘れて“いい記憶”を残そう　ゴルフ」（前編）はすごく心に残った。「アート編　違いはみんなのために」は、イタリアのシルバーナ・スペラーティさんが子どもたちの想像力を育てるために絵を描かせるという内容だった。単に絵を描かせるだけでなく、ものを見る、既存の概念を捨てることの大切さを教えるために、いろいろな点と線を自由に描かせたり、子どもたちが一列に並んで、１枚の長い紙に全員が草の絵を描き、途中で描く場所を替えて他の子が描いた絵に描き足しながら大きな一つの絵を完成させたりしていた。そうした過程でいろいろな想像力が子どもたちの中で膨らんでいく様子を、１週間だけのレッスンを通じて、うまく伝えていたと思う。「失敗を忘れて“いい記憶”を残そう　ゴルフ」は、いかに失敗を忘れ、よい記憶を残すか、というテーマだった。子どもたちに失敗でなく、何ができたかを常にノートに書かせており、よいイメージを膨らませることがどれだけ人間の力になるのかを感じさせる、よい番組だった。

○　６月３日(土)のＥＴＶ特集「沖縄を叫ぶ～彫刻家・金城実～」を見た。名前は知っていたが、すごい人だと思った。彫刻家の生きざまを通じ、沖縄の人がいかに戦争で犠牲になったか、その悲惨さを教えられた。今でも沖縄は大きな問題に直面している。金城さんを通して、単なる政治的な話でなく、沖縄に生きた人間としての基地反対運動の叫びがよく伝わった。「日曜美術館」などでも取り上げてほしい。

○　６月１０日(土)のＥＴＶ特集「“原爆スラム”と呼ばれた街で」を見た。担当ディレクターはとても強い思いを持って広島に関わっていると感じた。原爆の被害に遭った人たちが河川敷にバラックを建ててできた街“相生通り”に住んでいた方たちが今どうしているのかを訪ね取材していた。とてもつらく苦しい中で生活をしていたと思われたが、実際には「嫌ではなかった」「活気があった」と発言していた。一つの情景だけで何がよい、悪いということを決めることはできず、人間の強さや生きていく中で何が一番大事なのかということについて改めて考えさせられた。

○　６月５日(月)のグレーテルのかまど「吉田松陰の大福もち」を見た。まず吉田松陰がどのような人物かを紹介し、ストイックな生活をしていたが、大福もちを食べるのだけは我慢できなかったことを紹介していた。かまどに人格を持たせ、かまどがホスト兼パティシエであるヘンゼルに大福もちの作り方を教える、という設定だったが、２人のやりとりが実に巧妙で大変好感を持った。大福もちの由来やレシピを伝え、松下村塾についても紹介し、料理番組と歴史番組のすばらしいコラボ

レーションで、新しい番組だと思う。ヘンゼル役の一人芝居もおもしろく、画面には登場しないヘンゼルの姉・グレーテルの設定もよかった。萩博物館の学芸員の解説も好感が持てた。メルヘンチックなエンディングの絵も番組に合っていると思う。ただ最後のスタッフ表示のスーパーの流れが速すぎて、ヘンゼル役、かまど役を誰が演じているか分からず、残念だった。

○　６月１３日(火)のハートネットＴＶ「働く聴覚障害者限定！静かで熱い座談会」を見た。聴覚障害のあるＮＨＫディレクターや、いろいろな職業の方たちが集まって繰り広げた本音トークは、すごく刺激になった。接客業の方は「耳が聞こえなくてもいろいろな方法でコミュニケーションが可能だ」というようなことを言っていた。最初から無理だと決めつけるのではなく、やりたいという思いがあり、周囲に一緒に考えてくれる人がいれば、多くのハードルをクリアできると感じた。とてもよい企画だと思う。

６月１４日(水)、１５日(木)のハートネットＴＶ「震災を詠む２０１７」（前・後編）を見た。東日本大震災から６年、実際に被災された方たちから 300 通以上の応募があったと紹介していた。短歌は自分を客観的に見ないと詠めないと思う。詠まれた過程を想像するといろいろなものが見えてきた。高校生の詠んだ句も多くあり、つらい思いだけでなく、未来への希望を感じさせる句もあった。被災された方の現実について、私たちはもっと知らなくてはいけないと感じさせられた。審査員も自分に引きつけたコメントをしていて、よかった。

○　「気象情報」について以前意見を述べたが、今月の初めごろに表示のしかたがブラッシュアップされた。雨雲の推移を表示するときに、デジタル表示で時間の数字を読まなければいけなかったのだが、大きな横長のバーで時間軸が表示されるようになり、バーの横軸の変化で時間の推移を表記するように変わった。以前は雲の動きを見ながら、デジタル表示の時間を読まなくてはならず、何時なのかがよく分からなくなってしまうことがあったが、今は視野の一角にバーが入るようになり、何時の天気図を指しているのかが感覚的に分かりやすくなった。ＮＨＫの気象情報はすばらしく分かりやすい。日本列島の表示のしかた、図表の細かいグラデーションや影のつけ方、配色の微妙な変化のさせ方など、伝えたい情報をより見やすく、分かりやすくすることに注力しており、とても上品で安心して見ることができる。

○　前回の番組審議会で５月４日(木)の「おげんさんといっしょ」（総合 後 10:50～11:50)は、ＳＮＳでの反響がとても多いと聞いた。帰ってからＮＨＫオンデマンドで見ようと思い、いろいろと検索をしたが見られなかった。ＳＮＳでの反響が大きいということはインターネットとの親和性が高いと思うので、もしＮＨＫオンデ

マンドで配信していればより多くの人が見ると思う。この番組は予告編のようなものしか見ることができず残念だった。ＮＨＫオンデマンドではこうした番組こそ配信したほうがよいし、できる限り多くの番組、できれば全番組を配信してほしい。番組審議会委員として、できるだけ番組を見ようとしているが、空き時間にスマートフォンで見られればすごく便利だ。またＮＨＫオンデマンドはコンテンツの並び方が分かりづらい。配置も工夫してもらえれば、より使いやすく、より見やすくなり、若年層にもっと広がると思う。

（ＮＨＫ側）

私たちもＳＮＳでの反響は気にしている。ＮＨＫオンデマンドは、著作権などさまざまな問題をクリアしなければならないが、より多くの人に見てもらうためにＮＨＫオンデマンドではできるだけ多くの番組を配信していきたい。

○　５月にＮＨＫ放送技術研究所で行われた「技研公開２０１７～２０２０年へ、その先へ、広がる放送技術～」を訪れた。立体テレビも含め、ＮＨＫがいろいろな角度から研究している分野を見て驚いた。2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けてのさらなる技術革新が楽しみになった。「一緒にテレビを見てくれるロボット」も研究開発されていた。独り暮らしの高齢者による利用を想定しているのかもしれないが、一抹の恐怖を覚えたのも正直な気持ちだ。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫ放送技術研究所では将来どのような視聴のしかたがあるのか、いろいろな技術を使いテレビを楽しめる方法を研究している。その一つとしてテレビ視聴ロボットを展示した。独り暮らしの高齢者による利用を意図するのみでなく、新たな視聴形態を生み出せないかと考えている。

○　ＮＨＫは先端技術をたくさん持っている。５月にＮＨＫ放送技術研究所の「技研公開２０１７～２０２０年へ、その先へ、広がる放送技術～」を見た。世界のトップとなる、すばらしい研究をたくさん紹介していた。８Ｋはもちろん、それ以外にも 360 度のカメラ、障害のある方にやさしい番組づくり、それを裏打ちする技術などが数多く紹介されていた。これから先も放送は進化すると思った。特にインターネットなどと融合し、次の新しい形のコンテンツを送り出す技術ができるのだろうと思った。めどがついたものは番組の中でも使っているのだろうが、どこかでまとめて紹介してもらえると、私たちの自信、夢にもつながると思う。そういうことも

考えて番組を制作してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

例えば、ユニバーサルサービスに関しては、生放送番組における、自動音声認識による高精度なリアルタイム字幕の付与や、手話ＣＧの自動生成のサービスなどは、なるべく早く実用化すべく進めている。

○　技術開発の情報を積極的に発信することで、ＮＨＫに対する信頼度はより増すのでないかと思う。

（ＮＨＫ側）

「技研公開」で紹介するような技術については、できるだけ広くお伝えするようにしている。いち早く実用化されればよいと思うものも多くある。夢として思い描いていることも含めて、機会あるごとに積極的に紹介していければと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年５月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１９日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、甲府放送局の最近の取り組みと今後の予定について報告した。続いて、平成２８年度関東甲信越地方向け放送番組の種別ごとの放送時間について説明があった。その後、「Ｎｅｗｓかいドキ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委員	岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
	大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	国崎　信江（(株)危機管理教育研究所代表）
	野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
	原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜「Ｎｅｗｓかいドキ」（総合　４月１４日(金)放送）について＞

○　「平成２９年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画」にのっとり、災害・減災をテーマに計画どおりの放送がされている印象を受けた。熊本出身の「韮崎ｍａｍａモンズ」による災害時の防災グッズの紹介などもあった。ポリエチレンの袋でお米を炊くという紹介部分は、具体的にどうするのかもっと見せてほしかった。山梨県は内陸で、大雪の被害、大雨による災害・洪水の発生なども予測される。視聴者からの質問に答える気象コーナー「かいてんき」では、１時間当たり３０ミリの雨量がどの程度なのかなど、視聴者に分かりやすくデータを使って説明しており、

防災面で役に立つと思った。「ぐるっとやまなしいってみ隊」のコーナーでは、「新倉山浅間公園桜まつり」を取り上げ、地元の特産のおみやげや、富士山と五重塔をバックにしたオリジナルよさこいなど、地元の活動の紹介もあり、よかったと思う。ただ、ＤＶＤで見たせいなのかもしれないが、映像がやや粗い気がした。きれいな景観をもう少し工夫して撮影したらよいと思った。「週末なび」では桃の開花状況を伝えていた。梅や桜は一般的だと思うが、山梨県らしさが出ておりよかった。全体的に地域の情報発信はうまくできていたと思う。

（ＮＨＫ側）

取材クルーはいろいろな種類のカメラを駆使して撮影している。映像のクオリティーをより高めていきたい。

○　地元に関する情報が多く盛り込まれており見応えがあった。一つ一つのコーナーも適当な長さで、テンポのよさも感じられた。スタジオのデザインも品のよさがあるというか、明るくてよいと思った。県内で活動されている方が多く出演しているという印象を持った。視聴者との距離が近く、親しみのある構成を意識していると感じた。気になった点が２点ある。防災グッズの紹介で、ポリ袋とタオルでおむつを代用と言っていたが、被災地でああいったおむつを使った人を見たことがない。実際に赤ちゃんが使ったならば排せつ直後からおしりのかぶれもあるし、上着もぬれ、洗えなければごみを余計に増やしてしまう懸念もある。「韮崎ｍａｍａモンズ」は結成されてから１年だそうだが、もう少し番組側でフォローする必要があると思った。また「ビニール炊飯の作り方」とあったが、ポリエチレン製の袋なので「ポリ袋」と表現すべきではないか。また耐熱の高密度ポリエチレン袋の見本に冷凍用と大きく書いてあったが、書いていないものを選べなかったのか。細かい配慮に関してどうしても違和感があり、そこに目が行ってしまった。山梨県内で防災に熱心に取り組んでいるママの団体を多く知っている。今後も引き続き防災に取り組んでいる方々の紹介をしてほしいと思う。

司会の男性キャスターが、エンディングで後ろに手を回した状態でおじぎをしたのが気になった。ＮＨＫではおじぎの方法に決まりはないのだろうか。一般的に手を後ろに回しおじぎをすることは相手に隠しごとをしているように見える、偉そうに見えるという理由からよしとはされない。とても気になった。

（ＮＨＫ側）

ポリエチレン製の袋なのでポリ袋、あるいはレジ袋などと表現するべきだった。今後はそういった表現をしないようにする。おじぎの仕方についても教育していく。

○　番組冒頭のテーマ曲、切り絵のような幻想的なオープニング映像、タイトルを平仮名と片仮名で「かいドキ」としたことがニュース番組としてはおしゃれ、かつ斬新であり、中高年だけでなく、若い年代層をターゲットにしていると思われ、大変よかったと思う。ただスタジオセットの小物は多すぎた。話をしているアナウンサーよりも、後ろの小物に目線がいってしまった。地域活性化雇用創造に関する推進協議会の会長のインタビューの場面では、会長の後方にいた人がせわしなく動いており、会長の話の内容がはっきりと頭に入ってこなかった。インタビューの場所もきちんと考えたほうがよかったのではないかという気がした。熊本地震から１年の関連で、県内のＢＣＰ（事業継続計画）の策定状況について、地図を用いて市町村ごとに色分けしており、分かりやすかった。県内の福祉避難所について報じた部分の映像では、県庁の外観を長く映しており、昨年 313 か所の福祉避難所を指定していると伝えているのになぜその取材映像がないのかと疑問を感じた。「山梨の“いま”を掘り下げ、ライブ感たっぷりに伝える」という番組のコンセプトだが、そのニュースにライブ感はなかった。「新倉山浅間公園桜まつり」の紹介は、桜まつりというならば桜の咲いているときに放送するべきだと思った。視聴者は桜が咲いていなければ意味がないと思っただろう。咲いていないのであれば、昨年の映像、写真などを使えばそのすばらしさは伝えられたのにと思った。開催期間が４月２３日まで延長になったと紹介していたので、その後も取り上げ、桜が咲いている様子も伝えられればよいと思う。「週末なび」で桃の開花状況を伝えたのはさすが山梨だと思った。

（ＮＨＫ側）

新倉山浅間公園で桜が見ごろになったというニュースは、その後放送した。花は満開のときに紹介すると、いざ自分が行きたいときには見ごろが終わっていることもあるので、今回は事前に紹介した。指摘のように、昨年の映像など幅広く活用すればなおよかったと思う。

○　全体的によかったのでないか。５０分番組なので情報提供もかなりできるし、テーマによっては企画のシリーズ化、特集を組むなど、工夫できるのではないかと思った。よりライブ感たっぷりに、よりタイムリーにというコンセプトを掲げているが、それにほぼかなっていたのではないかと思う。特によかったのは熊本地震から１年ということで、山梨のＢＣＰの策定に関する課題を伝え、意見を出していたことだ。天気に関する視聴者の質問に答える企画もユニークだと思った。１時間雨量３０ミリの激しい雨、などについて具体的に伝えておりよく分かった。「ぐるっ

とやまなしいってみ隊」、「週末なび」もおもしろかった。南部町の「たけのこ祭り」は、珍しいと思った。明日の動きの紹介は、かなり具体的に伝えていたのがよかった。「ＮＨＫギャラリー賞」では、小学生の絵を紹介していた。山梨県は著名な美術館、文学館、博物館が多くある。小学生の絵の紹介だけでなく、もう５分ぐらい使い、美術館などの文化情報をもっと積極的に放送してほしいと思う。県内の人も意外と知らないので紹介するとよい。

（ＮＨＫ側）

５月１１日(木)の放送では山梨県立美術館のバロック展を訪れ、楽しみ方などを伝えた。「ＮＨＫギャラリー賞」は平日毎日放送している。今年は第３９回で、幼児の部から中学校の部まで 2,000 点ほどの応募があり、250 点ほどが入選するが、年間を通して入選作品を毎日紹介している。

○　しっかりとしたセットで、カメラもいろいろな角度から追いかけ、広がりのある番組だと感じた。幅広い形でいろいろと地域の話題を取り上げており、地方の番組として力を入れてやっていると感じた。一方で、関東甲信越のうち、甲信越が午後６時１０分から切り離され独自に放送を出していることについて考えさせられた。関東は関東で、力の入った取材や特集が放送されているだろう中で、甲信越の各放送局がそれぞれ平日毎日別の番組を作り、それを放送することが正解なのだろうか。５０分間でがんばって作っているとは感じたが、少ない人数で大変な苦労をしているのだろうと思う。地域間で番組の乗り入れがもっとあってもよいのでないか。ローカルニュースが取り上げられることはよいことでもあるが、そればかりではやや間延びするとも感じた。ニュースに関してはもっと広域のものがあってもよいし、力の入った質の高い特集は甲信越でも放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

関東南側の１都３県では「首都圏ネットワーク」を午後６時１０分から放送している。水戸、甲府、新潟、長野は各局独自の放送を午後６時１０分から放送している。宇都宮と前橋は午後６時１０分から「首都圏ネットワーク」を受けるが、午後６時４０分からは独自で放送している。関東甲信越一体で放送をどう出していくのかについては、われわれの課題であることは間違いない。委員の指摘のような放送局間で素材を共有することもやっている。例えば関東の「首都圏ネットワーク」で放送した憲法７０年のシリーズ企画は、甲府でも

山梨県内の状況も付け加え、日にちをずらして放送した。その逆もあり、甲府局で制作したリニア中央新幹線をめぐる動きのリポートを「首都圏ネットワーク」でも放送した。各局で力を入れたものについてはできるだけ相互で活用することを目指している。これまでもやってきたが、より効果的な方法があるのかも検討していきたい。

「首都圏ネットワーク」のよさは、東京で作っているので、社会部などほかの専門の部署と連携して作りやすいという点だ。そうしたクオリティーの高いものはほかの放送局も活用したいと思うだろう。委員の指摘を踏まえて、よりよい地域放送を出していきたい。

○　オープニングの音楽がとてもさわやかだった。またスタジオのセットが絵本のようにかわいらしく、細部にわたり配慮されていると感じた。県内のさまざまな情報をきめ細かく発信する県域放送の役割を改めて考えさせられる番組だった。県域放送の情報は全国放送と違い、市町村で出される広報のように生活の延長線上にあると思った。それは自分の住む地域の一員としての存在を改めて意識することにつながるだろう。また、それぞれのコーナーを放送する目安の時間を知らせたり、子どもたちの絵の紹介の場面で、前回名前の漢字を間違ったことをおわびするだけでなく、もう一度その子の絵を紹介する配慮をしたりと、制作者たちの温かい心遣いを感じた。

○　親しみやすいセットとは思ったが、料理番組のセットのようで、やや目にうるさいかと思った。この時間帯に民放ではバラエティーのようなニュース番組をやっている。親しみやすさは重要だが、深刻なニュースを伝えなければいけない場面もあるので、ＮＨＫはもっとニュース的な色のセットでもよいのかと思った。内容は細部にまで取材をし、タイムリーでもあり、好感を持っておもしろく見ることができた。「かいドキ」というタイトルに驚いたことと、料理番組のような印象のセットのほかは、すばらしいニュース番組だったように思う。女性キャスターの衣装については、スタイリストなどがいたほうがよいと思った。女性の視聴者が多い時間帯だろう。夕食を作りながら、食べながら見るときに、すてきな衣装であればもっとよいのにと感じた。

○　熊本地震から１年、災害への備えを地域の問題として落とし込んでいた点はよいと思った。ＢＣＰの策定状況について市町村ごとに地図に色分けしていて視覚的に

分かりやすかった。自分たちの地域はこうなのかとパッとわかるので、地域の番組としてとてもよいと思った。「新倉山浅間公園桜まつり」の紹介はよかったが、リポーターが焦っている感じが強かった。早口になり、ことばが変なところもあった。そこはきちんとしたことばで一つ一つ焦らずに話せばよりよいと思った。一方スタジオでは出演されている方がゆったりとことばを選び、きちんとしすぎているほどで、やや堅い感じを受けた。スタジオでキャスターが「山梨の市町村全部を回ります」と言っていた。まだ二つぐらいしか回っていなかったが、全部を回ると思うと楽しみでもあるし、ネタのないところはどうするのだろうとも思ったが、心意気はすばらしい。有名なところ、ネタになるところへ行きがちだが、がんばって全部を回ってもらいたい。その町のよいネタをしっかりと取り上げると、その土地の人も「やっとわが町が出るか」と楽しみになると思う。

○　民放のローカル局と強烈に差別化しようという意識で作っているのだろうと思った。ニュース番組というよりは、生活情報番組として新たな挑戦を始めたというのが第一印象だ。セットは刷新されたが、衣装、全体のたたずまい、イメージづくりなど、見た目から入ってくる第一印象を何とかするべきだと感じた。それは東京の全国放送とローカルの予算のかけ方のギャップかもしれないが、スタイリストの問題も含め、地方局に対する支援をもっとするべきだろうと感じた。イベント情報のところで出演者にハンドマイクを渡していたが、ピンマイクぐらいは出演者分そろえるべきではないかと思った。甲府放送局は局に目を向けてもらうための活動をしっかりとやっている。「Ｎｅｗｓかいドキ」もいろいろな意味で成果を生み出してほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

地方局だから質が劣るとは考えておらず、少しでもよいものをと考えている。それを毎日続けることが大切だ。１本の番組に力を集約することは楽だろうが、限られたパワーでいかに毎日続ける態勢を維持していくかだ。自分たちが作っていて楽しい、おもしろい番組にすれば、それが視聴者にも伝わるのだろうと思っている。夕方６時台のニュース情報番組として、楽しい雰囲気、環境づくりを心がけている。それが職員、スタッフに浸透すれば、おのずとおもしろいものを継続して出せるのでないかと思う。頂いた意見を踏まえ、よりよいものを目指していく。引き続きよろしくお願いしたい。

○　平日夕方の山梨県の県域放送だが、全体としてとても好感を持った。スタジオの

セット、スーパーの出し方、各コーナーのロゴの作り方などが工夫されており、地方番組にありがちな東京との落差をあまり感じることなく、とても洗練されている印象だ。それでいて、地元の方をスタジオに招きコメントをさせるなど、地方局ならではの地域色もうまく取り入れていると思った。「かいてんき」の質問コーナーもおもしろい企画だし、「ぐるっとやまなしいってみ隊」のコーナーも、地図、問い合わせ先などがタイミングよく提供され、分かりやすく、これからの取材も楽しみだ。なんといっても山梨は富士山をはじめ、景観がきれいなので、それだけでも全国クラスのインパクトがある。毎日こんな番組が放送されると山梨県民はきっとＮＨＫが好きになるのだろうと思った。

＜放送番組一般について＞

○　４月２３日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　激震“トランプ時代”「第２集炎上ヨーロッパ～広がる“自国第一主義”～」を見た。大統領選挙を控えたフランスを中心にＥＵ内でまん延するポピュリズムを通し、フランスの現状、ドイツの現状、ＥＵの抱えるジレンマなどを伝える番組だった。極右政党の国民戦線の現在の活動方針、表面上は柔和に見えるプロパガンダの実態などを分かりやすく取材していた。ヨーロッパが築き上げた政治思想、社会規範に同化できないとして、移民を攻撃対象にしていること、正確な現状分析や現実的な戦略もなく、ひたすら他者、他勢力に対する非難を反復している事態を正確に分かりやすく伝えていたと思う。ドイツでの取材は過去のナチスドイツを例に挙げるなどし、分かりやすかった。現在のポピュリズムが単に右と左や、民族間の闘争でなく、資本主義の中の階級闘争という縦軸の闘争も多分に含んでいることがもう少し明確に入れられればおもしろかったのでないかと思った。

○　憲法施行７０年の関連番組はほとんど見た。４月３０日(日)のＮＨＫスペシャル「憲法７０年　“平和国家”はこうして生まれた」は今まで分からなかったことが明らかになった部分があった。例えば昭和天皇が憲法改正の調査を命じたこと、幣原首相がマッカーサーに戦争放棄を提唱した話などは新しかった。帝国憲法改正の衆議院小委員会をドラマで再現したのも分かりやすかった。

○　憲法改正に関するＮＨＫの世論調査は私も重要視しているし、大きなインパクトもある。５月６日(土)放送のＮＨＫスペシャル「日本国憲法　７０年の潮流～その時、人々は～」でも紹介していた、ＮＨＫが３月に全国の１８歳以上の 4,800 人を対象に行った世論調査では、「改正する必要があると思う」が４３％、「改正する必

要がないと思う」が３４％、「どちらともいえない」が１７％だったが、５月２日(火)発売の「ＮＨＫステラ」の番組紹介ではそれとは異なる数字が記載されていたことが気になった。いつのどんな調査なのかを書いてもらいたい。状況は刻々と変わっていると思う。数字は考えの材料の目安になるので怖いところがある。

（ＮＨＫ側）

世論調査はさまざまな規定に基づき、ＮＨＫの専門家のチームで行う厳格度の高いものだ。調査方法によっても数字は変わり、何通りも調査方法がある。委員から発言のあった数字は、ＮＨＫスペシャル「日本国憲法　７０年の潮流～その時、人々は～」でも紹介した、憲法に関する調査のデータだ。これは個人面接法という調査員が直接面談する方式によるもので、ＮＨＫでは 1962 年から１４回やっている。調査方法が同じで経年で比較できるということで１４回分を番組で紹介した。そういう調査とは別に電話による世論調査もあり、調査方法により異なるデータが存在する。世論調査の結果を紹介するときは調査方法、調査対象、調査日時を正確に伝え、混乱を招かないようにすることが必要だと思う。今後もそのあたりは徹底したい。

○　５月１３日(土)のＮＨＫスペシャル「巨大水中洞窟を潜る　絶景　オルダ“水の宇宙”」を見た。第一印象は、最近の映像の技術は高くなったということだ。ギドロコスモスは大きな空間で、氷点下４０度、水温も５度ぐらいのところを長時間潜り、撮影していた。照明がついた時、こういう世界があるのかと感動した。水が透明できれいで、周りの石灰層が真っ白で、今まで見たことがないような世界だった。４Ｋカメラでの撮影ということだったが、普通のハイビジョンカメラとは視聴者に伝わる臨場感が違うと思った。大画面で見ればもっと迫力があると思う。ナレーションは物静かでゆったりとしていて、映像に引き込まれるようだった。水温が低いので撮影は１時間が限界であり、狭い洞窟を通っているときに水中ボンベが壁に当たるなど、かなり危険な状態であったと思われる。洞窟で過去に２人がパニックになり亡くなったことも紹介していた。取材班の命の危険をどう考え、どんな形でリスクを管理し撮影を許可しているのか。

（ＮＨＫ側）

水中撮影は危険が伴うが、ましてや洞窟であれば水から上がっても空気が少ないので難しさは増す。予備タンクを準備

し、さらに奥へ進むという高度な下準備も必要だ。映像取材部という撮影を専門とする部の中に潜水の専門性を高めているチームがある。そのチームが１年をかけて準備と訓練をし、撮影に臨んだ。十分な下見をしたうえで危機管理上の問題はないか、現地のダイバーからもさまざまな情報収集を行い、どうやれば安全に撮影できるのかを検討した。海外の場合はさらに外国出張に関する委員会でも改めて検討し、最終的に許可を出している。その場での判断も必要になってくるので、現地には安全責任者がいる。フレキシブルな判断も含め、安全に遂行する準備と態勢を整え、臨んでいる。今回何の事故もなく、無事に終わったことに安どした。何かあったときにはすぐに撤退するような判断もためらってはいけないと伝えていた。水中シーンで警報音の鳴ったシーンは危険に見えたかもしれないが、予備の安全装置も持っていた。安全が担保されていることを確認したうえで撮影を遂行している。

○　すばらしい映像だった。危機管理については今回だけでなく、いろいろな取材の中で大切だと思う。番組では訓練などについても紹介していたのでよかったと思う。

○　４月２０日(木)のクローズアップ現代＋「脳がよみがえる！？再生医療大国・日本の逆襲」を見た。「クローズアップ現代＋」はなかなか取り上げにくい話題をよく整理、解説し作られていると思う。事故や病気で一命を取りとめた方の、そこから始まるさまざまな障害との闘いは、あまり取り上げられることはないように思う。番組ではそこに着目し、国の産業規制緩和をきっかけとしたさまざまな企業の動きを紹介し、国際社会で競争に勝つための日本の産業界のあり方を示唆するとともに、苦しんでいる障害のある方々に光を示すことができた番組だったのでないかと思う。かわいそう、どう応援しようということではなく、患者自身がどのように自分の人生を考えるのかという切り口も含んだ番組だったように思う。いずれにしてもこれからの産業は健康にかかわる分野がさまざまに成長を見せるだろう。そのような視点で患者に勇気を与える、希望を見せることのできる番組作りを継続してほしい。

○　４月２３日(日)の目撃！にっぽん「高校生ワーキングプア　旅立ちの春」、５月７日(日)のにっぽん紀行「俺たちがつくる高層ビル～東京・渋谷～」(総合 後 6:05～6:38)を見た。どちらも心が温かくなり、勇気をくれた番組だった。「目撃！にっぽん」では、６人に１人の子どもが貧困と言われているが、その見えにくい貧困の

現状を、２人の高校生を通じて知ることができた。２人は家計を支えるため、放課後から夜遅くまでアルバイトをしている。働いても自分の小遣いになることはないのに働き続け、貧困がどれほどの実態なのかを具体的に理解できた。２人は自分の置かれた環境を恨むことなく、家族のために、自分の夢を実現するためにがんばり続けている。その姿は涙なしに見ることができず、心を打たれた。家族愛のある、心ある２人は、ある面では幸せではないかとも思った。また東京オリンピック・パラリンピックを前に建築ラッシュの東京・渋谷で３５階建てビルの建設に従事する職人の若者にクローズアップした「にっぽん紀行」は、自分の仕事に誇りを持ち、ひたむきに働く青年のさわやかな笑顔が印象的だった。２つの番組で取り上げられた若者たちは特別な能力を持つ人たちではないが、一人一人が家族を思い、一日一日を一生懸命に生き、地上の星であると感じた。決してかわいそうでなく、彼らの力になるはずだと思った。ＮＨＫが丁寧にドキュメンタリー映像にしてくれたことに感謝したい。

○　５月８日(月)の「逆・転・人・生」(総合　後 10:25～11:15)を見た。山で遭難していた人が１４日目に救出されたという番組だ。沢に落ち、誰も助けに来ず、足がムズムズしたので見るとウジが湧いていたというシーンには驚き、そこからくぎづけになった。ミミズを食べたという話や、止血の話など、衝撃的な経験を伝えていたが、平行して専門家による遭難時の対応に関するノウハウの説明もあり、タイトルと内容がうまく合致していないように思った。セットはメルヘンチックで、実際に語られるドラマとあまりにもギャップがあった。出演者のコメントもいまひとつだった。最後は助かり、めでたく結婚し幸せになったが、最後まで焦点が定まらなかった。衝撃の実話であることは間違いないが、この番組をどう受け止めればいいのかが分からなかった。実験的に作ったのかもしれないが、もう少し何とかならなかったのだろうか。

（ＮＨＫ側）

「逆・転・人・生」のねらいが伝わらなかったことは反省したい。ある出来事の前後で人間はどう変わるのかというところが一番描きたかったことだ。今回のテーマは、民放でも「九死に一生を得る」たぐいの企画がある中で、どうやってＮＨＫらしさを出すかという視点で、スタジオの情報性を上げるというチャレンジをした。新しい開発番組なので、頂いた意見も参考にし、今度は褒めていただけるようがんばりたい。

○　「あさイチ」は、流し見をしてもよいし、深く見てもよいし、朝に見るのによくできている番組だと思う。他局ではその時間、ワイドショーのようなものを放送している。「あさイチ」は、日によって特集の内容が違い、流動的で、ワイドショーと違って見ていて心地よいと感じる。夜には「ＮＨＫスペシャル」のように考えさせられる番組があり、朝とうまく分けられていると思う。

○　５月３日(水)の「ニューヨークシェアハウス物語～夢をリアルに変える場所～」(ＢＳ１　後 9:00～9:49)を見た。シェアハウスに住む日本人の若者を通じ、ニューヨークの現在、夢を追い求める若者たちの葛藤を描いたドキュメンタリーだった。きちんと自分の夢に向かい、着実に歩み続ける日本人の姿を見せてもらい、奮い立つ思いだった。美しいニューヨークの映像も楽しみの一つだった。私はニューヨークに住んでいたことがあるが、日本人でニューヨークに住んでいる方々の前向きな精神が今もなお息づいていることにうれしさを感じた。昨今の日本の若者は安定を求めすぎる傾向にある。自分の夢を追って前向きな姿勢で海外に打って出る彼らは決して特別ではなく、自立する若者たちの一つの例として表現してもらえればと思った。

○　４月２２日(土)のスーパープレミアム「潜入！世界最高峰のマジック殿堂　マジックキャッスル」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 8:00～11:00)を見た。私はマジックが大好きで、放送を楽しみにしていた。ハリウッドにあるマジックキャッスルのことは以前から知っていたので一度は行ってみたいと思っていたのだが、会員の紹介がなければ入れないので残念だった。番組名に「潜入」ということばを入れ、簡単には入れないところにまさに潜入するという期待を視聴者に持たせたことはよかったと思う。番組はマジックを見せるだけでなく、創始者のエピソードなどマジックキャッスルの歴史や、マジックに関する本だけを集めた図書館を紹介し、門外不出の特別室まで案内してくれたのはさすがＮＨＫと思わせてくれた。気になったのはカメラマンの服装だ。皆がタキシードにブラックタイという正装だったが、カメラマンは普段着で、マジックの殿堂である場所のすごさが薄れた気がして残念だった。またゲストの出演者が「七つ、八つのガキ」という発言をしたことは不適切だと思った。修正できなかったのかという疑問があった。ほかの出演者で、元気で楽しく好感の持てるタレントについては、元気なゆえに笑い方が気になり、マジックキャッスルの客としては合わない気がした。日本人でマジックキャッスルの理事でもある緒川集人さんをはじめ、世界で最もすごいマジシャン１０人の技を紹介するという、すべてのマジックが奇跡のようなすばらしいものであり、視聴者も大満足だったと思う。ＮＨＫならではであり、今後も定期的に放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

ゲストはそれぞれキャラクターを持っている。発言を削ることでその方の持ち味が出なくなってしまうこともある。持ち味と発言の内容をよく考えたうえで、最終的に判断したのだと思う。

○　その出演者に対しては紳士のイメージがあったので、「ガキ」ということばが出てきて「えっ？」と思ったということだ。皆さんがそう思ったかは分からない。

（ＮＨＫ側）

ことばによって受ける印象は個人によってその度合いに差があると思う。ＮＨＫには、放送に出す、出さないのラインがある。これはいくらなんでもというものは、収録であれば外す対応はしている。その方の持っているキャラクターもある。委員の意見は現場に伝える。

○　作る側が意図を明確に持ち、採用しているのであれば、外からの声に左右されずに出したほうがよいのだろうと思う。

○　５月１２日(金)の新日本風土記「水の旅　潤いの道」を見た。日本の美しい映像、風土をいろいろな視点から楽しませてくれる番組だが、今回は日本全国の水のエピソードを取り上げたすごい構成だと思った。こんなにも長い間制作しているのに、アーカイブで見てもオンタイムで見ても、感嘆し、楽しめる番組はそうないと思う。これからも視聴者を飽きさせることのない、すばらしい番組を作り続けてもらいたいと思う。

○　新日本風土記「水の旅　潤いの道」はすばらしい番組だった。私は小さいころ「新日本紀行」の大ファンで、今でもテーマ音楽を聴くだけでジーンとするほどだ。そこで日本のイメージが作られ、音楽と一緒に頭の中に染みこんでいる。同様に、「新日本風土記」のテーマ曲、不思議な声の音楽を聴くと、懐かしいというか、不思議な気分になる。こういう番組は世代を超え、受け継がれていくし、アーカイブ性もある。消えていきつつある美しい日本の風景が、今の子どもたちにもきちんと伝わればよいと思う。ＮＨＫの宝として続けていってもらいたい。

（ＮＨＫ側）

「新日本風土記」のテーマ曲はオリジナルで、曲名は「あ

はがり」という。「あはがり」とは奄美の島ことばで、すべてが明るいという意味だ。「新日本風土記」は各方面で好評を頂き、ＢＳプレミアムの番組としては高い視聴率を得ている。引き続き制作を続けていきたい。

○　ＢＳプレミアムではＢＳ時代劇を放送している。今は時代劇が減っている。時代劇は一つの文化であり、日本人のかつての心情、暮らしぶりなども知ることができる。伝統芸能的な部分もあると思う。ＮＨＫは比較的しっかりと考証ができており、番組が丁寧に作られている。ある意味で心の故郷でもあり、心温まる時代劇を継続していってほしいと思う。

○　タイトルに４文字の番組が多いように感じる。「あさイチ」、「ひるブラ」、「ごごナマ」、「うたコン」、「オシばん」などがある。ＮＨＫらしくない。民放ならばよいだろうが、もっと具体的なタイトルのほうがよいと思う。ＮＨＫの若いプロデューサーはそのほうが受けると考えているのかは分からないが、その点は気になっている。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの番組名で４文字が増え始めたきっかけは「あさイチ」のように思う。「あさイチ」は「イチ」に朝に一番知りたい情報、朝の市場のように活気のある雰囲気など、いろいろな意味を込め、よく考えてタイトルをつけた。日本人は４文字にまとめるのが好きな傾向があると思う。「クローズアップ現代」という番組も、「クロ現」と言われるようになった。何でもかんでも短くすればよいものではないという声もある。「あさイチ」を始めたころに比べればだいぶ減ってきたが、そういう声があることも意識しつつ、適切で愛される番組タイトルをこれからも考えていきたい。

短いほうが視聴者はそのタイトルを言いやすく、そのほうがより親しまれるという感覚はあると思う。今の連続テレビ小説も「ひよっこ」の４文字だが、短くすることで、一つのイメージに縛られず、見た人によっていろいろと想像してもらうというねらいもあると思う。

○　ＮＨＫの番組は、私の生活に欠かせない存在だったと思う。そして私が見てきた番組と同じ番組を子どもも見ている。「ざわざわ森のがんこちゃん」、「おかあさんといっしょ」、「ラジオ体操」など、私が慣れ親しんできた番組を子どもと一緒に共有できる放送局はＮＨＫ以外にないのでないかと思う。番組制作に対する一つ一つのこだわり、品質の高さが、時代が変わっても愛されている理由だと思う。私は「ＮＨＫ手話ニュース」をずっと見てきた。当初は手話の勉強のために見ていたが、地味なイメージがあった。最近は出演者も専門家という堅さの殻から出て、雰囲気もカジュアルな感じになり、手話を通じた楽しい会話をされるなど、細部に工夫を凝らし、今の時代に合った作りをしていると感じる。「みんなの体操」も、昔は全員が立って体操していたように思うが、最近は高齢者や体の不自由な方への配慮からか、座りながら体操をしている方がいるなど、工夫がある。長寿番組として長く愛されてきた理由は、番組に対するこだわりに加え、時代とともに的確にニーズをとらえ、変えてきたことでもある。ＮＨＫはそこがすばらしいと思う。「ＮＨＫ紅白歌合戦」、「みんなのうた」、「ＮＨＫのど自慢」など、私の人生の中で、ＮＨＫの番組はいろいろな思い出とリンクしていると感じる。こうした長く続いている番組が、これからもずっと愛され、今度は私の孫と一緒に見られるよう、大切に続けてもらいたいと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年４月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２１日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、前橋放送局の最近の取り組みと今後の予定について報告があった。その後、ぐんまスペシャル「人口減少を乗り越えろ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委員	岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
	大山　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	国崎　信江（(株)危機管理教育研究所代表）
	野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
	原　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
	古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）
	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜ぐんまスペシャル「人口減少を乗り越えろ」

（総合　２月１７日(金)放送）について＞

○　人口減少と一見関係なさそうな“上毛かるた”が冒頭に出てきた。「力あわせる二百万」という札が読み上げられ、この札の数字が変わるかもしれない、とコメントがあった。群馬県の人口減少問題が深刻であることが視聴者に伝わったのではないか。グラフを使った人口推移の図や、少子化、高齢化、１０代～２０代の首都圏への流出など、人口減少の要因の説明も分かりやすかった。自治体による“婚活”支援、住宅用地の無償提供などの対策や、企業の雇用創出など、さまざまな取り組

みを紹介する流れもよかったと思う。企業の人手不足対策として紹介していた、女性や外国人労働者の活用事例は、他県の企業にもヒントになるだろう。視聴者からの意見を紹介した後に、その問いに答える形で、“買い物弱者”への支援などの問題を報告したのはよかった。番組の最後に紹介していた視聴者の意見については、時間がなくなり、取って付けたような感じがあって頭には残らなかった。また甘楽町からの中継で「ガールズ天下プロジェクト」の方の紹介の際、氏名のテロップがうまく表示されておらず気になった。番組の終了間際、関口健アナウンサーが小さな声で「あっという間でした」と言うのが聞こえた。関口アナウンサーの司会は好感を持ててよかったが、それを言うのであれば番組の中で言うほうがよいと思った。

○　人口が 200 万人を割っているという、群馬県の人たちのさまざまな努力を見ることができた。行政主催の“婚活”は全国あちこちでやっているが、本当に効果があるのか、また無償の住宅用地提供による移住政策は速効性があるものの、移住者の取り合いになるだけなのではないかと、何か物足りなさを感じた。それとは対照的に 4,000 万円の託児所を女性活用の先行投資と語る企業や、外国人労働に期待と感謝をし、ベトナム人たちに真摯（しんし）に研修する企業経営者の努力には頭の下がる思いだった。移動スーパー、朝市、乗り合いバスの事例では、住人一人一人が意識し、お互いを守り合うことが大切であることを改めて学ぶことができた。移住した女性たちが自分のこととして課題解決に取り組む「ガールズ天下プロジェクト」のネットワークは楽しそうに思った。番組で取り上げた課題はどれも日本全体の抱える課題でもあり、それぞれの地域の取り組みはとても参考になる事例だと思った。欲を言えば一つ一つの事例をもっと深く取材し、それぞれの優位性と課題を取り上げてほしいと思った。番組の最後に出演者の３人が発言した「つなぐ」、「覚悟」、「勇気」のことばはその通りだと思った。

○　群馬県だけではなく、ほかの地方でも起きている大切な問題だと思う。番組では地域の小学校の廃校の話もあった。保護者の気持ちを考えると子どもにはある程度大きな学校で学ばせたいという気持ちも当然あるだろう。“墓じまい”ということばは初めて聞いたが、ほかにも空き家対策、消防隊員の不足による防災対策など、地方で大きな問題になっていることだ。グラフによる分析はとても分かりやすかった。特に１０代～２０代の若者は大学進学や就職で極端に減っていることがよく分かった。自治体もいろいろと対策をしていたが、自治体の対策だけでは決め手がないと他の地域からも聞こえてくる。民間企業や、番組で紹介していた「ガールズ天下プロジェクト」など県外移住者から地域のよさをアピールしているのはよい構成だと思った。その中で、「つなぐキーパーソン」ということばが出てきた。いかに地域にいる人を生かし、地域のよさを表現するのか。人口減少を少しでも食い止め

られるような成功例になればと感じた。県外の取材はしなかったそうだが、ほかの地域の成功例も参考になると思う。各地での対策が成功例になっていけばと思った。

○　群馬県内に住んでいる方に人口減少問題を広く知ってもらうという意味では、分かりやすい番組だと感じた。一方で、群馬らしさ、群馬ならではの課題や解決策へのクローズアップが少なかったとも感じた。工場が多いという話など、番組後半に若干出てきたが、さらりとしていたように思う。私は高齢化問題と人口減少問題は分けて考えているが、移動弱者・買い物弱者といった高齢化問題の解決策の事例など、人口減少を引き止めるのとは若干違う方向性に振れているところも多いと感じた。中継部分で、移住者の女性が「群馬のよさは人がよいところ」とコメントをしていた。群馬県域の放送なのでそれでよいのかもと思うが、それは全国各地の移住者でも同様に言えることではないか。「人がよい」とは何なのかと突き詰めないと群馬らしさは出てこないのではと感じた。企業の方へのインタビューで「日本人のほうがいいとは思っているが」という発言があった。おそらく「コミュニケーションを取るには日本人がよいのだけれども」というようなことが前段にあったのではないか。「日本人がよいのだけれども」から始まると視聴者に誤解を与えかねない。実際に内容を見れば、積極的に外国人労働者にアプローチをしている企業だということが分かるが、もう少し取材対象者に配慮して編集したほうがよいのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

人口減少問題は、少子高齢化も含め、いろいろな要因が絡み合っている問題だと考えている。そのあたりの整理が分かりにくい部分もあったかもしれない。買い物弱者については、人口減少が要因で過疎地域の社会インフラがもたなくなっているケースの一方で、局所的に見れば、ドーナツ化現象などが要因で都市の中心部であっても問題になっているケースもある。そうした切り分けも必要だったかもしれない。指摘を頂いた企業の方へのインタビューについてだが、この企業は、ベトナムにある子会社の工場で雇った現地の方を、日本で実習生として受け入れ、日本のノウハウをベトナムに持って帰ってもらうことで、技術の移転と人手不足の解消を両立しようとしている。指摘いただいた発言については、一連のインタビューの流れの中で、委員の言うような前段を省略して発言されたのだと思う。

○　インタビューの相手が政治家であれば発言に気をつけているのでよいと思うが、一般の方はそこまで気を配っていないので、編集する側が配慮をしないといけないと感じた。

○　番組の構成自体は見やすく、各分野ともに丁寧に取材をされており、飽きることなく見ることができた。しかし、ＮＨＫにありがちな「おらが町自慢」の強調を感じ、人口減少問題に関して参考になる新たな発見や取り組みはあまり感じられなかった。ＩＴの進化、経済のグローバル化による労働者の賃金低下、1人の所得で家族を養うことよりも夫婦共働きで世帯収入を上げることを踏まえた施策などが地方の人口減少に与える影響など、もっと多角的に切り込んだ視点があってもよいのではないか。こうした番組で、最後はよくも悪くもその土地の人柄でまとめることがあるが、それはいかがなものかとも思う。地方制作の番組だからこそ、地方ならではのニッチな視点を入れることも必要だと思った。

○　人口減少の要因として少子化、高齢化、人口流出という説明があった。番組では人口流出にフォーカスして展開しており、その多くが１０代～２０代というデータを示していたが、その世代の人口流出に歯止めをかける直接的な問題解決策には見えなかったように思う。少子化を背景に自治体が開催する婚活パーティーに関しては、結婚しても子どもを持つかどうかは分からないし、それが若者の人口流出の歯止めになるのか疑問で、ストレスを感じた。移住者を誘致する多様なアプローチも確かに重要だと思うが、最初に人口流出のデータを示したのであれば、１０代～２０代の人たちが、自分の故郷の現状をどのように考えているのか、当事者たちの話があるとよかった。そのうえで、進学等で一度は首都圏へ出たとしても、戻ってきてもらうための施策などについて紹介があれば、問題提起と対策が一本化され、解決の糸口もより明確になったと思う。高齢化対策も、移住者増加も、人口流出に対する問題解決には当たらない気がした。番組の最後に紹介した６０代男性からのメッセージは、少子化対策、子育て世代、特に子育てママへの支援が不十分であるという内容で、まさに本質を突いていると思った。スタジオのセットにはローマ字で「ＭＡＥＢＡＳＨＩ」と連なって書かれていた。前橋放送局だから「ＭＡＥＢＡＳＨＩ」なのかと思うが、見ていてしつこいし、扱っている内容は群馬県内における問題なので、ミスマッチだと思った。美術セットも番組の雰囲気を作ると思う。その点も番組づくりの中で配慮してもらいたい。

○　人口減少に歯止めをかけるところに重点を置くのか、ある程度減ることはやむなしと考え、それでも地域の特性を生かした活力ある質の高い社会を作ろうということなのか。「人口減少を乗り越えろ」というタイトルにはその二つの道があったの

ではないかと思った。最終的にどちらに行きたかったのはよく分からなかったが、どちらかというと前者に軸足があったようにも感じた。下仁田町の土地の無償提供による移住政策については、行政の担当者が「ほかでやっていることではなく、ほかでやっていないことをやらないと進んでいけない」というようなことを言っていた。役所というと、前例がない、ほかがやっていないことはやらないと発想しがちな印象があるが、下仁田町はそうではなく、施策のよしあしは別としても、発想法としてすばらしいと思う。よそにないことをやろうという発想が多くの行政で出てくることが大事だと思うので、そういう意味で興味深く見た。下仁田町は副町長も出演したが、今までの役所の発想とは違うことをやりそうな雰囲気を漂わせており、今後が楽しみな印象を受けた。また中継で出演した「ガールズ天下プロジェクト」の方々はすごくよい人選だと感心した。どの方も発言が個性的で生き生きとしており、群馬県で楽しく暮らしている様子が画面から伝わってきた。テレビの力はそういうことではないかと思う。特に京都から甘楽町に移住した森栄梨子さんは、地域を変えてくれるエネルギーになってくれる人ではないかと思った。移動販売のパートでは、赤字の販売店側と購買者側が応援し合って、何とかよいことは維持しようという切実な思いが上手に伝わったのではないかと思う。全体としては総花的な感じで印象に残りにくかったが、番組のイメージは悪くなく、それは出演者や取材先の「人」の好感度が全体的に高く、それが見終えたあとの感覚につながったのだろう。それぞれよいことをやっているので、もっと掘り下げて紹介すれば、他の地域の参考にもなると思った。

○　群馬県は 2000 年に人口 202 万人を超えたが、現状は 197 万人に減った。2040 年には 163 万人になると試算されている。重大問題だ。人口がいちばん多いのは高崎市で３７万人だが、その大きな都市がなくなるほどの人口減少だ。ここまで深刻だとは思っていなかった。対策として重要なのは、人々が地域をどう守り、社会インフラを支えるかだ。出演者のフリーアナウンサーの奈良のりえさんが言っていた、“つなぐおせっかい”、人と人をつなぐキーパーソンも重要だ。「ガールズ天下プロジェクト」の女性のような人たちが移住してきても、過疎で保育園、学校、病院などが少なくなれば、結局大きな町へ出ざるを得ない。移住してきた彼女たちが生活する上での問題点なども、もっと掘り下げてほしいと思った。結論はとても出せないが、群馬県民にこの状況を認識させたのはよかったと思う。出演者の日本銀行前橋支店長には、数字をもっと挙げ、生産性、成長率の問題にも触れてもらえばよかった。日本は労働人口が減少し、成長率が低下している。人口減少が本当に悪いことなのか、人口が減れば労働生産性は上がるという指摘もあるが、どうなのか。また地域によっても状況は違うと思う。同じ県内でも、過疎化しているところもあれば、逆に増えているところもある。そうした人口が増えている地域についても取材して

ほしいと思う。スタジオの３人の出演者はよかった。行政の少子化対策など、自治体の対策はもっと具体的に掘り下げてほしかった。

○　深刻な数字を最初に提示し、いろいろな取り組みを次から次に紹介していた。特に印象的だったのが「ガールズ天下プロジェクト」の方たちだ。彼女たちの存在だけでかなり希望が見えるのではないかと思ったほどだ。ただ「ガールズテンカ」と言われてもよく分からなかった。かかあ天下があるからそうかと思ったが、字幕で早く出してくれればよかった。群馬大学のアイデア活用など、若い方のアイデアが入っていた。その流れで高校生、大学生の声がもっと入るとよかった。全体で見ると、一つ一つ地味な取材を積み重ねている番組だと思った。出演者も落ち着いており好感が持てた。仮にこの番組を全国放送するのであれば、問題点、課題などブラッシュアップしなければいけないと思うが、課題解決のヒントも随所に見られると思う。いろいろなことに取り組んでいて活気があり、「群馬も捨てたものではない」と元気な印象で終われたことは、地域の番組として大事なことで、よかったと思う。

○ 年間テーマとして人口減少に取り組まれ、１４回ほどの企画を放送したそうだが、今回の番組はその総集編というか、まとめの意味合いを持っているのか。

（ＮＨＫ側）

その通りだ。年間で取り組んできた集大成としての位置づけだ。テーマは多岐にわたっており、一つ一つでそれぞれ番組ができるぐらいの広がりだと思う。トータルで一つの番組にした時に、見えてくるものがあるだろうと思い、この番組を制作した。

○　ほかの人口減少についての番組を見ても思うのだが、なぜ人口が減ることが問題なのかを答えていないというか、見えてこないところがある。受け取り方によっては、人口が減ってよいこともあるわけだ。その意味で、人口減少がなぜ社会にとって問題なのかという切り口を最初に提示するとよかったと思う。人口減少の問題とは、成長を得ることができた２０世紀の仕組みと構造をそのまま使おうとしているから、無理が生じてきているということではないか。公共のあり方、行政のあり方など、今まで依存してきた仕組みに、市民、法人、さまざまな団体が取りかからないと社会がもたないのに、その担い手が減っていることが人口減少の問題の根っこだと思う。問題の根本がどこにあるのかという切り口をもっと提示すれば、いろいろな出来事、現象として起こっていることがそこに結びつき、なるほどと納得できる番組になったのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

頂いた意見を真摯に受け止め、次の番組づくりに生かしたいと思う。毎回新しいことにチャレンジしているつもりだ。今回は深刻なテーマでありながらも、どうすれば群馬県の希望、未来を提示できるかにチャレンジした。今後もより数多くそうしたことを提示できればよいと思う。意見をありがたく思う。

＜放送番組一般について＞

○　４月９日(日)のＮＨＫスペシャル「大地震　あなたの家はどうなる？～見えてきた“地盤リスク”～」が印象に残った。３月には東日本大震災、４月には熊本地震ということで、震災・防災関連番組が若干多いという印象を受けたが、「地盤リスク」は初めて聞いた話であり、興味深く見た。今まで地盤は強いといわれていた土地でも実は弱い部分があったり、首都圏の弱いところを新たに提示したりしていたのは印象的だった。今後どのような形でこの調査が運用されるのか、続編を含め、知りたいと思った。益城町で被害が大きかったのは古い民家の多いところだったが、事故が起きると消防法も建築基準法も強化されがちだ。そうなると、今後、古民家は駄目となりかねない。その運用に関してもっと別の視点で番組を作ってもらえると、多角的に捉えられてよいと感じた。

（ＮＨＫ側）

以前、「クローズアップ現代＋」で熊本城について取り上げた時、文化財としての価値と地震が起きたときの危険性にどう折り合いをつけるのか、問題提起したことがある。われわれが法律をどうしようという話ではないが、委員が指摘されたようなことについても、これから議論が出てくるのだろうと思う。ＮＨＫとしては、新しい知見に資するような、そうした議論や判断の基になるような情報を提供したいと考えている。

○　熊本地震から１年の節目に放送した、４月１６日(日)のＮＨＫスペシャル「熊本城　再建　“サムライの英知”を未来へ」を見た。ドローンを使った被害調査やＣＧによる映像再現などで被害状況を分かりやすく伝え、最新技術をうまく活用した

番組構成になっていると感じた。興味深かったのは、崩落した石垣で、築城当時のものは１０％で、明治以降のものは３１％だったことだ。一般的に考えると、時代が新しくなればそれだけ技術が積み重なり、より安全なものができると思っていた。以前、熊本城に行ったときに「武者返し」の話を聞いたが、「武者返し」の機能だけではなく、地震にもかなり強い構造になっているということが分かった。６年という短い年月で加藤清正は「武者返し」の構造を編み出したそうで、先人の知恵はすばらしいと感じた。熊本はあれだけの被害があったが、シンボルである熊本城が早く復興することは、地域の復興にもつながると感じた。こうした番組を丁寧に、興味を持てるような形で作っていってほしい。

○　ＮＨＫでは熊本地震に関するさまざまな番組を放送した。４月１６日(日)のＮＨＫスペシャル「熊本城　再建　“サムライの英知”を未来へ」は印象的だった。熊本城は甚大な被害を受けたが、中でも石垣の崩落は、熊本城の被害を象徴するほどの大きな被害であり、多くの方が切ない思いをしていた。そんな中、築城当初に作られた石垣の多くが今回の地震に耐えていたという事実に衝撃を受けた。直線ではなく、「武者返し」で緩やかに反って積み上げられている石垣が、驚くことに現在の最新科学による構造計算にぴったりはまるそうだ。過去にそのような高度な計算がされていたことに驚いた。熊本城の再建が進む中で、絶妙な、タイムリーな番組だった。検証の結果が熊本城の石垣の再建などに生かせればと願う。

○　４月１６日(日)のＮＨＫスペシャル「熊本城　再建　“サムライの英知”を未来へ」について、ＣＧの制作や、ドローンの活用などは、その後の画像処理やデータ解析も含め、ＮＨＫが行っているのか。

（ＮＨＫ側）　外部の方の協力を得ていないかは確認しないと分からないが、ＮＨＫが中心となり、ＮＨＫが主体的に行っているのは間違いない。

○　そういうチームを編成しようというのが新しい視点だと思った。さまざまな番組を通じて、熊本地震の被災地の傷跡や出来事を風化させないように語り継いでいこうという流れがあることを理解した。このＮＨＫスペシャルについては、今までどちらかというと「人々の生活」を中心に伝えていたのが、今回は「人々の心の支えの象徴」を扱ったという意味で、切り口の変わった番組になったのだろうと思った。築城当時の人たちの知恵が現代人よりも後れていることを前提に語っていたが、先人たちの知恵、知識に対する敬意のようなものをもっと前面に出してもよかったのではないか。蓄積してきた文化に対する誇りのようなものを、確認する機会があっ

てもよかったのではないかと思う。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」がスタートした。主役もすばらしいが、脇を固めている役者がよい演技をしており、とても迫力がある。また企画がよく練り込まれている印象だ。東京周辺の農村の人たちは、東京を絶えず意識し、これからもっとよくなると思いを抱いていた時代だ。そのあたりの感覚が、セリフ、設定の節々によく織り込まれていると思う。ボンネットバス、３輪のトラック、さりげなくかけてあるフラフープなど、美術もよく行き届いていると思う。古谷一行さん演じる茂は、いつも手を休めずに縄をない、わらを打ち、本当に当時の田舎のおじいちゃんを表現していると思う。とても期待しているが、その思いが強いだけに気になるところもいくつかあった。４月２０日(木)の放送は１０月１０日の東京オリンピック開会式の日だったが、庭先に国旗が掲げてあった。そのときは国旗を掲げるということはしていなかったように思う。

○　３月２２日(水)の「東京ミラクルシティ」(総合 後 10:50～11:15)を見た。2020年に向け、東京の魅力を世界に発信するプロジェクトとして、３人のクリエイターが、それぞれ「在日外国人」、「若者」、「女子中学生」の撮影した映像を編集し作品を作り出すという番組だった。材料となった市民が撮影した映像もすばらしかったが、その映像を一編の詩のような作品に作り上げたクリエイターの技術、感性に鳥肌が立ち、無意識のうちに映像に吸い込まれるようだった。それが３本も続くのは奇跡的なことだと思う。全体でわずか２５分という短い番組だったが、濃厚で、研ぎ澄まされていた気がする。ドキュメンタリーの形としては実験的だが、番組としてのリズム感もよく、世界に発信できる内容だと思った。このような番組はＮＨＫしか作ることができないと思う。第２、第３弾といろいろな市民、クリエイター、ディレクターを起用し、刺激的な新しい映像の世界を見せてほしい。

○　４月７日(金)の金曜イチから「“食卓目線”で見る　豊洲移転問題」を見た。知りたい話題を厳選し掘り下げるというテーマどおり、日本中の関心を集めている築地市場の移転問題を取り上げたことは大変よかったと思う。ただ、豊洲に移転した場合、築地というブランドがどうなってしまうのかももう少し掘り下げてほしいと思った。また出演者のタレントと専門家の衣装はギャップがあり、アンバランスに見えた。タレントの女性は、話の内容については理解しており、全く問題がないので、パーティードレスのような服装に違和感を覚えたことは残念だった。ある程度は話題に合った服装にしたほうがよいと思う。番組では築地市場の水産物の取扱量が年々低下していることなどを分かりやすく説明し、豊洲市場の模型も置いていた。ただ、背景のスタジオセットには話題と全く関係のない小道具が置かれてあり、肝

心の市場の模型があまり目立たない感じがしたので、もっとセットとのバランスを配慮してほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

「金曜イチから」は、視聴者の関心のあるニュース、話題をイチから分かりやすく掘り下げようという新番組だ。硬軟織り交ぜて、いろいろなジャンルの題材を扱おうとしている。今回は、豊洲市場移転問題のようなジャーナルなテーマについて、魚、流通という食卓目線で展開した。トレンドものなどもテーマに扱っていきたいと考えている。セットについては、黄色をベースにし、出演者がカフェのようなくつろいだ雰囲気の中で気軽に話しているような感じにして、気楽に見ていただくねらいでこのような作りにしている。以前の「特報首都圏」は青みのある、わりと堅いジャーナルな印象のセットだったが、もっと柔らかな印象にしようという意図だ。委員からの指摘は貴重だ。いろいろな意見を参考にし、内容はもちろん、セットについても考えていきたい。

○　４月１２日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」のけさのクローズアップ「がん患者が歌う“魂の第九”」を見た。がん患者たちが家族、医師と一緒にベートーヴェンの「第九」の合唱曲を一生の思い出として練習し、世界的指揮者の山田和樹さんのタクトで見事に歌いきるという内容だ。さまざまな治療法ができているものの、がんはまだ死を想像させる病気であり、宣告された人は誰もが落ち込み、その治療には強い覚悟を持って臨まなければいけないのが特徴だと思う。がん患者たちが共に練習を重ね、本番で歌い上げた場面はうれしく、希望を持つことができた。「第九」は難しく、何も見ずに歌えるようになるまでの苦労はよく知っているが、余命を宣告された、またつらい治療に耐えているがん患者にとって、「第九」を習うことそのものが張り合いであり、生きる希望になっていると思った。一流のオーケストラの演奏、一流の指揮者のタクトで、その一員となって歌うことは、タイトル通り、魂が震えるほどの感動に違いない。この「第九」の演奏が日本中に広がればよいと思った。

ＮＨＫを一番多く見ている人は誰だろうと考えると、寝たきりの高齢の人などが思い浮かぶ。番組の場面の切り替えのときなどに、全員に対してではなく、そういう人たちに向けたメッセージを言ってもらうことはできないか。９９％の人には必要ないメッセージだとしても、１％の人には自分へのメッセージと映り励まされるのではないかと、番組を見ていて思った。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫをよく見てくれるのは高齢の方が多い。キャスターのちょっとしたひと言かもしれないし、文字スーパーかもしれないが、委員が指摘したような、個人の気持ちに配慮した温かなことばの投げかけはあるかもしれない。災害のときもそうだが、アナウンサーはどういうことばが心に響くかを常に研究している。今の指摘も踏まえ、メッセージのあり方を考えたい。一方で、若い世代に見ていただく取り組みも深めなければいけない。若い世代への発信も含め、メッセージの発し方を研究していく。

○　４月１９日(水)の明日世界が終わるとしても「難民支援・田村雅文　シリアに帰る日まで」(総合 前1:45～2:34)を見た。田村雅文さんは自身だけではなく、妻も、小さな子どもも連れ、家族でシリア難民を現地で支えている。シリア難民の中には、シリアに帰りたいと強く思っている人も多くいるが、希望を持てども情勢はいまだに不安定で帰れない。そんな彼らが希望を失わないように、田村さんの家族が支えている。個々に深刻な悩みや問題を抱えており、田村さんも自分に何ができるのかという思いを抱きながら奔走している。そういう問題に対して、日本人として、また個人として、何か解決策があるのかと考えた。直接的な答えは出せないが、田村さんの活動を通じて、彼らに希望を失わせないことの大切さと、未来を信じる人の強さが世界を変えるのではないかということを感じ取ることができた。日本にとっても、シリアの状況はひと事ではない。数年前まで平和に暮らしていたシリアの人々が、あっという間に戦渦に巻き込まれ、難民となってしまったのだ。明日世界がどう動くのかを考えると、わが国も危うい情勢の中にいるという危機感を持ちつつ、平和を願い、シリアの市民や難民に心を寄せなければならないとも思った。シリアに関しては、引き続き報道していってほしい。

○　「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で４月からスタートした７時台の「けさのクローズアップ」というコーナーは、とてもおもしろいが、朝で出勤時間と重なり、最後まで見られないつらさがある。朝の企画としてはやや長い時間で伝えていて、だからこそ中身の濃いものが出てくるのかと思うが、夜などに再放送で見られるような工夫を検討してもらいたい。

○　「Ｅテレ０６５５」と「Ｅテレ２３５５」はわずか５分の番組だが、とてもおもしろい。「Ｅテレ２３５５」は１日の終わりの５分間という時間帯をうまく利用し

て制作している。ホッとするというか、今日も終わりか、朝はまた頑張るぞという気持ちになる。民放ではできない貴重な番組だと思う。佐藤雅彦氏が監修しているそうだが、季節にちなんだものを入れ、「日めくりアニメ」がおもしろい。バックに流れるハイドン、ガボットなど、季節感を持った音楽や、ネコ、イヌなどもうまく使っている。

また、Ｅテレには「にほんごであそぼ」という子ども番組があるが、大人が楽しめる一流の映像素材を使っており、見入ってしまう。こうした番組に感謝している。

○　ＮＨＫ全国学校音楽コンクール（Ｎコン）の課題曲が発表された。中学校の部の課題曲は、秋元康さんの作詞で、ＡＫＢ４８が歌う曲の合唱編曲版だ。今までもいきものがかり、アンジェラ・アキさんなど、中学校の部はポップス系の曲を合唱版に編曲し、課題曲にしている。よい曲も多くあるし、ポップスだから悪いと言うつもりはない。ただ、番組ホームページには、模範演奏としてＮＨＫ東京児童合唱団が歌っているものと一緒に、ＡＫＢ４８が歌っているバージョンも載っている。曲のよしあしを言う立場にはないが、合唱としては発声方法なども違うので、コンクールのページにそれが掲載されているのはいかがなものかと思った。Ｎコンに出場する生徒たちはまじめに発声や音楽の勉強をし、課題曲をいかに歌うかにすごく苦心している。その子たちにやる気を持たせ、競うにふさわしい曲にしてほしいと思う。甘く見ているわけではないと思うが、現場の生徒、先生たちの期待にたがわないようにしてほしい。同時にコマーシャリズムのようなものがコンクールに影響しないようにしてもらいたい。影響していると断定するわけではないが、課題曲に選ばれると「ＮＨＫ紅白歌合戦」でも大抵歌われ、売れるように思う。コマーシャリズムが子どもたちの純粋なコンクールに何らかの影響を与えるのはＮＨＫのやることではないと思うので、注意してほしい。県によってはコンクールに参加する学校の質は非常に高い。今後の対応についても重々考えてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

近年の「Ｎコン」の中学校の部の課題曲は、アンジェラ・アキさん以降、中学生からの関心が高く、興味を持っていただけるような方の曲をお願いしている。今年はＡＫＢ４８の曲になった。委員から指摘のあったようなことについては、厳しくチェックし、検証する。われわれとしても大切なコンクールなので、間違いのないよう真摯に対応する。

○　スポーツが分かりやすくなった。４月１日(土)に再放送した「２０年ぶりの五輪切符をつかめ！まもなく開幕カーリング男子世界選手権２０１７」（ＢＳ１　前

11:00～11:49)を見た。カーリング男子世界選手権２０１７に出場し、２０年ぶりのオリンピック出場を決めた日本の男子チームのＳＣ軽井沢クラブを特集した番組だった。カーリングはルールがいまひとつ分かっていなかったが、こんなにおもしろいのかと、すごい技に感嘆の声を上げた。また４月２日(日)のスポーツ酒場“語り亭”「とことんカーリング男子日本代表」(ＢＳ１　後 11:00～11:49)も見た。オリンピック・パラリンピックでルールが分からないスポーツは山のようにあると思う。分かりやすい解説をしてもらえると、楽しみも広がると思う。

○　３月１９日(日)のＢＳ１スペシャル「失われた大隊を救出せよ～米国日系人部隊英雄たちの真実～」(ＢＳ１　後 7:00～8:49 〈一部ニュース中断あり〉)を見た。日系人の苦労が分かり、参考になった。

３月２５日(土)のＢＳ１スペシャル「女たちの変革～トランプ大統領後の世界を生きる～」(ＢＳ１　後 7:00～7:50)を見た。アメリカという民主主義を代表する国でもこのようなことになっているのかと衝撃を受けた。

３月１８日(土)の「映像の世紀コンサート」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　後 3:00～4:29)の再放送を見た。加古隆さんのピアノ演奏とともに巨大スクリーンに「映像の世紀」の映像を映しており、説得力があり、感動した。

○　４月８日(土)の「絶景　巨大石柱林～中国・張家界を鳥観する～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:29)を見た。中国湖南省にある世界遺産だが、映像のすごさを見せつけてくれた。現地のトゥチャ族の集落を取材しており、まるで日本の東北の曲り屋のような趣で、私たちのルーツはあちらではないかと感じさせるような祭りの風景もあった。これから何年かすると消えてしまうであろう風俗をきちんと映像として残し、アーカイブ性もあるすばらしい番組だった。４か月待ってようやく撮影できた霧の流れる風景など、長期取材でないと絶対に撮影できない映像だと思った。こういった番組に対して、きちんと予算化して続けてほしいと思う。

○　「ラジオ深夜便」をよく聴いている。３月３１日(金)に放送した保阪正康さん「私の昭和史を語る」がとてもよかった。ぜひ続編をやってもらいたい。当時の音声も使っていて説得力があり、よい番組だった。

４月２１日(金)の「ＮＨＫマイあさラジオ」で、小さな町だが人口が増えているという宮崎県三股町の紹介があった。子育て支援、児童の医療費無料、豊かな自然、食などをキーワードに挙げており、とても参考になった。

○ 栃木県で雪崩事故があった。登山講習の高校生７人と引率の教員１人が亡くなり、４０人がけがをした。その時期は表層雪崩が起きやすいと地元の人が言っていたと

いう話があるが、そんな中なぜ強行したのかが問題になっており、県では検証委員会を立ち上げている。「とちぎ６４０」の中でもその事故を多く取り上げていたが、アナウンサーはことばに気を遣って伝えていた。これから事故が究明され責任の所在もはっきりするかと思うが、丁寧に表現している印象を受けた報道だった。

○　私は子どもの頃に「ＮＨＫの方が話していることばが正しい日本語で、立ち居振る舞いを見ていれば間違いない」というようなことを学校の先生から言われて育った。地域放送でネクタイの曲がっているＮＨＫのアナウンサーがいた。全国放送ではこのようなことがないのに、ローカルではこういうことが起こるのかと気になった。細かいことだが、一生懸命に取材をし、仕上げ、本番は最後の詰めなので、次からはそういうことが起こらないようチェックしてほしい。４月５日（水）の「ニュースウオッチ９」での、牛丼屋の新メニューについての取材では、うどんの試食で落語家がそばを食べるように「ズズズズ」と食べていた。４月９日（日）の午後８時４５分の「ニュース・気象情報」での埼玉県ときがわ町のお祭りのニュースでは、アナウンサーが「埼玉県と、きがわ町」と変なところで区切りを入れ、アクセントがおかしかった。地域のニュースなので、地域の地名はきちんと読むべきだ。事前に下読みをし、確認すればそういう問題は起きないだろう。マニュアルには書かれていない、個人に委ねられているようなところで「えっ？」ということが散見される。こうしたことが起こるたびにチェックをし、ＮＨＫはこうである、という共通認識をもって取り組むことが大切ではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

地名の「ときがわ町」が「と、きがわ町」と間が空いて聞こえたということは、小さなことではなく、われわれにとって本質的なことだ。ニュース、情報を伝えるときに固有名詞は正確に届くことが何よりも大事だと考えている。新人の研修でも、地名の読み方を丁寧にお伝えすることに時間を割いている。地名が正確に届かなかったのであれば、基本に立ち返り、きちんと反省すべきことだ。小さなことではなく、きわめて重要なことであり、情報伝達の基本だと考える。ネクタイについての意見も頂いたが、個人の趣味、柄、好みということを超え、肝心なのは、「曲がったネクタイでニュースを読むと、伝えるべき情報が届かなくなる」ということだ。それは、曲がったネクタイに気を取られ、そのニュースのかなりの部分が頭に残らなくなってしまう可能性があるということだ。われわれはそれを「雑情報」と呼んでいる。髪がボサ

ボサであるなど、いろいろなことが雑情報になりうる。雑情報を出さないためにどうするのかということも、きちんと研修で指導している。食べ方についても、食文化の専門家を招いて勉強会もやっているが、なかなか行き届かないところもある。引き締めていきたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局